

---

# シャボン玉の恋

小田原アキラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シャボン玉の恋

### 【Nコード】

N0952A

### 【作者名】

小田原アキラ

### 【あらすじ】

美香は田舎町に住む高校生。つき合って3ヶ月の彼とはラブラブだったが、彼は事故でいろんなものを失ってしまった。そこからはじまる、二人の新しい恋。

## 第一話 事故

あたしの住んでる所は山に囲まれた、田舎町。家の周りは田んぼぐらいしか無くて、夏はカエルの大合唱が夜中にまで聞こえて来るほど。それでもって、小学校は30分以上かかるような所だし、中学もチャリで30分かかった。でも、高校だけは近くてチャリで15分の所にある。地元の高校ぐらいしかあたしには行くところなかったし、友達のほとんどがそこだからあたしにはナイスな学校だ。

それでも、一学年だいたい九クラスから十クラスはある。田舎でも人はそこそこいるんだなあとつくづく感じる。駅も近いし市内に行くのは簡単だ、多少時間はかかるけど。ここはのんびりとした町だった。町の人皆が、穏やかなわけじゃないけどあたしには住みやすいところだ。山も川も何もかもが身近にあつて、あたしは虫も恐くないし動物は好きだ。田舎くさいってあたしは見られるのかもしれないけど、住んでるとこが田舎なんだからしょうがない。あたしはここが誇りなんだから。

6ヶ月前にあたしは彼に出会って、一目惚れした。それから三ヶ月後にあたしと彼はつき合うようになった。奇跡のようだった。人と人の気持ちの重なり合うコトの素晴らしさを自ら感じて、あたしは有頂天になった。彼は、とりあえず爽やかな人で、これといって目立つようなコトはないのに、あたしは惹かれてしまった。友達から見ても、どう見てもカッコイイとは言えないし、冴えないとまで言われた。でも、逆にそれが嬉しくなった。あたしには、ライバルがいないってコトに。

彼のことは一緒にいればいるほど好きになった。ベタベタするような関係じゃなかったけどあたし達は、好き合ってた。

でも、事件は起きた。あれさえなかったら、あたしの人生は薔薇色だった。

それはあたしと彼が、車道の側を歩いてるときだった。車なんてほとんど来ないのに、そのときに限って車はやって来た。そして並んで歩くあたし達に気づかず、ぶつかって来た。

夜だったから、あたし達の姿が見えなかったらしいが、あたしは無事だったのに彼は大怪我をしてしまった。3日間目が覚めないままだったけど、彼は目を覚ましてくれた。それがどれだけあたしを安心させたコトか、一言ではいい表せない。目が覚めるまで側にいたから、すぐに彼のそばに行っただけど彼の反応はあたしにはとても想像できるようなもんじゃなかった。

「・・・だれ？」

記憶喪失。彼の頭の中では様々な事故が起こっていた。強く打ち付けたせいだと聞いたけど、あたしには信じられなかった。彼はあたしを忘れただけじゃなかった。

## 第一話 事故（後書き）

今回は女の子が主役です。

切ない話というのは上手く書けないのですが、頑張っ  
てかいて見ようとおもいます。

どうぞ、最後まで見ていってください。

## 第二話 変化

「？」

彼の頭の上にそんなマークがついていないのがおかしいぐらい、彼はあたしのコトを不思議そうに見つめた。

あたしは彼の両親に挟まれたまま、彼の眠るベットに手をついた姿勢で彼の顔を目を見開いてみていた。あたしの隣にいる彼の両親も驚いてる。

彼の母親が、手を握りながら彼に話しかける。

「秀司？ 何言ってるのよ、美香ちゃんよ」

彼は母親を見てからじつとまたあたしを見た。ばたばたと、廊下の方から足音が聞こえた。

「母さん、オレ知らないんだけど？ 誰のこと？ 美香ちゃんって？」

これには父親の方も身を乗り出して彼の顔を見た。

「本当に、美香ちゃんを分らないのか？」

彼は頷いた。あたしは涙を堪えるのに必死だった。鼻の奥がつんと痛くなつて、目頭が熱くなる。それでも、彼はあたしを不思議そうに見ていた。母親のコトも、父親のコトも覚えているのにどうして？ あたしを忘れているの。

大きな音がして、医者が病室にはいつて来た。すぐに彼を見ると、両親に礼をしてから話しかけた。

「気分はどうかな？ どこか痛いところは？」

「頭が痛いけど、怪我してるからだと思う。でも、なんかおでこの辺がおかしい」

医者は彼に起きれるかと聞くと、すぐに起こして包帯を取った。あたしは顔を背けてそこを見ない様にしていたが、傷は深くはないらしい。

「ここかな？ ここは痛い？」

「うん」

医者はしばらくそこを調べるように眺め回すと、すぐに新しい包帯に取り替えるように看護婦に指示した。それから、あたし達の方を見た。

「息子さんに変わった様子は？」

「あの、記憶喪失しているようなんですが」と母親が言った。

「え？ でも先ほど話しておられたじゃないですか」

「ちがうんです。私達のコトは覚えているのですが、この子のことだけすっかり、忘れてしまってるんです」

彼の母親はあたしの肩をぎゅっと掴んだ。その力からあつたかいものが広がって、あたしはついに涙を流してしまった。医者はもちろん、こちらをみていた彼も明らかに驚いていた。

「それは、一時的なものかもしれませんが。珍しくないんです、頭を強く打った衝激に寄るものでしょう。すぐに思い出してくれますよ」

医者の言葉にあたしは力なく頷いた。

「その他には？」

今度は父親の方が答えた。「何もありませんよ」とすると医者は唸るような声を上げた。

「今はまだ分かりませんが、彼は前頭葉の方を強く刺激した様で、もしかすると変化がこれから現れてくるかもしれません」

「変化とは？」

医者は彼に聞こえないように注意しながら言った。

「人格が変わるかもしれないというコトです」

両親と医者が出て言って、詳しい話合いが行われるあいだ、あたしは彼と二人つきりになってしまった。

やっぱり不思議そうに見てくる彼は、あたしの心を苦しめる。そんな目で見られるのは初めてだし、こんな風になってしまったのも

初めてだ。あたしはだんだんと流れてくる涙を懸命にハンカチで拭いていた。

「なあ」彼は体を横にしながら言った。「あんた、オレのなんだったの？」

彼の言葉に違和感を感じた。どこかなにかがいつもと違って聞こえる。でも、なくコトに必死で、あまりよく聞こえてなかっただけかもしれない。

「恋人でした」

「え！ うっそ！ お前が？」

あたしはまたも予想外の反応に驚いた。明らかに、おかしい。言葉遣いがそうなのかもしれないが、反応もおかしい。こんな風にオバーなりアクションを見せたコトがあつたらうか？

「なあ、マジ話？」

嫌そうに言うのであたしはよけいに泣いてしまった。

「そ、そうよ。何か悪いの？」

「い、やあ、オレって変わった趣味だったんだと思って」

だった？なんで過去系なんだ。急にあたしは気がついた。医者の方で言っていた言葉を思い出して、彼の今までの会話にあてはめた。彼はオレってという人だったか？あんなに驚く人だったか？あたしを馬鹿にしたような目で見るか？全部が今までとは違う。

「秀司よね？」

もしかして違う人になっっているんじゃないのではと、恐る恐るきいた。

「そうだけど」

「そうよね」

「でも、あんたのコトは知らないよ」

そんなコト言わなくてもわかつてるし。あたしはまた流れて来た涙を拭った。きっと始まってしまったんだ。彼は前の彼ではなくなつた。人格が変わってしまったんだ。

「あたしのこと、なんとも思わない？」



あたしは少しでもいい方に答えを考えたけど、外れた。

「思わないよ」

笑って、いつもと同じ顔で笑って言った。あたしはもうそこにいることができなくなった。

### 第三話 変貌

全てが音を立てて崩れていく。決して時間は戻らない。

彼の病室からでるとすぐに彼の両親と顔を合わせた。その後、廊下で彼の母親と話をした。一人っ子の彼の彼女であるあたしは、家に行くことも多かったから母親とは仲が良かった。

廊下であたしの肩を抱きながら、話をした。彼は前頭葉の部分に刺激が与えられ、脳自体に傷はなかったものの人格を作る機能が変化し、人格が多小もしくは180度変わってしまうそうだ。すぐではないかもしれないが、確実にゆっくりとそれはやってくるらしい。あたしはさっきの彼の態度でもう分かってしまった。はじまってることに。

おばさんの胸の中であたしは何度も声を上げてないでいた。悲しいし、苦しい。彼があたしのコトを忘れて、それでいて人格が変わってしまうなんて、ひどすぎる。

それから、もう彼に会いに行くことはしなかった。彼を見るだけで辛くなるし、あたし自身も落ちついて物事を見定める必要性を感じたからだ。でも、なかなかあたしの頭は彼の現状を理解しようとしなかった。何度も彼の言う言葉を打ち消して、次に会った時にはあたしを思い出すはずだと考えた。なのに会いに行くのが恐くなって、結局行けないままになってしまった。あたしは、これからどうすればいいんだろう。

「そっか、そんなことあったんだ」

友人の佳枝がポツキーをくわえたまま言った。あたしの家に来るのは久しぶりのはずなのに、すっかりくつろいでしまっている。こたつの中に足を伸ばして、あたしが足を伸ばすスペースを消している。「でもさ、別に会いに行ったらいいんじゃないの？ 何が恐いのよ？ 彼女なんだから全然いいじゃない！」

「そうかな？ 恐いのは、あたしのコトを知らない人って目で見る  
ところなのよね。それで言うのよ、あんた誰って？ そんなこと何度  
も言われたら、あたし耐えられないし」

目に涙が溢れてくる。顔を隠すようにこたつの中に潜った。

「うーん、まあ、それはそうかもしれないけどね。ねえ彼は美香の  
コト思い出す可能性はあるんでしょ？ そんなに落ち込まないで気  
長に待ちなよ」

気長にか。そんな簡単なものじゃないんだよね。あたし達はまだ  
三ヶ月ぼっちの付き合いで、短すぎる恋愛はそうかんたんに冷め  
りはしない。それがあたしを苦しめて、苦しめて、追い込むのよ。

あたしはこたつの中からはい出て、佳枝を見た。

「とにかく、明日から学校に出て来るらしいの。どうにか話す努  
力はするわ」

がんばれ。佳枝はまたポッキーを食べはじめた。

翌日に確かに彼は来た。頭の方も、包帯も取っているしそれほど  
事故の傷は目立つ様子はなかった。でも、明らかに何かが変わって  
いた。それに気づいているのはあたしだけじゃなく、彼と仲のいい  
男子達にも感じられ、クラスの皆もどこか違う彼に戸惑っていた。

髪の毛は短くカットされていて、制服は今までの彼では考えられ  
ない格好（腰パンにシャツは出しっ放し）で、目つきはあの優しそ  
うなたれ目ではなく、鋭いつり目になっている様に見えた。それで  
もって、イスに座る時に大きな音を立てて、偉そうに座る姿も見た  
コトない。人の目を多少気にして生きてきた彼とは思えない、堂々  
とした態度。その日のあたしを含めたクラスの全員および、担任教  
師たちは彼の変貌ぶりに啞然とするばかりだった。

結局、誰もが彼に話しかけるコトなくその日は終わった。が、あ  
たしは授業が終わると彼に声をかけられた。

「美香ちゃんだっけ？ ちょっと話したいんだけど」

あたしは佳枝に背中を押されて、気の抜けた返事をしたまま帰り

道を並んであるいた。本当はチャリがあるんだけど、彼が歩きだと聞いたから歩くコトを選んだ。しばらくあるいて、適当にすわれる場所を見つけると、そこに座り込んだ。川の近くの場所で、なぜか石のベンチがある。草がいっぱい生え過ぎて空き地みたいところだけど、夕暮れがキレイに見えるし悪くない。

「あのさあ、母さんから聞いたけどあんたオレの彼女だったんだっけ？」

あたしは彼の馬鹿にしたような目を見るのが恐くて、目をそらした。

「そうよ」

「ふーん。オレってあんたのコト好きだったの？」

「そうよ」

「つき合ってたんだから、そりゃそうか」

彼は短く笑った。くくつという喉の奥から出す声は懐かしい。あたしが真剣な話をする最中によくそんな笑い声を上げてあたしを怒らしてた。

「オレ、まったくあんたのコト知らないのになあ。っていうか、趣味悪かったんだなオレ」

今度は声を上げて笑いだした。あたしは自分が美人でもカワイイ顔じゃないコト分かってるから、あえて何も言わなかったけど涙だけは出て来た。

「あ、また泣いてんの？」

「話って何よ！ 早く言いなさいよ！」

あたしは泣いたまま怒って言った。胸がちりちり痛む。彼はまた馬鹿にしたように笑うと、あたしにハンカチを差し出した。ひったくるようにそれを取って涙を拭うと、彼は話しはじめた。

「オレらって彼氏彼女だったよな。で、今はどうなの？ オレはあなたのコト知らないし、付きあうきないんだけど」

ハンカチが涙の量に追いつかないんじゃないかと思った。濡れていくハンカチで顔を隠したまま、彼の言葉をきいた。

「こんなこというの、おかしいけどさ、母さんとかとも話してたんだよね。あんたのこと知らないオレとは付き合わない方がいいんじゃない？」

それって、そういうこと？ あたしはハンカチから目だけを彼に向けた。馬鹿にしたような顔はしてないけど、口もとが笑っている。あたしはこんなに泣く程つらいことなのに、彼には全然そんなことはない。って顔が言ってる。

「別れとこっか。ま、オレの記憶が戻れば付き合えばいいんだしね。話はそれだけ。じゃ、帰るわ。ハンカチはそのうち返してくれたらいいから」

それだけいうと、あたしを残して彼は帰って行った。

あたしは彼の人格が確かに変わったのを見て、また泣けて来た。だけど、それだけじゃなく彼の言葉や、声、しぐさ全てがまだあたしの知ってる彼の物だと言うコトが、よけい辛くさせた。別れる。それってこんなに簡単なコトなのかな？ あたしは頷くべきなのか、確かに今の彼はあたしの中じゃ嫌なやつになるうとしてる。だけど、気持ちちはもっと別のところにある。

あたしは彼の影さえ見えなくなると、とりあえず溜っていたものを夕日に向かって叫んでいた。帰ってくる声が彼の耳に届いていないことを祈って。

## 第四話 溜息

翌日からの彼はあたしの知らない彼の姿だった。見たコトの無い彼は別人そのもの。あたしはもう、彼と話すコトさえできなくなっていた。それも、同じように彼と仲の良かった男子は自然と彼から遠くへと、逃げるように彼を避けるようになった。人種がちがうと感じたのだろう。彼の記憶には彼等のコトはしっかりと刻み込まれていたけど、それほど仲が良くなかったのか、話す姿はめっきり見ない。話すとしても、借り物を返す等だ。

そして、時間が流れると彼は新たな友を作るようになった。あたしは黙ってみていたけど、それほど良い友人には見えない奴らばかりだ。もちろん、これはあたしの偏見なんだけど。それだけじゃなく、女子が苦手だった彼が、あたしとはかけ離れた美人な女の子と仲よさそうに話すのも見かける。

心が辛辣になる。そうするにつれて、あたしは彼を目で追うコトをしなくなっていた。

「なあんか、かつこ良くなつてない？」

佳枝はあたしをからかうように言った。あたしはそう？と素っ気なく返事をしたけど、それに気づいていた。彼は確にかつこ良くなってる。見かけが変わったというのもあるけど、堂々とした態度がそう感じさせた。でも、あたしは意地になってそんなことを考えるコトを許さなかった。

「佳枝の目、病院行った方がいいんじゃない」

佳枝はただ笑ってるだけだった。

「これ、ありがとう」

彼が一人になってる所を狙ってあたしは借りていたハンカチを渡した。あたしが涙でぐちょぐちょにしたハンカチを見ると、眉間にしわを寄せながらハンカチを受けとった。

それを見ると、すぐにあたしは立ち去ろうとしたけど彼は呼び止めた。

「あのさ、あんたとオレはもう、彼氏彼女じゃないだろ？ だからもう話しかけたりすんの無しな」

彼が別れようって言うってからあたしは頭の線が切れる音を何度もきいた。今も確かに頭の中からそれが聞こえた。ある意味これは開き直りでもある。

「そうよね、ごめんなさい」

彼の目に負けないようにあたしも睨んで、眉間にしわを寄せて、言ってやった。すると彼は安心したのか笑顔を作った。

「わかればいいよ。オレあんた好みじゃないからね」

あたしも思わず顔を笑顔にしてしまった。というのも、怒るのを堪えているだけで内心は激しく怒っている。そして、泣きそうでもあった。好きな人から聞く言葉でも、その言葉は聞きたくない部類にはいるもの。

そんな気も知らずに、彼は去って行った。あたしも同じように立ち去ったけど、彼の方を一度振り返ってみた。期待してみたけど見えたのは彼の背中だけだった。

あたしはしばらく廊下にでて、風に当たった。そうでもないところに落ち着きを戻せない。彼のコトを考えるのを止めるコトはできないけど、今の彼をスキになることはできそうにない。だけど、彼を離したくなかった自分はある。ただ彼の記憶が戻るのを待てばいいのだろうか。それとも、このまま諦めてしまった方がいいのか。

しかし、よくよく考えてみると彼はあたしを好きだったコトがあったのか。それさえも疑いはじめるともう、止らない。

「はああ」

「でっかい溜め息」

いつの間にいたのか、隣にいたのは幼なじみの高司だった。高司とは家が近くて親同士が仲が良く、小学生ぐらいまでは普通に家まで行って遊んでいたが、中学が微妙な所で別々になって高校にはい

るまであまり口もきいていなかった。今ではクラスが違うのでめつたに会うコトがなかったが、たまに会うと長話になったりするいい奴だ。

「うっさいなあ。あたしは今、超ど級に落ち込んでるんです」

「なに？　なんかあったわけ？　あ、そうか」

高司は口を押さえて、ある方向に顔を向けた。あたしもつられてみて見ると、そこには秀司がいた。女の子と話してる。べつに駄目なコトじゃないのに胸が締め付けられた。

「じろじろみたら失礼よ」

「え？　なんで？　ってか、美香は何も言わなくていいのか？」

「いいの。別れたんだから」

高司は声をあげて驚いた。それから、小さな声で謝ったのを聞いた。

「気にしないで。秀司の記憶が戻ったら、また付き合えるもの」

「え？　何それ、記憶が戻るって？　・・・なんかあった？」

あたしは窓の外を見ながら、しばらく涙を堪えた。それから下を見てから、ぐっと口を引き結んで笑顔を作った。

「また、話す」

あたしは秀司の姿が見えないようになる所まで歩いた。

もう2ヶ月もすぎて、あたしも秀司もすっかり他人の様な顔をした。でも、あたしはまだ恋心を彼に抱続けていた。記憶の戻らない彼のコトをスキになる気はなかったけど、記憶が戻るコトに少しだけ望みをかけていた。

そんな時、テストが終わった日の席替えであたしと彼は隣同士になった。



## 第五話 我俤

恋とはどういうものなのか、その頃のあたしにはよく分からなくなっていた。つき合っていたことさえ、夢だったような気がして、夢に見た時には思わず涙したときもあった。だけど、秀司の顔にはあたしを映す目はない。あたしは彼の頭の隙間の中にさえ入れずにいるんだもん。でもあたしは違う、あたしの中は今も秀司のコトを考えてばかりいる。

「秋山さん、教科書見して」

あたしが真剣に考えてる最中に秀司は陽気な声を出した。隣同士になってから、秀司はあたしにたまに話しかける。それは今見たいな感じで、用がないときは話しかけたりしないんだけど。それであたしのコトをつき合う前のように、名字で呼ぶ。あたしもそれに対して、秀司を名字で呼んでいる。彼の姓は吉田だ。

「どうぞ、吉田君」

机をくつつけて、教科書を真ん中に置く。高校生にもなると、つき合ってるカップルがこんなことをしても、つき合っていない男女がこんなことをしても、まったく誰も注目しない。その時のあたしには周りを気にする余裕はなかったが、冷やかすような奴はいなかった。

「なあ」

秀司がこうして話しかけるのは2ヶ月ぶりだった。それまでのあたしたちは、顔も見合わせようとせず、今までのコトをなかった物にしようとして。この日の彼の様子はいつもと違っていた。

「オレとあんたが付き合いだしたのって、どっちから？」

「どっちからって？」

「告白どっちからしたわけ？ まさかしてないってことないだろ？」

「あたしよ。あたしがしたの」

彼はたいして気にする様子なく、ふーんと言った。

「あんたさ、あたしに話しかけていいの？　話しかけるの無しって言っただじゃん」

ああ、と呻くように彼が言った。

「別に、なんか、何か変わってくればいいと思ったただけだし、あんたがオレのコト諦めればいいのになとか、そんなコト考えて言っただけ。ただ、オレは鈍じゃないから結構わかるんだよね」

あたしは急に胸をつままれた気になった。彼は何を言おうとしているのか、分かってくるとこの場から立ち去りたくなる程顔が赤くなった。彼は、授業を進める先生を見ながら眉を釣り上げて口もとも釣り上げた。こんな顔はあたし見たコトが無い。

「あんたオレのコト、好きだろ？」

たぶん周りにも聞こえてなかったと思う。幸い席は一番後ろだし、隣はまったく話をしたコトのないような奴だし。でも、あたしは思わずイスを倒す程の大きな音をたてて、立ってしまった。

「バーカ」

真っ赤な顔のあたしに投げられた顔はイタズラ好きの子供のような顔だった。その後、先生に怒られたのは言うまでもない。

あたしの気持ちを彼が気づいていたなんて、なんて最悪。秀司のあの变にニタニタした顔を思い浮かべると、変な悪寒が背筋を這い回る。嫌な予感がひしひしとあたしの所に迫って来ていることを知らせているようだ。

帰りは、佳枝や他の友人とは道が違うので一人で帰る。もちろん、走ってすぐのチャリンコに乗るわけだが、下駄箱まできてあたしは足を止めた。

「よっ」

あの变にニタニタした顔は消えていたけど、どっか危険な香りのする秀司が突っ立っていた。秀司だけじゃなく、あたしの苦手な感じの男子も数人彼の所にいた。あたしは彼の目を見たが、彼の言葉を無視した。

「おい、無視すんなって」

あたしの下駄箱を押さえて、あたしの行動を遮った。あたしはあの授業中でのコトをまだ根に持っていたので、かなり怒っていた。

「邪魔なんですけど？」

「あら、ごめんなさい。あなたが無視してくれなかったら邪魔しないんだけど」

わざとなおねえ言葉にあたしは吐き気を感じた。彼の目を睨み見ると、彼の手を押しどけた。

「また無視？　ちよっと、オレの話きいてくれない？」

「聞く気ありません。じゃ、さようなら」

と言ったのに、彼は後をついてきた。あたしはうつとうしいというか、何で彼がこんなコトをするのかが分からず、困惑していた。そして、少し嬉しくもあった。

チャリ置き場まで来ると、彼はあたしが立ち止まったのをいいコトにあたしのチャリの荷台に乗った。おかげで、動かすコトもできず、観念して彼の顔を見てやった。

「何？　あんたが話すの無しとか言ってたんじゃない。いいかげんにしてよねえ」

わざと大きく溜め息を吐き出すと、彼はまたいたずらツポイ顔をした。

「なあ、オレあんたとつき合ってやってもいいんだけど」

ああ、からかつてるんだな。あたしは首を振って彼を睨んだ。

「からかつてんでしょ？　あんた、あたしのこと好みじゃないって言ったじゃん。信じないわよ」

「うーん、ま、確かに好みじゃないし、好きかどうかわかんないけど、あんたは好きなんだろ？　それに、オレあんたに興味あるし」

ニタニタ顔を作る。あたしはその顔を見たのに、どうしてか彼の心を見透かすコトができなかった。彼の考えてるコトを、身当てるコトができずに、彼の言葉に赤面していた。

「・・・あたし、あんたのわがままにつき合えないわ。でも」

嬉しかった言葉も、全部捨てるコトは出来ないけど、あたしは好きでもない人とはつき合えない。だから、断ったつもりだった。

「じゃ、決まりな。帰るか。彼女さん」

あたしの言葉も聞こうとせず、秀司は自転車を動かして、あたしに後ろに乗るように促した。真っ赤になったあたしは、彼のコトを真正面から見れなかったけど、荷台に乗るって。彼の背中を掴んだ。服の裾だけだったけど、あたしは彼の所に戻れたコトに、安堵した。

## 第五話 我俤（後書き）

題名は「わがまま」とよびます。

## 第六話 賭事

彼の背中が、広がった。おかげで彼の背中が壁になって、前進しようとする私を止めた。あの自転車に乗っていた日もそんなコトを考えていた。彼の顔を見ようとしても、彼の背中しか現れない。秀司はつき合おうと言ってくれたけど、本当にあたし達はつき合えているんだろうか。不安ばかりが胸をよぎっていく。

自転車から下りると秀司はそれをあたしに返した。

「歩いて帰るの？ チャリ、貸してもいいけど・・・」

秀司は少し考えてから、頷いた。あたしの家から秀司の家までは相当な距離がある。自転車が無いと帰るのが遅くなるのは目に見える。もう夕暮れ時だし、日は早く暮れるからなるべく早く帰るのがいいだろう。

「じゃな」

自転車に乗る秀司を見送りながら、あたしは空を見上げた。真っ赤に染まっていく空は今のあたしの心を映したようだった。好きという気持ちが強くて、今の状況に喜んでいる自分の姿。馬鹿みたいだと思いながら、彼に対してずっと未練をもっていたあたしは、記憶が戻ってくれるよりも今は、現在の彼をスキになる努力をしたいと思っている。

「はああ、疲れた」

ぐつと伸びをすると楽になる。そんな時が早くきたらいいのに。

眠い目をこすりながら、朝の道を歩くのは久しぶりだ。特に何もない田舎の道は道路の真ん中を歩いてもなんの危険のない道。そう思っていたのは秀司が事故に合うまで。今では少しトラウマになっていて、道の端を歩かないと気がすまない。

「おはー」

声をかけてきたのは高司だった。いつもはあたしと同じで自転車

に乗って行くはずなんだけど、今日は歩きだった。立ち止まって、あたしもあいさつした。

「美香も歩き？」

「あ、うん。チャリ貸してるから。あんたは？」

「オレも似たようなもんだな」

「ふーん」

高司が道路側に並ぶとすぐに歩きはじめた。

「気になってたんだけど、吉田秀司とはよりもどしたのか？」

「まあね。でも、記憶は戻ってないの」

高司は溜め息を吐いた。あたしは驚いて高司のコトを見てしまった。どうして、そんな溜め息の音もそうだが、高司の反応が気に触った。眉根を寄せて、嫌悪感むきだしにしている。

「ど、どうした？」

「いや、美香が本当にそれでいいのかなって思っただけ」

それってどういう意味だろう？あたしは自然と首を傾げた。

「美香が好きなのは、記憶のあった頃の吉田秀司で、前とは真逆のやつなんだろ？今のあいつを好きになっていいのかってコト」

それは、昨日あたしの中で解決させていたものだ。好きになる努力をしたいとあたしは思ったんだ。

「いいの。だって、まだ秀司のことすごい好きだし。たとえばそれが、今の秀司のコトじゃなくても」

秀司もあたしのコトをそういう目で見ようとしてくれてる。だから頑張ろうと決めた。

「そ。美香がいいなら、別にいいと思うけど」

高司の顔からいつの間にか嫌悪感を剥き出しにしていた表情が消えていた。でも、あたしは何かがひっかかっていた。追求するつもりはないけど、気になる。

校門に入るとすぐに高司とわかれた。棟が違うので下駄箱も別の場所になっているからだ。

下駄箱で靴を履き替えていると影が現れた。あたしを覆うような大きな影は、あたしの手を掴んだ。誰の手なのか分かっていたから、驚きもしなかった。急に溜め息を吐きたくなって、あたしは大きく息を吐いた。そして、背後に立つ人物を見上げた。

「なに？」

秀司は笑みを作りながらあたしにおはようと、言った。向きを変えると秀司はあたしの手を放した。

「チャリの鍵返しにきました。はい」

あたしはそれを受けとると、彼の横に並んで歩いた。彼と歩いていると妙に見られている気がするののは気のせいだろうか。視線を感じるの、そう素晴らしい気分じゃない。それに、彼の友人たちがあいさつしていくついでに、あたしを凝視するのはやめてほしい。目がなんだこいつ？って言ってる。

「なあ」

彼が急に声を出したので、慌てておもわず「はい」と答えてしまった。おかげで彼は吹き出して笑いだした。

「後で、四棟にきて。話あるから」

「え？　ここじゃできない話なの？」

秀司は意味ありげな笑みを浮かべると、すぐに教室にはいった。四棟は特別教室があるくらいで、実際にはまったく使われていない所だ。空き教室が多く、補習ではよく使うところだし、確か生徒がたまりやすい場所でもある。そんな所で話をするってよっぽどな話なんだろうな。

授業が終わると、すぐに彼はあたしの手を引っ張って四棟まで引きずった。

珍しく、誰もいなく、空き教室に入るとがらんとした雰囲気。背筋をぞつとさせた。秀司は適当にイスに座ると、あたしにも座るように示した。素直に従って座ると、秀司の顔にイタズラっ子が乗り移っているのが見えた。

「あんた、本当にオレのコト好きだよね？」



いきなり聞かれてあたしは頬に熱が上がっていくのを感じた。

「そ、そうだけど」

あたしは真つ赤になっていく頬を隠すために手をあてた。恥ずかしい、なんでこんなにすぐ気持ちを現してしまうのか。

あたしが必死に頬の熱を下げようとしている間に彼は立ち上がって、彼とあたしの間にあった机に手をついた。そして、あたしの手をとって頬から剥がすと何が起こったか理解できない速さであたしに顔を近付けた。

唇が何かに触れた。我にかえった時には秀司の顔はあたしから離れていた。

一瞬のキス

あたしは口を押さえた。初めてではなかったけど、今の彼とするのは初めてだ。変な気分。

「はははっ」

急に秀司は笑いだした。顔を上げて彼を見ると、彼の顔には何にも浮かんていなかった。怒りも、嫌悪も、好意も何も。上から見下ろされると威圧感があり、あたしは立ち上がった。彼の目を見る。

何も返さない彼の瞳は氷のように冷たく見えた。

ざわざわと、物の動く音が聞こえた。

「ばっちしか？」

秀司の陽気な声は、教卓の中にいた男子生徒に投げかけられていた。男子生徒の方も陽気な声でばっちりと言った。そして、携帯をもっている。画面の方を秀司に向けると、そこにはあたしと秀司がキスしている所がおさめられていた。

二人して親指をたてて、喜んでいるがあたしは混乱していた。混乱よりも、もっと深いものも渦いていた。秀司がまた陽気な声をだした。

「おーい、お前らも出てこいよ」

その声の後すぐに男の低い声が教室の外からいくつも聞こえ、ドアのところから何人もの男子生徒が顔を出した。全員の顔にいやら

しい笑い顔が浮かんでいる。ただ、秀司はあたしの方を見て冷たい視線をよこす。

いつの間にかあたしは震えていた。どこからその震えがきているのか、分からなかったけど泣かなかったただけでした。

「な、なによこれ」

秀司はあたしの言葉を鼻で笑った。

「なにつて、チヨチヨカルトってやつだよ」

チヨチヨカルト？あたしは震える体を支えながら、彼の目を見た。「賭けてたんだよ、あんたが今のオレとキスまでいくか。もっち、オレの勝ちだけど」

秀司の声に反応するかのようになり、周りからどつと、笑いが渦まいた。あたしは地獄に叩きおとされ、震える体はどこまでも冷たい氷の水の中に沈んでいった。上を見ると、目を閉じるコトもできずに彼の冷めた瞳がある。そして耳には笑い声だけが響いてくる。

「あんたも馬鹿だな。オレがあんたのこと好きになると思う？ 前がどうだったか知らないけど、オレはあんたのこと大嫌いだし。好きになるなんてありえない。ま、運が悪かったと思って、オレ等のコト許してよ。ちゃんと写メは消しとくしね」

また笑う。あたしは地にある足を踏んばって、手を彼の頬めがけて振り下ろした。

乾いた音が響き渡り、その場にいた誰もが静まった。あたしはその時になってようやく涙が流れてきていた。彼の目をにらみ付けると、あたしはすぐにその場を立ち去った。男子生徒はすぐに道を開けた。

悲しいし、むかつくし、憎みたい。あたしの中で決まっていたコトは全部崩れていった。彼の顔さえもあたしは巨大なハンマーで粉々にしてしまいたかった。あたしの中で彼は存在しない。彼は死んだ。

あたしの中にいない彼なんて、死んだも一緒。涙を拭くコトもせずに、あたしは学校を出ていた。ただ闇雲に走

って、いつの間にか家にたどりついていた。

## 第七話 怒り

ショックから立ち直れずに、あたしは学校に行かなかった。

その日に心配して来てくれた佳枝は辛辣な面持ちだった。でも、人のコトを考えている余裕も無くあたしは佳枝を追いだした。どうしても、誰かと顔を合わすのが恐かった。人間不信とまでいかなかったけど、秀司に裏切られた傷は簡単に癒えるものではない。

とはいえ、あたしは開き直すコトをしていたので、本当はそれほど深刻な状況ではなかった。確かにはじめは、大量の水を失って死んでしまうのではないかと思った程泣いたけど、しだいに腹が立ってきて今では本気で怒っている。ただ、それはすぐに収まって翌朝にはあたしの心も落ちついていたけど。

あたしは彼に失望した。以前の彼ならそんなコト思ったりしなかっただろうけど、彼の人格だけは記憶が戻ってもどうしようもないものだ。ならば、もう諦めるべきだと思った。今なら彼のコトなんて顔も見たくない程むかついてるし、次に顔見たらあたしは彼に殴り掛かるしかないだろう。あたしが好きだった人は、事故で死んだ。もうそれでいい。

教室に入るとすぐに、あたしは一番前の席に座る男子と席を変わってもらった。あたしは隣にいるコトさえ我慢できない。それに彼だってあたしの隣はいやなんだろうから。本当に腹がたつ。

変わってもらうと隣は佳枝だ。まだ来ていないが、あたしは彼女に悪いコトをしたのを思い出して手紙を書きはじめた。その間に何人かの友人があたしの周りに集まっていた。話をしていたけど、佳枝が来るとすぐに彼女に駆け寄った。初めは申し訳なさそうな顔を浮かべていたけど、あたしから謝ると佳枝は笑った。

教室に秀司の姿を見るコトはあった。でも、あたしはそれをみると吐き気を覚える。彼があたしの方を見ているのを感じたコトはあ

ったけど、それは隣にあたしがいないことだったんだろう。席を替えてもらってから、あたしは彼を見ない様になっていた。これは以前のような未練もなく、あたしは本気で彼を忘れようとしていた。「新しい恋でもしたら？」

そういったのは佳枝だ。あたしにとってもそれがいいような気がした。気が進まないのも本当だけど。

「あのさ、市内の方にいる友達が合コンしない？ ってメールきたんだけど。どう？」

佳枝のめが輝いている。あたしはその目をみるとどうしても、否定する言葉を呑み込むしかなかった。あたしより佳枝の方が本気になってる事は一目瞭然というやつで、一人でもそこにいつてしまうだろうと思うと、あたしは仕方なしにでも行くべきだと思った。

「いいわよ。いくだけ、いくわ」

あたしが言うのと佳枝は飛びついてきた。

その時のあたしは全く気がついていなかったけど、あたしの涙はちゃんと彼に響いていた。

佳枝の友人二人とあたしと佳枝の四人と、男性人も四人で合コンをすることになった。盛り上がるためにあたし達が向かったのは、安くて音がキレイなカラオケだった。あたしは生まれてこのかた合コンなんてものは初めてだったが、カラオケと聞いてなんだか安心した。

佳枝の友人とはすぐに溶け込んで、店の中にはいつてからもずつと喋り通しだった。ボックスにはいると、あたしは愕然とした。佳枝もそんな顔をしていた。

「どうかした？」

ドアの所で固まったままのあたしと佳枝に、先に席についた二人が言った。でも、それさえも耳を通り抜けるように、あたしは座っている一人の男を凝視した。そこにいる男もあたしを見て目を見開いている。

佳枝があたしの服の裾を引っ張って、あたしを外に連れ出した。

「ごめん、ちょっと待ってて」

それだけ言うと、すぐにドアを閉めた。早歩きで女子トイレまで来ると、呼吸を整えてすぐに佳枝と目を見合わせた。

「な、なんであいついるの？」

佳枝もあたしも動揺していた。あそこにいたのは、佳枝もあたしもよく知る人物だったからだ。

「どうする？ いずらいでしょ？ 帰っちゃう？」

佳枝があたしを気づかって聞く。あそこに座っていたのは、秀司だった。あたしはすぐにも逃げたくなかったし、今だってできたらボックスに入りたくなかった。でも、佳枝のことも、先ほどの友人のことを考えるとあたしが帰るのは場の空気を悪くするだけな気がする。

あたしはうなり声を上げてから、戻ろうと言った。

ボックスに入ると、すでにそこでは曲が流れていた。そして、秀司の隣にはちゃっかり佳枝の友人が座っていた。特に気にしなかったけど、あたしはまだ彼に対して十分恐怖心を持っていたので一番遠い席を選んで座った。先に座っていた子は何があったのか聞きにきたけど、あたしも佳枝も、なんでもないとだけ言った。

佳枝は秀司と話しをして、しばらく二人だけで盛り上がっていた。そこにまた、佳枝の友人が話に入りあたしは完全に孤立するはめになった。

あたしと秀司は隙をみつけては視線をおくっていた。どっちも、目を合わせようとしなかったけど視線には気がついていていた。あたしは恐怖心から彼をみるしかなかったけど、どうして秀司があたしを見るかは分からなかった。

そうこうしているうちに、場は盛り上がりつつあった。でもあたしはどうしてもそこに解けこめなかった。佳枝なんかはあたしのことも、秀司のことも気にせずにはしゃぎだしていたけど、あたしはどうしても秀司に対する怒りを止められなかった。それを表に出さ

ないようにするのが必死だった。

あたしが怒りを押さえている間に帰ろうとする雰囲気は漂っていた。あたしは特に誰かと楽しく話す事もせず、にいたので、帰りは一人だな、と感じ取った。佳枝にはすでに仲良さげに話している人がいるし、他の二人もそんな人がいる。あたしは一人だった。

たいして気にすることじゃないけど、やっぱり寂しいと思う。

「ごめん、あたし送ってもらったから。じゃ、また明日」

佳枝が笑顔で去って行くけど、あたしは引きつった笑顔しか作れなかった。他の子達も同じように笑顔で去って行く。そもそも、こっとなったのはあいつのせいだ。あいつさえ、現れてなかったらあたしも佳枝みたいにニコニコしながら帰れたのに。

憎くたらしい、あいつが一人になればいいのに。でも、あたしから見ても秀司はカッコイイ。そう思ってしまうことはすごく悔しいけど、今日の四人の男子の中では一番カッコイイと思う。顔がじゃなくて、そういう雰囲気がある。

「むかつく！」

あたしはそれを何度も繰り返しながら、帰った。市内からはバスに乗るのが結構やすかったりする。それにあたしの住んでるような田舎まで電車は通ってないから、バスじゃないと家までつかないし。

バス停までくると、真っ暗で誰もいないベンチに座った。道を通る車や人をみながら、バスが来るのを待つのは退屈だ。急になんであたしはここにいいのか、分からなくなってきた。

そりゃ、新しい恋なんて求める気はなかったけどこうして一人で帰るために行ったんじゃないかった。

「泣きそ」

涙を堪えるように鼻をすすった。

それからうつむいて、携帯をいじりだした。暇な時は携帯を使うのがいい。あたしの携帯にはゲームは入ってないけど、単語クイズがはいってる。これくらいしかやるものは無い。

5分もたたないうちにバスがきて、あたしは乗った。後ろから足音が聞こえて、慌てて来る人がいるんだとのんびり考えながら乗って席につくと隣に走って来た人が座った。席はいっぱい空いてるのにわざわざ、座ってくるその人にあたしは腹が立った。でも別に文句をいうつもりはなかったけど、そいつの顔ぐらい見といてやろうと見上げると、あたしの目を見ない秀司がいた。

「へっ！ な、なに！ あんたなんでここにいの？」

あたしは力一杯彼の側を離れようと、密着していた体を話した。背筋がゾクゾクする。腹がたつし、恐怖心もめちゃくちゃあるし、あたしは混乱していたし。

「女の子一人で帰すわけにいかないだろ」

秀司はあたしの方を見ようとしなかった。あたしも同じように目をそらしたまま、秀司を見ない様に、そう戸だけ言った。



## 第八話 来春

恐かった。その恐怖心がどこからくるものかも痛い程わかってい  
た。彼がした事は、許せる事ではなかったし、あたしを傷つけるの  
には十分な出来事だった。それなのに、彼は急にあたしに優しくし  
た。あたしが一人で帰るのを止めて、送ると言いだした。考えられ  
ない出来事が起きて、あたしは混乱せざるを得なかった。

バスの中で揺られながら、あたしと秀司は目を見合わさない様に、  
そして体を触れあわない様にするのに必死だった。

妙な緊張が漂う中、あたしの家に近いバス停までくると、秀司も  
そこで降りた。

前にもいったように、彼の家はあたしの家から結構距離がある。  
なのにそこで降りるのには、あたしに話があったからだろうか。で  
も、あたしは話を聞く気になんてなれない。早足にバス停を離れた。  
だが、あたしは気づくのが遅かった。彼が帰る道はあたしと途中  
まで同じなのだ。当然方向も同じだ。

ついて来るのは当然のことで、あたしはもう一つの足音を耳にし  
ながら帰らなければならなかった。あたしより早く歩けるのに、彼  
はあたしより先を歩こうとしなかった。

あたしは長く続く沈黙に耐えきれなかった。後ろにいるのはあた  
しを傷つけた人だ。そんな人にずっと付きまとわれるような感覚を  
味わうのは嫌だ。

立ち止まると、後ろについていた足音も消えた。

「なんのつもり？」

あたしの声は震えていた。

「なんもねえよ」

「あたしの事、キライならほっとけばいいじゃない」

「そうだけど、そうもいかない」

曖昧な返事に、あたしは彼の方をみないわけにいかなかった。

「はつきりいいなさいよ！　あたしのことほつときたいなら、そうすればいいのよ。あたしはもう、あんなんで好きでもないし！　むしろキライなんだから」

彼を命一杯にらみ付けてから、また歩きはじめた。足音はまだ聞こえてくる。彼は何も言わない気でいるけど、あたしはそれが気になってしまう。

だんだんその足音さえもうつとうしくなり、あたしは走っていた家まではすぐだし、別に送ってもらわなくてもよかった。走っている間に、彼の足音はなくなっていた。

彼の意図がわからない。何もかも、あたしが感じた全てのモノに謎を感じる。ただ、あたしは彼を忘れる事ができないんだと確信する事しか。

佳枝は脳天気には昨日は楽しかったね、なんて事を口にした。まだ腹立たしい気持ちの残っているあたしには、佳枝さえ憎く感じてしまう。ひきつったままの笑顔で佳枝の望む答えを口にした。

秀司は何一つ変わらず、いつものように、いつものメンバーとつるんでいた。昨日の事が嘘のように感じれるくらい、あたしは彼を遠く感じた。

月日は激流のように流れていった。

あたしは新たな恋を無理して探す事をやめた。合コンはもうこりごりだった。あたしには佳枝のように簡単にだれかと仲良くなる様には出来てないし、複雑な恋だって出来るはずない。ただ、彼を忘れる事ができないのなら、思い出に変えるしかないと諦めていた頃だった。

春、あたしは高二になり佳枝とはクラスが替わってしまった。そして、なんでか幼なじみの高司と同じクラス。最悪な事に秀司もあたしと一緒にクラスだった。あたしはとことん、地獄に落とされる運命にあるのかもしれないと自分を呪った。

佳枝と離れたのは、少しほつとしていた所がある。彼女はあたしを利用する面があったから、いつでもあたしは佳枝の付き人みたいなものだった。おかげで高一のときに出来た友達は佳枝のほうにばかりいく子だ。佳枝は仲の良い友人で、それ以上にはなれなかった。たとえ、彼女に親友という言葉をあたしに投げかけられても、心の中で否定するしかできなかった。

佳枝はなるべくあたしのクラスに來ると言っていたけど、來るコトはなかった。お昼ぐらいしか一緒になるコトはなかったのだ。

おかげで、あたしは新しいクラスに馴染めなし、秀司のコトを除くとこのクラスにあたしはだいぶ溶け込んでいた。高司もあたしと秀司のコトを良く知ってるので気づかってくれるし、この一年うまくやっていけそうなきがしていた。

「美香、球技大会なにする？」

友人の一人、遥があたしに聞いた。遥は派手好きで、制服の着方がすごくカワイらしい。それでもって、顔はちっさいし目は細めで美人といえる顔つきだ。それでもって、ストレートで長い髪をいつもアレレンジしてくる姿は誰かに恋してるからだ、すぐに気づいた。「うーん、みんなで楽しく騒げる奴がいいんだけど」

「じゃ、バスケしよ！ あっちゃんと、ヤッスとタカちゃんとあたしと美香で」

「混合バスケするってこと？」

遥の目は輝いていた。あっちゃんは背の高いバレー部の女子だ。今年の夏にはキャプテンになるとかで、今から気合はいつてる。ヤッスは同じくバレー部だが、男子バレー部の方だ。高司と仲がよくそれつながりであたしたちも仲良くなった。タカちゃんは遥がそう呼んでるだけで高司のことだ。

「あたしソフトボールしたいなあ。もつといろんな人呼んで」

遥は低く唸る声をだして、後ろにある黒板を見た。そこに競技とやる人の名前を書くようになってる。

「ソフトは名前かいてあるよ。見てよ、あたしあの辺の人苦手なん

「ただ」

黒板にはあたしも苦手な秀司たち、クラスの中じゃ目立つグループの名前があった。あたしたちが名前を書いたら丁度よい人数になる。でも、遥と同じ様にあたし達も秀司のいるグループと関わる気にはなれなかった。

でも、あたしはやっぱり呪われていた。

## 第九話 呪い

呪いっていうものが、どういうものか知らないけど、もし本当にそんなものがあつたらあたしは誰かにそれをかけられているんだと思う。その呪いの目的はあたしを不幸にするコトだ。何が何でも、あたしが幸せだと感じるモノすべてを奪おうとする。

まあ、そんな大げさに考えてるあたしもどうかと思うけど。でもあたしは何の根拠もなしに言っているわけじゃない。それなりの理由っていうのがいくつかある。これまでの、あたしの不幸の数々、それに加えて楽しみにしていた新しいクラスで初めての球技大会。そう、あの球技大会は苦痛だった。

そもそも、あたし達は混合バスケに出ようとしていたのだが、出場するクラスがほとんどなく競技したいがなくなってしまった。男女別れて、別の競技をやれば良かったんだけど、遙がどうしてもこのメンバーがいいと言うし、担任も人数合わせの為にソフトに入っ  
て欲しいといいだしたから仕方がなく秀司たちのいるソフトに入ってしまった。

はじめは嫌がっていた遙も、秀司たちのグループの女子と話すうちに仲良くなり、別にいいじゃん。なんてコトをいいだした。とはいえ、あたしも遙と仲良くなった子とはいつの間にか話すようになっていたんだけど。あっちゃんはもともと、クラスで目立つ人だったからそのグループと仲良くなるのが、別に話さないままだろうが、どうでもいいという感じなのだ。誰かに依存しようとしないうちが、あっちゃんのいい所だし。ヤッスもそんな感じ。別になんでもい言と思ってる。

でも、高司は反対した。あたしの事情知ってるし、あたしが秀司とつき合ってる頃から高司はあんまり秀司のコトを良く思ってた。あたしとしても、高司の気持ち嬉しいけどわがまま言ってしまうが、たかが球技大会だしね。

快晴の下で行われる球技大会、あたしの気持ちも空ぐらい晴れ渡ってくれたらいいんだけど。

大会のはじまる開会式のときに、佳枝に会った。佳枝は女子バスケットに出るみたいで、あたしの応援に行くともいつていた。あたしも佳枝を見にいくつもりだ。

佳枝と少し言葉を交わした後、あたしはまた開会で喋り続ける教師の声を聞いていた。校長の話はすんだというのに、競技中の注意だけでなんて長い話をするんだろう。陽が照って顔が焼けるのが随分気になる。顔がちりちりとした頃、ふっと自分の顔に影が当たった。

「これ持つといったら」

言ったのは、秀司と仲のいい女子のひとりで確か、美沙とかいう子だ。他にも、ソフトに参加する子にソノ子もいた。二人とも、香水の匂いがひどいのには顔だけはキレイな子で、あつちゃんの様な雰囲気ももってる。なかでも美沙って子は面倒見がいいらしく、あたしもタオルを渡された。

「それをこうして、影作ったら顔焼けないっしょ」

「なるほど」

あたしが感心して言う和美沙は笑った。

「女の子ならそれぐらい知つときなよ。もしかして日焼け止め持ってきてないんじゃない？」

その通り。あたしはそんなもの夏しか買わないもん。

「ダメねえ、後で貸したげるよ。ソフトは絶対焼けるもん」

「わーい、ありがとう」

いえいえ、と美沙が言った。あたしは心の中にあつた彼女に対する偏見を打ち消した。なんだ、いい人なんじゃないか。と改めて美沙の評価を上げた。

やっと先生の話が終わり、生徒たちがバラバラと散らばっていくとあたしも遥とあつちゃんと共に、とりあえず自分達の順番が来る

までバレーの審判をするあっちゃんに連いて回ることになった。

あっちゃんが審判をしてるあいだは、見学者用にだされたベンチに腰掛けてじっと見ていた。

「ねえ、ねえ、ソノ子ちゃんから聞いたんだけど、美香は吉田秀司とつき合ってたの？」

「へっ？　なんでいきなりそんな事聞くの？」

あんまり人に知られたくなかった事だったのに、あたしの口からじゃなくて別の人から知られることになるとは。ま、いいけど。

「本当なんですよ？」

「う、ん。そうだけど、昔の話だよ」

「今はもう、好きでもないの？」

「うん、好きじゃないよ。むしろキライだし・・・」

そう、あたしはキライになる事を誓って、それでもって今の彼を二度と好になろうとはしない。そう決めたんだ。人にはなすとどうしてかそれが力強い言葉に感じられる。

「じゃあ、今は好きな人いないの？」

「いない、いない。新しい恋は諦めてるの」

あたしが何の躊躇もなく言うので遥は信じた様だ。急に、遥が思いたったみたいで、あたしの手を掴んだ。

「なに？」

驚いてそう言ったけど、遥は顔を真っ赤にしてあたしの耳に顔を近付けた。

「タカちゃんの事好きじゃないよね？」

「好きじゃないよ。だって、ちっさい頃から知ってただよ！　好きになるわけじゃないじゃん」

タカちゃんこと、高司は昔から知ってるよき友人といった所だろうか。あまりにも昔のことを知り過ぎていると、どうしても恋愛対象として見る事はできないのだ。そういう人は誰かに一人はいるだろう。あたしの場合それが高司なだけだ。

「じゃあ、あたしがタカちゃん好きだって言っても別にいいよね」

あたしは目を見開いた。遙の言葉を聞いたはずなのに耳から流れていくような感じ。

「聞こえた？」

「う、うん。いいんじゃない、好きになるのは自由でしょ」

だよねえ、と真っ赤な顔のまま笑う遙をみて、どうしてかあたしも笑ってしまった。嬉しそうに笑う彼女をみながら、あたしは頬の肉をひきつらせていた。なんで高司なんだろう、高司のどこがいいんだろう。そんな疑問を抱きながらも、高司の事が好きだという人を発見したことに驚きとともに、少しは嬉しさを感じた。

それで気づいた。彼女がどうしても混合の競技に出たかった理由が。なるほどなあ、といった感じだけ。

ソフトの試合が始まると、あたし達は運動場まで行った。すでに、あたし達三人以外が集まっていて、試合は今にも始まりそうだった。打順や場所を決める為にジャンケンをはじめた。

あたしは運動オンチなので、すすんで初めの試合は辞退した。もう一人、辞退しなきゃならないんだけど、もう一人はジャンケンで負けた人になりそう。

「美香、美香の分まで頑張るからね」

遙がガッツポーズをつくり、あっちゃんが、まかしとけとグーを作った。

タオルを貸してくれていた美沙が日焼け止めを持って、あたしの所に来た。そのまま、何も言わずに日焼け止めを渡してくれると、試合のほうに戻って行った。

もう一人が決まったらしい。

あたしがすでに日陰で日焼け止めを塗っていると、高司がきた。高司は試合にでれないことに大夫悔やんでいるらしい。リーグ戦だけど、クラスが多いから二チームに勝たないと最終戦までいけない。たぶんここで負けたら勝っていけないだろう。

「美香は試合でなくていいのか？」



「いいの、焼けるしね」

それでもって、運動オンチだし。

「あ、そうか、あいつもいるしな」

あいつは、秀司のことか。それも一つの理由に当たるかもしれないけど、今はそのことを考えなくなかった。高司とどうでもいい話をしながら、試合を眺める。時間はすぐに過ぎて、いつの間に試合は終わっていた。あたしは気づきなくなかったけど、試合中あたしの目は秀司のことばかり目で追ってた。その目線の先にいる美沙と共にあたしには秀司が映ってた。

胸の奥がズキズキする。

そうしているうちに、本当に気分が悪くなってあたしはうずくまった。試合が終わって、遥やあっちゃんも心配来てくれた。

「大丈夫？」

「うーん、保健室いつてくる」

「あたし連いてくよ！」

遥につれてかれて、保健室まで行った。

保健室まで来ると自然と気分が良くなった。どうしてあんなにしんどかったのか、あたしは良く分らない。もしかすると、あたしの中にある秀司を拒否しようとする部分がそうってしまったのかも。

結局、あたしは保健室で休むことにして試合にはでなかった。まだズキズキする心の奥があたしの呪われた部分だったのかもしれない。

## 第十話 予兆

「すごかったの、本当にあの吉田秀司が！」

遙の目は輝いてた。そして頬は紅潮し、あたしにどれだけ秀司が活躍していたかを熱く語っていた。

「そうそう、本当にあんなにすごい人には見えなかったけど、運動神経いいんだね」

遙に相づちを打ちながら、あっちゃんまでもが誉める。あたしは誇らしいような、腹立たしいような、複雑な気持ちで聞いている。

「どうやら、球技大会の秀司は彼女達の言っている様に大活躍だったらしい。というのも、ソフトを投げるの上手だし、守備も上手く、決勝では的確な指示をだして勝利へと導いた。試合に出ていた彼女達は秀司の勇敢な姿を見ていたコトもあり、こんなにも盛り上がった話つづけてる。」

なんか、こんな風にモテられると悔しくなる。あー、イライラする。

「もう、うつさいよ。あたし、あいつキライだつて言ってたじゃん」  
二人は顔を見合わせて、そしてあたしを見た。

「そのわりには、あの人のコト良く知ってるよね」

あたしは間抜けな声をだした。いつ、あたしが彼を見て言たつていうのだろうか。

「見てたじゃない、気づいてないの？ 試合の時なんて特に目で追ってたじゃない！」

確かに、試合の時はみていた。まさか気づかれていたとは思わなかったけど。でも、普段は彼のコトを目で追ったりしていないはずなんだけど、それはあたしが気づいていなかったただけだろうか。

「ま、そのうち美香もあの人のすごさに気づくわよ」

誰か気づくか。もう、あたしは彼を諦めてるのよ。絶対に彼なんか好きにならないもん。そして彼のもつすごい所って奴なんか、見

たくない。そんな所見ちゃったら、あたしはあたしじゃいられないもん。

その日は天気が悪かった。それでもつて、曇っていた。

曇りつていうのは、なかなか謎なものであたしみたいな博の無い人間にはとてもイライラさせる天気でもある。考え過ぎる人間じゃないけど、空を見上げるたびに雨が降るか、晴れるかのどっちかにしとけよ。と、つつこんでしまいたくなる。

でも、その日の曇りはなかなか、あたしをすつきりさせてくれた。「げえ、雨かよ。今日降らないって言ってたのに」

教室から見える雨は風と共に激しく窓に激突していた。流れ落ちる水がまるで滝の様にさえ見える。高司の隣にちゃっかり座った遥は少し席を外すと、折り畳みの傘をもつて席についた。

「はい。タカちゃん貸したげる」

と、真っ赤な顔をして渡す姿をみていると、あっちゃんもヤッスがあたしに目線をやつて、ニヤニヤする。たぶん、遥の気持ちに気づいているのだろう。遥が差し出した傘を手にとると、高司は遥に頬笑みをかえした。

「サンキュ」

それだけ言った。遥には十分な言葉だったらしい。顔がトマトになっっている。あたしはすぐにあっちゃんと目を合わせた。そしてあっちゃんがヤッスと目を合わせると、すぐにクスクスと笑いはじめてしまった。

あたしたちの楽しみが一つ増えたということか。これからの二人が楽しみだ。って、あたしはババアか。

帰りに突然気づいた。あたしは傘を持って無い。持っていないってことは、あたしはずぶ濡れで帰るしかない。無理だ、寒いし冷たい雨がクライだもん。

あたしにも、遥みたいにな傘を貸してくれる人が現れてくれたらいい

いけど、残念な事にあたしの友達はみんな帰った後だった。知り合  
いすらないし、職員室にでも行って先生に傘を貸りるしかないか  
な。とか考えながら、あたしの足は職員室へと向かった。知りもし  
ない先生に貸りるのは、気が引けるのでここはやっぱり担任しかい  
ないな。

「直美ちゃん」

そういうと、国語教師で担任の速水直美はあたしの方を睨み見た。  
『ちゃん』をつけられるのが嫌らしいが、クラスの全員がそう呼ん  
でいる。あたしだって呼びたいし、親しみやすい。それに30過ぎ  
たばっかで、なかなか若い先生だし丁度いい気がする。

「どした？」

「雨降ってんだけど、あたし傘持ってきてないんだ。借して欲しい  
んですけど」

なるほどね、と直美ちゃんは窓を見た。

「そこに借用書があるから書いて。傘とってくるから」

はい、と返事をする、と直美ちゃんはすぐに職員室の奥の方へ  
入って行った。

あたしが借用書を書いているうちに、直美ちゃんが傘を持って戻  
って来た。ところが、あたしに傘を渡す前に、別の所へ向かって行  
ってしまった。クラスの生徒が、別の生徒がきたのか、あたしはま  
だ書いていたので特に気にしなかった。

「直美ちゃん、それ貸してよ」

この声を、あたしはよく知っていた。

「だめ。これは秋山が借りる傘。あんたも借用書かきなさい。そし  
たら借してあげるから」

あ、そう。なんていう気の無い返事をする、あたしの側を秀司  
が通った。そして、あたしが顔を伏せている隣に立った。心臓がバ  
クバク大きな音をたてる。頬は紅潮して、顔なんてあげられやしな  
い。

目をつむって数秒唇を引き締めた。そして顔をあげるとすぐに直

美ちゃんの方を向いた。

「書けたよ」

おつかれさん、という言葉を言つと傘を手渡された。それを奪うように持ち、直美ちゃんにお礼を言つとすぐに職員室を出た。秀司の顔は見なかった。視界の端に秀司の制服だけが見えたけど、顔は絶対みない。

玄関まで走る様に来ると、あつちゃんを見つけた。あつちゃんはこれから練習で、少しの休憩なんだとか。あたしの持っている傘を見て、力の抜けるような笑顔を見せた。

「傘持つてきてなかったんだ」

あたしは頷いた。あつちゃんを見てると自然と安心してしまふ。

「美香つてなにできてんの？ あたしは電車だけどね」

「そうなんだ。あつちゃん走つて来てそうなのに。ほら、足が子持ちししゃもじゃん」

あたしが丸出しにされてるあつちゃんの足を指差すと、二人の目はそこに向いた。それからしばらくして、あつちゃんが笑った。

「失礼ね。あたしのあしが子持ちししゃもだなんて、ま、いいけど」

「わあ、あつちゃんが怒ってる」

面白い。笑ってるのに、眉と眉の間に皺が刻まれてるもん。あたしも思わず笑ってしまった。

「美香つて、変な子よね。あ、やば！ 練習行くね、また明日」

手を振つて去つて行くあつちゃんを見送りながら、あたしも玄関を出た。出て行くと雨は酷くなつてた。せつかく自転車乗ってきたけど、おいてくしかないなんてなあ。

とぼとぼと歩きはじめると、上から物が落ちて来る様な衝撃を与えられた。傘が少し重い。

「あんたも歩きなんて奇遇だな」

なんとなく、そうじゃないかとは思つてた。あつちゃんと話したのが悪かったのかな。

「そうよ。もう、ほつというてよ」

スピードをだして歩き出すと、同じ様に雨の中を歩く音が聞こえる。

「お前さあ、オレの事無視し過ぎじゃない？」

「あんたがした事、覚えてないの？」

ああ、あれね、と軽く流す様に言った。それがあたしは気にいらなかった。あたしがどれだけ傷ついたか知らないのは当然だけど、謝罪の言葉も悔いる様子もないなんてありえない。

「あれぐらいで怒んなよ、つき合ってる頃はオレとしてたんだろ？」  
しても、あんたみたいに悪い様にはしなかった。それにすごく、優しくかったし。

「黙ってないで、何か言ったら？」

あたしは立ち止まって、秀司をまっすぐみた。秀司はいやらしい笑みを浮かべて、あたしの言葉を待っている。

「あんた最抵よ。あたしの気持ちを踏みにじって・・・今度は何よ？ あたしの事キライって言ったくせに、優しくしたり。せつかく今日まで何事もなく暮らしてたんだし、このままでいいじゃない。あたしも、言っただでしょ？ キライだって」

何度口に出しても、胸がズキズキしてしまう。こんなこと言いたくないのに。本当は。

「うん、そうだな。このままでいいって、思う」

「なら、ほっといて！ 話しかけずに、あんたがあたしより先に歩いたらどうなの？」

秀司は笑っていなかった。無表情であたしを見ると、傘で顔を隠して歩いてきた。あたしの言った通りにしてくれるんだと思った。そしたら、なんだかもうどうでもよくなって、あたしはあきらめる準備ができていくのかもしれない。

通り過ぎる。早足のはずなのに、ゆっくりに見える足取り。

だが、ずっと何かがあたしの手を捕らえた。それがそのままあたしを強く引き寄せた。

「ほっとけないじゃん」

そう聞こえたと同時に、あたしが持っていた傘は意味をなくし、秀司の傘は車の通らない道に投げ出された。雨の音が側に聞こえる。でも、目を開けてもそこに雨はない。ただ、空が見えた。

## 第十話 予兆（後書き）

評価してくださった方に感謝したいとおもいます。 < b r >私のよ  
うな、まだまだ未熟者の作品を読んで下さって、ありがとうございます  
ました。 < b r >これからも、頑張って書きつづけていくので、読  
んでいってください。 < b r >



## 第十一話 雨中

雨粒があたしの方に向かってくる。それが目の中に入らないように手で雨を遮ろうとしたが、あたしの手は動かなかった。押さえつけられている様な感じで、とても顔まで持ち上げられそうにない。

それに、傘が無い。あたしはどうなってるんだっけ？なんて、とぼけているのは数秒だけで、あたしはすぐに自分の状況を理解した。手は秀司につかまれたままで、傘はもう片方の手がかろうじて持つてる。そして、あたしはすっぱり彼に抱きしめられていた。

何かなんだか、あたしは空を見るコトしか出来なかった。

「ほっとけない」

そう、秀司は言った。耳元に声が聞こえてくる。それを意識するときどきしてしまふ。

「ほ、ほっとけないって・・・なんで？」

「んー？　なんでだろ、わかんないけど・・・あんたがしんどそうだと、心配になるし、泣かれると困る。怒ってる時は、ほっとするけど、今みたいなのは強がりだから・・・ほっとけなくなる」

あたしの顔は赤くなってると思う。どんどん熱が上がっていく。こいつどうかしてるのか？普通、こんなこと言えないだろ。

「どうか、してるよ。だって、クライって言ってたじゃない」

はつきり言ってたのをあたしは聞いた。そのおかげで、諦めるべきだと思っただのに。なんで今更、言ってくるの？

「わかんねえよ。でも、今のはだましてるとかじゃないから、マジの言葉だから」

そんな事言われても、信じれるようであまり信じる事が出来ないような。あたしは混乱してる。そんな時に正しい判断が出来るはずがない。でも、抱かれる腕は力強くてすがってしまいたくなる。

「でも、あたし無理。あんたの事すきじゃないもん。あんたも、好きってわけじゃないでしょ？」

それは何度も彼に言ってきた言葉だった。

「それも、わかんない」

わかんない？なんだそれ。秀司は一体あたしに何が言いたいんだ？なにをしたくて、あたしを抱きしめてるの？わけわかんない。あたしは彼の腕から逃れようと、身をよじった。

「好きじゃないなら、ほつといてよ」

「無理」

無理ってなに？

「あんたよくわかんない。そんな気持ちをぶつけられても、あたし困るよ」

そういいながら、あたしは彼から離れた。あたしに比べて、彼はずぶ濡れ状態だった。それにあたしの方をまっすぐ見る目はどこかキラキラと光ってる。

「やっぱり、離れとこうよ。このまま、前みたいに何事もなく過ごしたらいいじゃん」

あたしは傘を拾って、その場に立ち尽くす彼が濡れないように傘をさしてやった。

「じゃ、好きになる」

彼の目は必死に見えた。どうして、急にこんなこと言うんだろ。あたしは彼が危険に見えた。こんな事言うのはどこがおかしくなってるせいだ。だけど、あたしはやっぱり彼を信じてみたいと思ってる。

こんなのおかしい。こんなのは駄目だ。

「帰る、帰るわ、あたし。じゃ」

とりあえず、頭を冷やそう。だって、何がなんだかわかんないんだもん。言ってる事もめちゃくちゃだし。

そうこう考えながら、あたしはその場を後にした。きっと、何かがおかしくなってるんだ。曇り空があたしをそうさせてるのかもしれないし、彼をもそうさせてるのかもしれない。とにかく、今のあたし達はひどく危険なんだ。

彼はあたしの後を追ってこなかった。何も声をかけてこなかった。  
あたし達、どうなるんだろっ。

## 第十二話 走行

雨は思ったより冷たかった。でも、彼の瞳の奥の温もりを感じとれた事が嬉しかった。それは冷たいものではなく、あたしを包み込んだ温かな光でもあった。雨の塊が、あたし達をびしょ濡れにさせただけ、彼の腕に包まれたあたしだけが、その雨から逃れた。

だが彼はおかしくなっていた。あたし達がつき合っていた頃、秀司の記憶があたしを覚えていた頃なら、彼がとった行動は特におかしいものではない。だけど、秀司はあたしを覚えてなくて、キライトまで言った。あたしも好きになれないと思って、今の彼を好きになろうとしなかった。

なのにあの時の言葉はあたしの心を簡単に掴もうとしていた。どうかしていた、もうどちらとも。

「なあに言ってるの！ 好きなんですよ？」

遥ってこんなに勢いのある子だったかな。あたしの前の席に座って、あたしの顔に顔を近付ける為に机に乗り出してる。目はキラキラしてるし、隣にいるあっちゃんの目だっておなじだ。そんなに楽しい話題じゃないんだけどな。

「好きじゃない！ 感違いしないでよ！」

あたしは思わず大声で否定していた。

「なら、あの人の事みないでしょ？ ね、あっちゃんもそう思うよね」

あっちゃんも何度も首を縦に振った。そんなにしょっちゅう見ることないし。しかも全然そんな気持ちはないし。って事はないけど。

「好きだつて認めたら？ じゃないと、あの人とられちゃうよ」

とられる？ 元々、あたしの物ってわけじゃないんだけど。あたしが黙っていると、あっちゃんが口を開いた。

「そうなんだよね」

「なにが？」

「吉田秀司って結構、告られてるらしいのよね」

それはあたしも知ってる。あたしとつき合ってた時には考えられないことだったけどなあ。今の方がどこかつかっこいいと思わせる雰囲気があるし、モテるのも分かる。ああ、複雑。

「それで、どうしてとられるって話になるの？」

そこで遥とあっちゃんが見合わせる。

「知らないんだ。気づいてないの？ 美沙ちゃん、ねらってるらしいよ。あの人の事」

美沙というのは、秀司とよくいる女の子でめっちゃめっちゃいい子だし、秀司とは結構仲いいし、ねらっているとは思わなかったけど、いわれてみるとそれは考えられる。

「ふーん、別にいいんじゃない。あの二人がつき合っちゃえば」

あたしは立ち上がって、教室を出た。二人から見ると態度の悪い子だと思われるだろうけど、あたしが少し意識したために秀司と美沙が見えた。その二人が笑ってる顔を見るのが辛くなって、教室を出ただけ。

あたしはどうしたいんだろ。昨日の秀司にすがりつけばよかったんだろうか。

「よっ」

ああ、その軽さが気持ち悪いのよね。

「なによ？」

あたしの手には傘があった。今日もまだ雨は降ってるけどちゃんと家の傘を持ってきた。声をかけてきた彼も手に傘を持ってる。二人して同じ透明の傘を持っている。行き先も同じ場所だ。

「そんな、怖い顔してんなよ」

そうさせてるのは、あなたですけどね。

「なんで、あんたも今返しに行くわけ？ 後にしなさいよ、後に」

「イヤ。オレは今返しに行きたいわけ。お前が後にしたら？」

ああ、もう何も言わないほうがいいのよね。あたしは黙って歩くのを早めた。職員室まで近い場所に教室があつたので、すぐに着いた。入ると直美ちゃんは少しだけ奥にいて、すぐに呼べた。あたしと彼が競う様に傘を返すと、直美ちゃんは吹き出して笑った。彼は同じ様に笑ってたけど、あたしには気に入らないモノだった。

早足で職員室をでて、彼はあたしの後ろにいた。

「ねえねえ」

「なんですか？」

後ろも振り返らずにあたしは彼に言った。

「今から帰る？」

「帰りますけど」

「じゃ、ちよつとつき合えよ」

あたしはしばらく、黙つたまま歩いてたけど教室の近くまで来ると、走った。そして教室に入つて鞆を持つと、まだ教室に残つていた遙にあいさつもせず教室をでた。

あたしさえもよく分からない自分の行動だったけど、ただ彼といなくなつた。ただのむなしい行為だったわけだけど、あたしは彼を振り払えると思つていた。

「はいはい、いいかげん大人しくしろつての」

秀司はあたしの鞆をとつて、あたしを止めた。

「むかつく、本当にむかつく。ほつといつて言つたじゃない」

「そうだっけ？」

あたしは彼を見た。顔がにやにやとして楽しんでるし、からかつてるコトを表してる。しばらく睨んでやったが、あたしは彼の顔からいやらしい笑みというものが消えると、息を吐いた。どうでもいい。なんか、強がつてる自分がある気がして、逆に大人気ない。

「わかつた、わかつた。何がしたいの？」

「チャリ貸してよ」

チャリつて、どこに行く気なんだ。あたしは頷かずに下駄箱で靴を履き替えて、チャリ置き場まで来ると、彼に自転車の鍵を渡した。

嬉しそうに鼻歌を歌うのが何故か気になった。歌ってる歌が下手すぎて何か分からなかったけど、なんとなく知ってる様な気がした。

「で、どこに行くの？」

「さ、あ、ね？」

秀司は笑って、あたしに後ろに座る様に促した。あたしはすぐに後ろに乗ったけど、なんか釈然としない気持ちを抱いていた。昨日から、やっぱり彼はおかしい。

### 第十三話 映画

連れてこられた場所は、公園だった。あたしはこの場所を良く知ってる。

お金のない貧乏なあたしと秀司はつき合ってた頃、よくここにきてずっと喋ってた。休みの日でも、学校の帰りでもいつでもどんな時間でも、彼との思い出はここにあった。

「なんで、ここに？」

チャリから降りたあたしは、急いで彼と語り合っていたベンチに座った。丁度木の影がベンチを包み、夏には涼しい場所だった。

「・・・記憶は、ないけど、写真があつたから」

写真、あたしがよく持ってきた。毎日の様にここに来て、あたしはここにあるものをいっぱい撮っては彼に渡してた。なぜなら、あたしが撮るのは必ず彼がいる写真だからだ。焼き増ししてるので、彼が持つてるのをあたしも持つている。

でも、写真をみただけでどうしてここに来る気になったんだろう。

「オレは・・・、オレだけど、あんたはすごく重要だ」

「なによそれ？」

秀司はあたしの隣に腰掛けた。自転車は丁度目の前に置いてある。「昨日は、どうかしてたけど、気持ちははつきりしてる」

あたしは彼を見ないようにした。彼の横顔はあたしが一番好きな所だった。あたしの男性を決める時の一番重要なポイントが横顔だからなんだけど。ほんとに、横顔は正面からじゃわからないけど、めっちゃめっちゃキレイだ。

「あんたは、オレにとって重要な人。だから、あんただけをオレは忘れてしまった。それにオレは何かいろいろ亡くした気がする」

「いろいろって？」

「写真に写ったオレを見たときに、今のオレはオレじゃない気がした」



それは、まあ、事故のせいだし仕方ないんじゃないかしら。

「それで、あんたがいればそれを思い出せる気がした。重要なことも、全部」

なるほど、だからあたしに対してあんなに必死だったのか。昨日の秀司は本当に驚く程おかしくなっていたもの。今は意志もはっきりしてるし、ちゃんと考えてる。あたしもほっとして話を聞けるけど、複雑だ。

「それって、あたしの事好きになれたら亡くしたモノをとりもどせる。って言ってるの？」

秀司は少し唸りながら頷いた。それって、変な話。あたしは好かれてもいないのに、彼が何かを取り戻す為だけに側にいるってことだろうか。

重い溜め息がでた。

「さようなら」

そう言って立ち上がった。が、彼は慌てた。

「何？急に」

「つき合ってられないっての。あんたがあたしを好きになるのは勝手よ。でも、あたしがあんたを好きになるかはあたしが決めるコトじゃん。だから、あたしを無理につき合わせないで」

あたしはチャリの鍵がかかっているコトを確かめると、チャリを動かした。

「はあ？ オレはあんたと一緒にいることが重要だって言ってるんだけど」

「そんなわがままにつき合えるわけないでしょ！」

彼はあたしの自転車の前に立ち、かごをつかんで道をふさいだ。目は真剣だったけど、あたしもまじめに話をしてる。

「お前、本当にオレのコト好きじゃなくなったのか？」

頬に熱が蘇った。

「あたりまえ！ 全然好きじゃない」

「もし、オレが好きだって言っても？」

「嘘って顔に書いてあるもん」

「マジだよ！」

秀司の大声にあたしは身を震わせた。そして同時に心の波が大きく動いた。真剣な顔で、好きだった秀司の声で、好きだった秀司の顔で。あたしに言う言葉は本物だった。

「マジで、本気で、好きだよ」

やっぱり必死だ。でも本物の言葉ではあると思う。だけど、あたしの気持ちは向いてない。

「・・・どいて」

あたしはどこまでも低い声を出して言った。

「遅すぎたのよ、あたしはもう、今の秀司とはつき合う気はないの」  
できるだけ睨む様に見て言った。怯む様子のない彼を見ると、あたしは腹立たしさを感じる。自転車を彼が目の前にいるにも関わらず、動かした。だけど力の差を表す様に、自転車はちつとも動いてくれなかった。それでも、あたしは進みたい。もう、話すコトはなかったから。

「・・・俺が好きでも、無理？」

「無理」

彼はあたしから目をそらしていった。そして力なく、かごに置いていた手をどけた。あたしはしょんぼりとしている彼をみるとひどく胸が痛んだが、チャリを動かしはじめるとそれを忘れようとしてる自分もいた。あたしが声をかけようとして、自転車を止めていると秀司は自転車にまたがったあたしの手を掴んだ。

「あんた・・・オレがあんたを想ってることは勝手だって、言ったよな？」

言った。そして、あたしがあんたを好きになるのも勝手だとも言った。

「オレは、あんたをあきらめない。オレにとって重要なものは絶対あんたが必要なんだ。だから、あきらめないよ」

あたしは頬が熱くなるのを感じながら、彼を振払った。そしてそ

のまま自転車を走り出して、彼の声を聞こえない様にした。でも、溢れ出てくるのは温かい気持ちだけ。あたしにあんなに必死になつてくれる彼は初めて見る。ただ、今の彼の姿じゃなくて、前の秀司だったらあたしはどんなに喜んだだろう。

遙とあつちゃんに知らせるといろいろうるさいから、あたしは黙ってるコトにした。どう頑張っても、あの二人にすぐ告げるコトは出来ないけど。次の日はまちに待った休みの日だ。ってことは、あたしはどうやっても秀司に会うことはないし、インドア派で家から出るのがキライなあたしなら誰とも会わずに二日間過ごせる。

こういう日はあたしの場合、映画を見て過ごすのがこのところの過ごし方だ。そのつもりで、ビデオは借りてきてある。さ、ビデオをみよう、という時だった。

携帯のバイブが激しく鳴った。あたしは慌ててそれを止めると、メールが届いていた。

秀司からのメールだった。

『おはー！　って起きてるか？　今から出かけるからすぐに支度して、玄関に出といて』

っていうメール。どういうことか、あたし何にも聞いてないし。ていうか、急すぎるし。あたし秀司に会いたくないし。と、思いつつ、彼があたしが下にいなかった時の行動がすぐに予想されて、支度するしかなかった。

玄関に出たのは、十五分以上経ってからだった。秀司はチャリに乗って家の前にいた。あたしが姿を現すと手を振って、笑っていた。私服すら、前と全然ちがうタイプのモノを着ている。それを見るとよけいに、前と変わってしまったんだと強く感じる。

「おっそい」

「うるさいなあ。あんたが急すぎんの、あたし行かないわよ」

そう言くと、彼はズボンのポケットに手をつ込んで、二枚のチケットを取り出した。

「行きませんか？ 映画でも」

よく見ると、そのチケットはあたしが行こうとしていた新しい映画だった。めちゃめちゃ映像が美しくて、コンピューターグラフィックにおいても、かなり時間をかけて作られたもので、映画好きにはどうしても心動かされるものだった。

あたしは、少しだけ考えてみたが、無駄だった。どう考えても、行くに決まってる。

「行くわよ・・・」

そう言つと、秀司は嬉しそうに笑った。

映画館はやたらと人が多かったけど、秀司のチケットは指定席のもので、しかも早くに手に入れたから一番いい席に座れた。

「ほんと、どうかしてる」

彼はあたしと何がしたいんだか、並んで歩くときには必ず手をつなごうとする。あたしは何度かそれを払って拒否したが秀司はあきらめが悪く、あたしは仕方なく彼の少しあせばんだ手に手を重ねた。あたしからは絶対力はいれなかった。

「どうかしてるのは、オレじゃない」

じゃあ、誰だつていうのよ。あたしではないんだから。

「とにかく、もう席座ったんだから、手を離して！」

風をきる音が聞こえるぐらい、あたしは彼の手を振り上げたり、下ろしたりを繰り返した。それでもびくともせずには彼はあたしの手を握る。

「いいじゃん、恋人同士つてことで」

「違うでしょ。ほーら、早くはなして」

と言つても、秀司は知らんぷりをするだけだ。あたしもいい加減あきらめて、静かになることにした。子供みたいだ。秀司はまるで子供の時代にかえったみたいに、あたしに甘えてる。それが好きだからなのか、そうじゃないのか。でも、あたしはそれほど嫌と思っていなかった。

「記憶のあった時、オレはあんたと映画に行ってた？」

「行ったコトない。あたしたち、あんまり市内の方はいかなかったもん」

そうか、と秀司は言った。ちらつと彼を見ると、嬉しそうに笑ってる。ずっと笑い通しだけど、今は顔が少し赤くて、今の彼特有の顔だった気がする。

「あんた照れやすい？」

「照れてねえよ」

そう？ あたしは笑った。なんかおかしいもん。

「お前笑うんだな」

秀司は驚いた顔をしていた。目を開けてあたしの笑ってる所をしっかりと目に焼きつけ様としてるみたいだった。あたしも照れて、彼から顔をそらして映画が始まるまで、彼に顔をが見えないようにしていた。

握られた手がたまにぎゅっと強く握られたり、あたしが握ったりしているうちに映画は終わった。あたしは手と彼が気になって映画をしっかりと見るコトができなかった。本当に見たい映画だったけど、隣に座った人が悪かった。

映画が終わると、とりあえずあたしの手は彼から解放された。

汗ばんでいたけど温かった彼の手が離れるのは寂しくもあった。だけど、あたしからその手をもう一度掴もうとはしなかった。

映画館を出ると、あたしと秀司は近くのファミレスに入った。安くて、おいしい店を彼は知っていた。あたしには寿司がいいと言ったが、すぐに却下された。どうしてもここに連れてきたかったらしい。

あたしがドリアを頼むと、秀司も同じものを頼んだ。

「映画よかったな」

あたしは曖昧な返事をして、水を口に含んだ。

「オレ思っただけ、手をつなぐっていいよな」

あたしは含んだ水を飲み込めずに秀司に吹きかけそうになった。

「な、ななんでもそんなこというの」

「こういうコトなんだと思って・・・好きになるって、こういうことだって分かった気がした、だけ」

秀司は不気味に笑った。気持ち悪いと言っか、変だった。

「ふーん」

でも、あたしも手をつなぐのは悪くないって思った。同じことを思ってるのが不思議だったけど、あたしは少し嬉しかった。



## 第十四話 両想

ファミレスを出るとすぐにあたし達は駅に向かった。あまり長いするつもりはなかったし、特に見たい所はなかった。それより、ずっとファミレスにいて喋ってる方がずっと楽しく思えたし。

家の近くの駅まで着くと、あたしたちは今日はさよならになるはずだった。彼とあたしの家の方向はこの駅からだとまったく別になる。だけど、秀司はあたしを送って行くといってくれた。断わってもどうせついて来るなら一緒に歩く方がいい。っていうのは立前で、あたしは秀司と話をしたかった。

だから秀司が送ると言った時はすごく嬉しくて、顔に出てたかもしれない。

「あ、ここでいいよ」

角を、曲がれば家はすぐそこだった。あたしも秀司も照れて頬が赤く、はにかむ様に笑う。

「じゃ」

とあたしが手を上げて帰ろうとした。でも彼はあたしの手を取って、それを止めた。あたしが秀司をみると、手をつかんだままあたしを引っ張って、一歩分彼に近づいた。

「一緒にいたいんだけど」

あたしは近づく彼の顔からなるべく離れる様に身を退いた。

「・・・あ、あたし・・・は」

言葉が詰まった。どうしたいのか、続く言葉が出てこなかった。

彼はあたしの目を見る。そんなふうに見られても出てこないもんは出てこない。

「早く、言えば」

「・・・やっぱ、むかつく。あたし帰る。別に一緒にいたくないし」  
あたしは彼の手から手をするりとひき抜いて、身を退いた。でも、かれは指をぎゅっと掴んであたしをまた止めた。



「素直になれば？ あんただってオレといたいだろ？」

目が輝いてる。これっていたらず子がする瞳だ。あたしはまたからかわれてるの？ だけど、声は真剣だと思う。っていうか、信じていたい。

「うつさい！ いたくないし、あたしはいつでも素直だし・・・」

彼は首を傾げて次の言葉を待ってる。あたしは息を吐いて、観念した。

「そうよ、あたしだってあんたといたい。だって、もうあんたに恋しそうだもん！ これでいい？ まんぞくした？」

「した」

秀司はあたしの指を引っ張って、腕を掴んだ。それをそのまま、引っ張って秀司はあたしを抱きしめた。前以上に力強く抱きしめられて、あたしは苦しかった。でも、なんだか胸のなかにいることが誇らしくもなった。

今度こそ、信じてみてもいいのかな。彼はあたしの側にいてくれるって、あたしの気持ちを受け止めてくれるって。

「これ、本当に騙してるんじゃないよね」

秀司は力をこめてあたしを抱きしめた。

「マジだよ」

その瞬間、あたしも秀司を抱きしめた。背中に手をまわして力強く抱きしめる。彼の胸の鼓動もあたしの音も、伝わってくる。嘘じゃない、本物だって聞こえてくる。しばらくそうしてから、場所を思い出して、一度抱き合う力を緩めて、顔を見合わせた。あたしの家のすぐ近くで、家ばっか並んでる道で抱き合うのはだいぶ恥ずかしい。幸い人が通る事がなかったが、人に見られていたらあたしはすぐに家に向かっていただろう。

見つめ合うのさえ、照れてしまいすぐに小さく笑い出す。

あたしを覚えていた頃の秀司に、あたしが告白した時の事が思い浮かんだ。あの時はずっと頬が緩んでいて二人して目を合わせては笑ってばかりだった。今もそう。目を合わせるとすぐ笑ってしまう。

「どっか・・・行こうか？」

秀司が控えめにあたしに聞いた。あたしは返事をする変わりに、手を差し出した。しばらく秀司はあたしの手を見て、戸惑っていた。どういう意味かわからなかったのだろう。でも、すぐに手を重ねて強く握って手をつないだ。

「どこでもいいよ」

あたしは恋した。

今の秀司に恋をした。

あたしが知ってる彼とは違っているのに、どうしても惹かれてしまう。全てが違って見えるのに、本来あたしが惚れた所は変わらない。嫌な奴だったけど、今はそうは思っていない。

わがままな秀司だけど、あたしはすごく好きになっている。これから、あたしは恋愛していけるんだろうか。彼と恋愛をしていけるのかな。

手を離すと、秀司は自転車をおして公園まで歩いた。空を見ると夕焼けが広がり、道を見ると真っ赤なアスファルトが見える。日の光がつよくなり過ぎて、まぶしい。目を細めながら秀司をみれば微笑みをかえしてくる。

あたし、結構幸せかも。

#### 第十四話 両想（後書き）

評価してくださってありがとうございました。 < b r >とても嬉しく思っています。恋愛ものを書いています、なかなか上手くは書けないものです。なるべく現実的に描きたくても、書けないものですね。 < b r >見苦しい点が多くあると思いますが、これからも読んでいてください。ありがとうございました。

## 第十五話 隠事

佳枝は複雑そうだった。

「そうなの、ふーん。結局、つき合っちゃうんだ」

あたしは苦笑って、佳枝をなだめた。実はあたしは気がついていた。合コンの日から、佳枝は秀司をある種の瞳で見ている。あたしが秀司を見ていたのと同じ瞳、つまり恋に近いものを抱いていた。あたしの瞳だけが分かる特別な瞳。

「よかってね。って思ってるわよ」

佳枝は笑ってくれた。あたしも笑った。というのも、ここんところずっとあたしは笑ってばかりだし、頬の筋肉が笑ったまま固まってる気さえする。

同じクラスの遙とあつちゃんにもちゃんと知らせた。もちろん、いろいろ心配してくれてた高司にも報告した。みんな同じ反応をかわせて、にっこり笑ってくれてるんだけど、今の秀司は性格があれなんで、やっぱりあたしには釣り合わないと思ってるみたい。あたしも不安は残るけど、土日ずっと一緒にいて離れたくない気持ちが強くなった。

学校に来てからも、ずっと秀司と目を合わせてばかりだった。

「なるほどね」

高司が妙に納得した顔をした。

「なによ？」

「いや、やっぱりあいつ美香が好きだったんだなあと、思っただけ」

そんな話聞いてないんだけど。

「なんでわかるの？」

あたしにはそんな風には見えなかった。どうして高司が気づいてしまっているのか、ちょっとくやしい。高司は鼻で笑うと、さあねとだけ言った。そう言われると気になるけど、あたしはそれなりに

幸せなんで、あえて聞かないでいた。

「ねえ、あんた遙とはどうなの？」

あたしはついつい、自分がいい状況だった為にそう言ってしまった。でも、特になんの反応もせずに高司はチラッと遙を見た。

「別に、何も？ ただの友達じゃん」

あ、そう。あたしは唇をとんがらせて、つまらなさそうな顔をつくった。

昼ご飯は秀司と一緒に食べることにした。学校で一緒にいられるのは昼時だけだ。

「なにそれ、卵くずれてるじゃん」

たまたま早起きして作った卵焼き、確かに母さんが作ったおかず達の中にあるとどうしても目立ってしまいが、そんなに形悪くないと思うけど・・・。

「あたしが作ったの。だし巻きだからちよつとくずれただけ」

ふーん、と言いながら秀司はあたしの卵を覗きみてきた。あたしがフォークを卵やきに突き刺し、口もとに移動するまでずっと見ていたので、食べるに食べられず、卵が突き刺さったままフォークを置いた。

「こつち、見ないでよ。あんたも早く食べたら？」

「それちようだい、お前作ったんだろ」

それって卵焼きよね。あたしは秀司を見てから、卵やきに目をやった。実はあんまり自信がない。たぶん、ちよつと辛いと思う。

「イヤ」

と言って、すぐにフォークを手にもち口にいれた。もう一つあるから、それをまたすぐに突き刺すと、口もとに持っていていったが、フォークは道を外れた。

「あ！ ばか！」

卵焼きは秀司の口の中に入ったいった。ゆっくり口を動かし味わって、呑み込む。

「まずい」

「なら食べないでよ」

ちよつとグサつときた。あたしが食べた時はおいしい、とまではいかなかったけどまずくはなかった。秀司の口には合わないってことかな。あたしがしぶしぶ別のおかずを食べはじめると、秀司は笑つてあたしを見ていた。

何が嬉しいんだか、ずつと笑いつぱなし。でもあたしも笑つてた。あたし達は、どこにでもいるカップルと同じでべったりとはしなかったけど、一緒にいる時間が多く友達以上とう意識もあった。ただ、自分達しか見えなくて周りのことは見えていなかった。

それがあたし達に現実を思いしらせたり、いろんな山をつくったりした。

気づいたのは、しばらく経つてからの放課後。秀司と美沙との会話だった。教室に入れる雰囲気じゃなかったのであたしは戸の外でしばらく待っていた。

「なんで、あの子を選んだの？」

声は冷たかった。あたしの胸にも深くそれが刺さる。

「好きだからだよ」

秀司の声が聞こえた。思わず頬を押さえて、熱を冷まそうとしたが何も変わらない。ガタつという机が動く音が聞こえた。

「秀司、全然好きじゃないって言つてたじゃない？　嘘なんですよ？　だつて、あたしと」

美沙の声は必死だった。気持ちが声に現れていて、あたしは胸元を掴んでいた。あたしは次の言葉を待った。気になる。何があったのか。

「悪いけど・・・今はもうそういうつもりはない」

「まって！　それって秋山さんが、好きだからじゃないんでしょ。

あたし知ってるんだから、秀司が隠してる事」

隠してる事？　何それ、あたしが知ってる事？　いや、隠してる

って事はあたしも知らないことよね。なんたる、聞かして欲しい。  
でも、秀司は何も言わずに教室から出てきた。あたしは隠れようと  
したけど、秀司に見つかって、いい訳さえ出来ない状態になった。  
「よっ」

あたしは苦く笑いながら手を挙げた。ぎこちない笑顔だったけど、  
秀司の驚いた顔に自然と笑えてきた。だけど、秀司はいつまでも驚  
いたまま固まっていた。

だけど、すぐにあたしの手を取って教室から離れた。驚いた顔は  
していなかったけど、険しい表情を浮かべていた。

## 第十六話 不安

どうしたの？とは聞けなかった。秀司があたしの手を掴む力は強く、やっぱり汗っぽかった。険しい顔は何を表しているんだろう。何か、あたしにも言えない秘密でもあるのかな。急に不安になる。急いで前を歩く秀司を見ながら、あたしは彼の気持ちが本当に自分に向いているのか信じられなくなっていた。美沙の言葉が何度も頭の中にこだまする。

「話、聞こえた？」

あたしは俯いていた顔をあげた。秀司はあたしに背をむけていたけど、声は怒っていなかった。もう、あの険しい顔はなくなったのかな。

「・・・本当の事言っと、聞いてました」

「正直者」

秀司は歩みを止めた。校舎をでて自転車置き場まで来ていた。誰もいないし、自転車もほとんどなくなってる。残ってるのは部活をしている人ぐらいだろう。あたしの自転車に近付くと秀司は荷台に腰を下ろした。

あたしを見据える目は真剣。その瞳にあたしはたじろきながら、彼が差し出す手に手を重ねた。

「オレは、ちゃんと、本気で、美香が好きだから」

名前で呼んだ。あたしって赤面症だったかな。真っ赤になっていくのが分かる。あたしは彼の気持ちを疑ってしまった自分が馬鹿だと思った。こんなに真剣に想われてるんだから、自信持つべきだ。声を出すと裏返ってしまいそうだったから、あたしは首を縦に振って気持ちを受け入れた。

「美沙の事は、話した方がいい？」

それはあまり気にしてない。あたしと別れてた時の事だから、いろいろあっても全然かまわないし、今の気持ちがあたしにあるなら



心配することはない。聞きたい時に、昔話をするみたいに聞けばいいんだし、今は聞かない。あたしは首を横に振った。

「そう。じゃあ、美沙の言ってた事、知りたい？」

それって。

「隠してる事・・・あるの？」

秀司は眉間に皺を寄せて、困った顔をした。どうやら、これが一番あたしに聞かれなくなかった事みたい。よく、秀司がつくった顔だった。久しぶりの顔にあたしはまた顔に熱があがってくるのが分かった。

「あるよ」秀司は重い息を吐いた。「たいした事じゃないって、ただ、今は言えない」

「なんで？」

今、言えないって、そんなに隠すことなんだろうか。

「それも、言えない。それを言ったら、美香はオレのことキライになる」

首を傾げた。どうなったら、そうなるんだろ。話したくれないとどうなるかなんて分からないはずなのに。あたしはどうか聞き出そうと、何度も口を開閉したが、結局秀司の真剣な顔に負けた。

「わかった。今は、聞かない。でもあたしのこと決めつけないで。

あたしは、秀司と離れる気ないんだから」

口元を上向きに釣り上げて、秀司はそうだなと言った。両手を握り合って、気持ちを確かめ合った。汗ばんだ手も、あたしを見る目も、あたしの名前を呼んだ声も全部、愛しい。それを、秀司も感じてくれてたらすごく、嬉しいんだけど、どうだろ。

期待を込めて見つめてみたけど、笑ってくれるだけだった。

あたしは眠れなかった。あたしに隠してる事、気になる。彼は何を隠す事があるんだろ、あたしは彼に対してオープンでいるのに。話を聞いてしまうと、どうしても不安ばっかが心に溜っていく。眠れない、目を閉じてても浮かんでくる秀司の顔があたしを締め付ける。

良い話ではないんだ。だから、隠す。

「話してくれたらいいのに」

言葉は宙に浮いて消えていった。誰にも届かずに、消えていく言葉をあたしは拾えなかった。拾っても、誰も聞いてくれない。彼が話す時を待つしかない。彼の記憶が戻るのよりは早いはずなんだ。

記憶、といえば、彼は昔の面影を作るようになってる。

あたしがよく知る秀司の顔もするし、たまに口癖も出てくる。何か引つ掛かる。何かっていうのが、分からないけど、おかしい。悩みが増える事に気づいてあたしは、考えない様にした。たいした事じゃない、いつか気づけるはずだし。

「へえ、美沙つてやつぱ大胆だったんだ」

あっちゃんはずらしくスナックをかじりながら、そう言った。スナックは結構カローリが高かったりするから、バレー部内で食べる事を控えていたはず。ヤッスもお菓子食べないし、今日みたいなあっちゃんは珍しい。その隣の遥はいつもの様にチョコ菓子を食べてるけど。もちろん、あたしもそれをもろう。

「でも、つき合ってるし、ちゃんと好きだって言われてるならいいじゃない」

まあ、それはそうだけど。昨日の夜になってから美沙の事が気になりはじめていた。チャリ置き場の時は、秀司の言葉に安心したばかりだったから聞かないでいられたけど、少し離れただけで思考が変わってしまった。あの二人に何があったのか、そして、どうして今あんなに仲良くしてるんだろ。

いつの間にか睨む様に話す二人を見てしまった。

「こらこら」

と、あっちゃんがあたしの目を手で隠す。

「ダメよ、そんなに恐い顔してたら。美香笑いなよ。気にしなくても大丈夫だから」

「うん」

遥の言葉に頷きながら、あたしはやっぱ強い不安の波に呑み込

まれそうになってた。あたしって、意外と嫉妬する子だったんだ。

## 第十六話 不安（後書き）

すみません。ちょっと、雑に書いていた所がいっぱいあったので、  
本当にごめんなさい。 < b r >今回は心を入れ替えて、しっかり書  
いたので文は前より読みやすくなっているとは思いますが（というの  
も、前がひどすぎました）。 < b r > < b r >評価ありがとうございます  
いました。 < b r >続きが気になると言われると、書きがいがあり  
ます。 < b r >

## 第十七話 病氣

嫉妬、嫉妬、嫉妬。

そんなにいらつく必要があたしにあったのか、よく分からない。秀司といると安心するけど、離れるとすぐ不安になる。どうかしてる。あたし、こんなに弱い人間じゃない。こんなに人に依存するような子じゃない。だけど、秀司が好きすぎて不安ばかりがあたしの心を責める。

このままで、いいのか。ってたまに、考える事が増えた。

「つき合ってたなら、そんなもんじゃない？」

相談相手を間違った。あたしを悩ます奴に相談して、解決すると思ったのかな。秀司は当たり前のように、あたしの手を握った。いつでも話をする時は必ず手を繋ぐ。

「ねえ、なくしたモノ見つかった？」

つき合う前に秀司が口にしてた事。気掛かりだった、隠してる事っていうのもそこにある気がして。

「見つかった。簡単だった、すぐそこにあっただって感じ？」

「どういうこと？」

秀司は少し唸ってから、指を出した。

「空を見ると、懐かしくなるって分かる？」

「うん、あたしもなる」

「オレは、美香を見ると胸をかきむしりたくなる。ずっとそれを感じてて、前はイライラしてた。けど、今はただ懐しくなる。オレのあったはずの記憶がそうさせてるんだと思う。その懐かしくなるものって、何かな？ って考えたときに、美香といれば見つけられる気がした。本当に簡単だったよ」

秀司の目に映るあたしの顔は真っ赤だった。言葉は寒い、としか思えないんだけど何故か嬉しくなる。やっぱりあたしどうかしてる。「好きって気持ちなんだよね。記憶がなくても、それはずっと変わ

らなかった。ただ」

秀司はあたしのもう片方の手を握った。

「ただ？」

あたしは待ちきれず聞いてしまった。ふっと、力の抜ける様な笑みを秀司は浮かべ、言った。

「ただ、気づくのは遅かったけどな」

あたしの顔に影ができる。秀司のシルエットがあたしの体を覆った。近づく彼の顔を見つめた。目は細く、眉はちよつと濃い。顔の形は卵っぽくて、髪はたててる。特別かっこいいわけではない。だけど、あたしは好き。

秀司は動きを止めて、あたしを妙な目つきで見た。

「目、閉じろよ」

あたしは、慌てて目を瞑った。そうすると、秀司の吐息が少しだけあたしの前髪を揺らし、すぐに唇に柔らかい感触がした。

目を開けると、秀司もあたしを見ていた。

「恥ずかしい・・・ね」

あたしが笑うと、秀司も笑って頷いた。

「もう一回」

その声の後にすぐ、秀司の顔は見えなくなった。

空は清々しく、夏の気配はすぐ側まで来ていた。あたしの恋は見えない実体を掴むのではなく、確実に本物を捕らえていた。もっと近付きたい。秀司の事をもっと知りたい。今よりもっと好きになりたい。もう、あたしは秀司にメロメロだった。

だが、事件は起きた。

秀司は学校を休んだ。あたしは何度もメールをした、けど返事は返ってこなかった。心配になって、家まで行くとまってましたという様に秀司の母親が出てきた。

神妙な面持ちで、あたしを中にいれてくれた。客間に入るとお茶菓子をだされ、おばさんが座るとあたしはお茶をいただいた。

「あの、秀司は？」

あたしが思いきつて言うと、おばさんは息を吐いた。部屋中の匂いが全部、秀司のもので安心してしまう。

「秀司は、病院よ」

秀司は頭を打ってから、検査のために月に何度か病院に足を運んでいた。でも、いつもは休みの日だとか、学校がおわってからなんだけど。

おばさんはお茶を机の上に置いて、あたしの隣まで移動した。そして秀司みたいに両手を握ると、あたしを見た。

「先に謝らせて。ごめんなさいね、本当に」

おばさんの顔は今にも泣きそうだった。あたしは困惑していたが、首を横に振る事は出来た。

「なんの事？ あたしおばさんに謝ってもらう事ないわ」

「いいえ、あるの。あたし達、隠してた事があるの」

隠してた事、最近ずっとあたしを悩ましてきた言葉だ。

「秀司が、事故にあった日の事覚えてるかしら？」

あたしは頷いた。あのときは本当に人生が真っ暗闇に見えた。

「あの日、あたし達あなたに嘘をついていたの。お医者さんにもお願いして・・・あなたと秀司が離れるように。秀司は頭を強く打っていたけど、美香ちゃんより早くに目が覚めていたの。あなたは二、三日間眠ってると思ったでしょうけど、本当はあなたより早く起きてた。秀司は、病気なの。あの事故で検査を受けてはじめて分かったわ」

病気、にはいろいろあるけど。

「ガンよ。あの子はもうすぐ死んでしまうわ」

おばさんの目からは大きな涙が浮かんでいた。その瞳の奥にあるあたしの顔も泣いていた。

ガンって、なんで、なんでガンなの？

## 第十八話 約束

あたしは何も聞けなかった。聞たいことはあったけど、それを吹き飛ばす様におばさんの目からは大粒で、滝の様な涙が流れ出ていた。あたしを見ていた瞳は震えて、握った手も小刻みに震えていた。同じ様に、あたしだって震えていた。

恐怖も、悲しみもなにもかもが頭から足のつま先にまで伝わってくる。視界すらばやけて見えたときには、あたしが泣いているなんて考えもしなかった。おばさんと重なる秀司の顔を思い浮かべながら、ただ事実を受け入れるだけの自信がなかった。

あたしが泣いてるのに気づくと、おばさんはあたしを抱きしめた。子供をあやす様にあたしの背中をポンポンと叩くおばさんにすがりつきながら、声をあげて泣いた。なにがなんだか、よくわからなかった。

「ごめんなさいね、本当に」おばさんから離れると、あたしは涙を拭いた。「それで、約束してほしい事があるのよ」

おばさんの目からはまだ涙が流れていた。ぼんやりそれを見る事ができず、まっすぐに見るとおばさんは一息吐いた。

「秀司とは離れてちょうだい。これは、あなたが幸せになる為に・・必要なことよ」

驚いて声も出なかった。おばさんの顔には真剣さがあり、あたしを本気で心配してる事が分かる。

「嫌です。おばさんは、秀司が死ぬと、思ってるの？ どうして？」

「お医者様が言ったからよ。それに、秀司は自分でも確信してるわ。・・・本当は信じたくないわ。望みを持ちたい。いえ、本当は持つてるわよ」

言葉を置くとおばさんは、あたしの髪に触れた。

「秀司は、あと1年あるか、ないかぐらい。今は平気そうに見えても、すぐに症状は現れる。苦しむ秀司を見たくないでしょ？ 秀司



が死んでいく姿を見たくないでしょ？ 私達だって、見たくないものなのに、美香ちゃんが耐えられるとは思えないの。自分でもそう思うでしょう？」

そうだ、その通り。あたしは強くない。弱い。彼がいない生活なんて考えられない、彼がすごく必要だ。だけど、おばさんの言うことも分かる。あたしが耐えられない、だけじゃない。秀司があたしを心配する事だってある。あたしが側にいて苦痛になるときもある。おばさんはそれが言いたいはずだ。

あたしの目からまた、涙があふれた。

「あたし、約束したくない。だけど・・・おばさんの気持ちは分かる、気がするの」

おばさんはあたしの頭をなでた。

「あたしは、秀司に何もしてあげられない・・・ですか？」

おばさんはあたしに微笑みを作った。頬の涙を拭いながら、ゆっくりと言葉を口にする。

「たくさんあるわ。だけど、あなたが幸せであればそれでいいはずよ」

あたしは決めた。幸せは、あたしが決めるけど、あたしは彼を苦しめる気はない。だから、あたしは・・・。

家の中にいるあたしを見つけると、秀司は困惑していた。客間の中にはいり、あたしの正面にすわって見つめ合った。おばさんは席をはずしてくれている。

「どうした？」

秀司があたしの目を覗き込む様に見て言った。

「・・・あたし、お別れを・・・言う為に待ってたの」

秀司はあからさまに驚いた顔をした。

「あたし、好きな人できたのよ」もちろん嘘だ。あたしはこんなモノしか思い浮かばない。「だから、もう会わないわ。あなたのこと、好きだったけど、もう今は全然好きじゃない」

あたしは秀司を見る事がついにできなかった。彼はその隙を見逃さなかった。あたしの頬をつかむと自分の力顔と向かい合わせた。

「嘘つくな。なに？　なんか・・・聞いた？」

あたしは本当に彼をみてる事ができなかった。逃げ場がなくて目を瞑って彼の手を払いのけた。

「あたしに隠してた事・・・聞いた」

秀司は頭に手をあてて、あちゃーと声をだした。あたしは申し訳ない事をしたような気がして、どうしても顔をあげられなかった。

「馬鹿、気にすんなよ。オレは美香がいれば、どうだっていいから軽く口にするけど、そんなに軽いもんじゃない。それどころか、重くのしかかっているはずなのだ。」

「どうでも、よくないでしょ？　あたし・・・だって、いたいけど・・・あなたをいつか傷つける。そんな姿見たくないし、あなたが苦しむ姿だつて見たくないもの」

がたつと音がした。と呑気に考える間もなく、あたしは彼に抱きしめられていた。強くて、苦しいぐらいのハグ。でも、あたしはすぐに彼を突き放した。

瞳が恐ろしかった。怒っているように見えるけど、せつなくもあつた。

「どうしてそうなる？　オレたちは・・・気持ちを通じて・・・」言葉にはならない、そう言われてるみたいだった。あたしだって同じだ。彼を支えてやりたいと思うのに、あたしには自信が持てない。

知らない間にあたしは客間をでて、家を出ていた。

もう、何もみえない所まで来ていた。確かに掴んだ実体は、いつの間にか空気に溶けていき、あたしが本当に掴んだのは何もなかった。

## 第十九話 真実

目が覚めたときに、夢だったら面白いのにと、思った。

面白いとは適切な言葉じゃない。ただ、考えると現実の事とは思えないし彼がそういう素振りを見せる事がなかったから、よけいに信じられないだけだ。

夢といえば、あたしは勝手にストーリーまでつくって逃げようとした事もあった。が、逃げてても現実がすぐにあたしを追い抜かしてしまった。

気分はどん底、天気もあたしの気持ちを反映して濁った色をしている。風も、ほどほどに生暖かく、気持ち悪い。夏はすぐそこだと感じられた。

少しざわつく教室に入ると、あたしは冷たい空気の中に放り込まれた気持ちになった。遙もあっちゃんもまだ来ていない。ヤッスと高司の姿も見あたらない。そういう事は、よくあった。仲のいい子がいないなんてことは、よくある。けど、今日は様子がおかしい。

秀司だ。秀司があたしの席に座ってる。覚悟はしてた、昨日のあたしが発した言葉で納得してくれるとは、思ってたない。だから、何かしら話しかけてくるとは思ってたけど、朝かよ。

「おはよう」

あたしはなるべく笑顔を向けた。すると秀司は立ち上がって、教室を出ようと指で示した。ここでは、昨日の話なんてできないからかな。

秀司について行く間、どうでもいい話をどうにか出そうとしたけど、どうやっても笑える話は思いつかなかった。連れてこられたのは、あたしを騙して苦しめた、第四校舎の空き教室。もしかして、またあたしを貶めるつもりかと身構えてみたけど、空回りした。

適当な席に座ると、あたしたちはまた向かい合った。

「母さんから話聞いた。別れるとか、言われたんだろ？」

あたしはあさつての方向を向いてみたけど、かえってそれが答えになってしまった。

「・・・気にしてる？　って、気にするか。本当なら、オレがそういう事言ってしまうんだろうけど、オレはもうその気ないし、美香がそれに従うとは思えなかった」

あたしは秀司をみた。口元を笑わせて、どこか寂しく見えた。

「聞きたいことが、あったんだけど・・・。事故で入院してたとき、あたしより早くに目が覚めてたって・・・本当？」

秀司は頷いた。そうになると、よけいに疑問が押し寄せてくる。

「じゃあ、あたしの事・・・本当は」

「覚えてた。じゃないと、どうやって隠すんだよ、病気のこと」

あたしは後少しで、殴る所だった。でも一気に秀司の気持ちを読み取ると、そんな気は失せた。全部流れてくる、あたしの気持ちを考えてしてくれていた事だと、そう思うと胸がつぶされる様な気持ちになった。

「わかった。全部、演技だったんだ」

「そう、演技。結構辛かったけど、意外と演技派だったりするのかな。・・・本当に辛かった、美香に思ってもないことを言うのが一番辛かった。側に行きたいのに、行けないのも」

あたしはあまりにも背筋がぞつとする言葉をあえて聞き流した。

言葉にしなくてもよく分かる。うぬぼれてると、思われたっていい。彼は始めからあたしを好きだった。人格を変えたのは、あたしが彼の事を好きにならないようにする為。この空き教室であたしを苦しめたのも、嫌わせようとしたからだった。あたしが一時、身をひいて彼に近付かなかった時は安心をしていたけど、すぐに気持ちはあたしを捕まえようとしはじめた。それによって、あたし達は再びつき合うことになったわけだが・・・。

全てがわかると、つじつまが合う所が多くて信じられるけど、少し疑うものもある。何しろ、あたしは本当に彼があたしを忘れたと思っていたのだから。

人格だつて見事なものだ。雰囲気さえも変えてしまわれると、あたしが見てきた彼の面影では秀司と判断する事はできないんだから。「なんか」あたしは頭をおさえた。「驚いた」

秀司はクスクスと声をだしてわらった。

「オレ、途中から楽しんでたんだよ。言葉遣いも、服装も、友達も全部違つてしまうと世界が変わつて見えて、面白かった。美香は怒るかもしれないけど・・・美香の反応も楽しかったよ。ただ、泣かれた時はさすがに全身に悪寒が走ったけど・・・オレは、諦めない」

あたしは頭を押さえていた手を下ろした。秀司は険しい顔をしてあたしを見ている。

「死なないよ。どうにかなるって、そう思う。だから、側でオレが元気になる姿見てよ。死んだりしないから」

叫んでるように見えた。あたしを必要としてくれるのは嬉しいけど、あたしはその自信がなかった。でも、あたしの気持ちはやつぱり一つしかない。死のうが、病気を治そうが、あたしを騙っていた過去があるうが、あたしはまるごと秀司が好きなんだ。

秀司の手を握った。ぎゅっと、あたしの渾身の力を込めて力強く。「ごめん、あたしが馬鹿だった。いるよ、ちゃんと側にいる。でも、一発殴らせて。あたしを騙したんだから当然よね」

あたしが笑顔で言うのと、秀司も笑顔で答えた。すぐ後にパチンという乾いた音が響いた。

## 第十九話 真実（後書き）

評価、ご指摘ありがとうございます！<br>誤字脱字が多くて、本当にすみません。これからはっきりと読んでから投稿します。

<br>韓流っぽいですが。そのつもりはなかったのですが、昼メロみたいにはなってるかと思います。なんというか、歯の浮く様なセリフ多いですよ（笑）<br>これからもこの路線で最後までいくつもりなんで、おつき合いですと、嬉しです。<br>

## 第二十話 夏近

人に話すべき事ではないと分かっていたが、あきらかにあたし達の態度は変わっていた。それも微妙に。誰かに悟られるような変化ではなかった。感のいい奴以外は。

秀司の周りはどうなのか知らないがあたしは高司にいろいろと詰め寄られた。これも長年一緒にいたせいなのかもしれない。あたしと高司は兄弟みたいなもんだし。

「ふーん。やっぱり、そうなのか」

前もそんな事言ってた様な気がする。あれはあたしと秀司が付き合う事になったのを言った時だ。

「気づいてたの？ まさかね、あたしだって分からなかったのに」

「気づいてた。確かに性格は変わったけど、根本的な所は変わらなかったしな」

首を傾げてみたけど、高司は笑っていた。「これはたぶん、オレにしかわかんねえよ」って言いながら。

秀司については病気の事以外は話しといた。どうせ高司には何もいわなくても分かってしまう気がしたし、誰かに話すと安心するからだ。あたしだけが持つ秘密やら、言ってはいけない事は荷が重い。一人でも話すとスッキリするもんだ。

「それにしても、やるなあ」感心しきった様に言った。「今も性格変えたままだろ？ 美香にバレたんだし、元に戻ってもいいんじゃない？」

あたしは秀司を少し見ると、高司に勝ち誇った様な笑みをつくって見せた。

「それがね、しつくりくるらしいのよ、今の性格。それにあたしも、前みたいにされたらされたで、またパニくるし」

「あ、そう」

そうよ。あたしが言つと、あきれた様に笑った。高司はしばらく

窓の外を眺めていた。見ている方向はグラウンド。校舎からは少し離れた所にあるが、あたしの教室からだとも一面見渡せる。体育の授業のある生徒がちらほらと集まってくる。ジャージの色が緑だから三年かな。

「遙から聞いた？」

高司が急に話しかけたので、あたしは驚いて声に出さずに首を横に振った。高司はまだグラウンドの方をみている。そのまま、言葉を続け様とした。

「告白された」

あたしは顰を飲んだ。遙の気持ちを知ってただけに、ドキツとしてしまった。

「それで、返事したの？」

高司はそこであたしを見た。両手を肩の近くに上げて、手のひらをあたしの方に向けた。

「断わった。オレにもいろいろあるんでね」

「そう、なの」

力なく答えると、高司は残念だったな、と言った。見透かされていた。あたしはずっと二人はつき合えると思っていたからだ。あたしが幸せな気分だったから、誰かも幸せな気分であって欲しかっただけ、とも言えるけど。

高司の言っていたいろいろについて、何か聞き出そうとしたけど、言葉は喉の真下に引っ掛かったままだ。

遙は誰から見ても元気がなく見えた。あっちゃんも、ヤッスもなにやら声を掛けてみるけどたいした答えも返さず、机に突っ伏したまま窓の外をみていた。あたしに対しても同じだ。ただ、一瞬目を合わせて泣きそうな顔をつくった事があるのだけど、突っ込めなかった。

あっちゃんに事情を話すと納得したが、いらだってもいた。あたしも実は午後になると腹立たしくなっていた。失恋したからってこ



こまでテンション下げるなよって、言ってやりたくなかった。でもあたしも、秀司と別れた時はこうだった・・・かもしれない。そう考えると、すぐに腹立ちは冷めて、秀司の病氣のことが浮かんできて同じ様に落ち込んでしまいたくなかった。

ただ、あたしにはまだ現実的なものにはなっていなかった。秀司の病氣が本物か、うまく理解できていないのだ。何しろ、本人はいたって健康に見えるんだもの。

帰り道、あたしは自転車を押しながら、秀司も自転車を押しながら、少し遠回りして話をした。話題は高司と遥の話になり、秀司は微妙な笑顔を向けて話を聞いていた。その顔は、秘密を持っているようにも見える。その話が終わると、すぐに夏休みの話になった。

「どっか行く？」

「あたりまえじゃん。あたしね、海行きたい」  
海かあ。と口の中で秀司はつぶやいた。

「あ、そうだそうだ。母さんの知り合いに海の近くの民宿で働いてる人いるから、話してみようか？」

え、それは、お泊まり？って事。あたしは顔を上げにくくなった。それに気づいたのか秀司は慌てて、言葉を足した。

「ええっと、あの、バイトだよ、バイト！ 八月いっぱい使って、民宿のバイトしないかってこと。去年母さんに言われたんだよ、そこでバイトすれば結構儲かるって」

なるほどね。それに、海で遊ぶそうだし、八月中は秀司とずっといられるし、お金は入るし。何より、いい思い出になるよね。

「やるやる！」

そう言うのと、安心した様にあたしに笑顔を向けた。

家に帰り着いてしばらく、電話がかかってきた。それは秀司の母親からだった。

『いきなり、だったかしら？』

「いえ、全然いいいですよ。何かありました？」

数秒の沈黙の間に、雑音が何度も聞こえた。

『秀司と話したのよ。美香ちゃんに、変な事言っなくなって怒られちゃって。ごめんなさいね。私ね、二人の恋がそんなに深いものだと思っっていなかったのよ。もちろん、遊びだと思ってたわけじゃないのよ。でも、人の死ってすごく苦しいものなの。それを覚悟してつき合える程の気持ちを持つてると思ってなかった。今はわかってるの。あなたはちゃんと分かり合って、好き合ってる。しっかりとした気持ちを持っているってこと。だから、何も言わないわ。母親として、見守っていく。病氣のことも、あなた達のことも』

うつすらと涙が浮かんできた。込み上げてくる熱いものはあたしには抑えられない。母親だ。この人は母親なんだって、思わず感動してしまう。こんなに思われる秀司は幸せもんだあ。

「ありがとう、おばさん。あたし、秀司を支えられるようにしつかりするわ。覚悟はするけど、諦めない。だからおばさんも諦めないで」

最後の方は涙混じりでうまく言葉を伝えられなかったかも。それでもおばさんが力強く『そうね』と言うと、安心して受話器にしがみつきながら泣きじゃくってしまった。

電話を切った後も、おばさんの言葉が心に染み込んでいく。

これから、あたし達が闘っていく所。あたしも秀司も、病氣という奴に立ち向かわなければならぬ。知らず知らずのうちにあたしは手を握ってガッツポーズをつくった。そのまま上下に振ると、声を出して気合いをいれた。

## 第二十一話 贈物

遙の落ち込みっぷりは、三日ももたなかった。立ち直りが早いというのか、気が多いというのか。遙は高司とも簡単に話をするようにもなっていたし、気になってる人もいると言っていた。あたしには考えられないし、あっちゃんも遙が強がりで言っていると思ったらしく、特に突っ込むことはなかった。

試験が終わり、夏はすでに絶頂を迎えていた。

「ねえ、美香！ たまにはあたしらとどっか遊びに行かない？ ボーリングとか？」

夏休みの話になるとすぐに遙はそうもちかける。あっちゃんも随分のり気で珍しくあたしを無理にでも誘おうとしている。

夏休みの半ばである八月のほとんどは秀司と民宿でバイトをする。七月なら遊べるんだけど、あたしはあまり秀司と離れたくなかった。それは、時間が少ない、ということから来るものなんだけど、たまには遙やあっちゃんとも遊びたいという気持ちもあった。こんな事を秀司に言ったら迷わず、遊びに行けば？とでも言われるだろう。その時の秀司の顔を思い浮かべながら、あたしは遙達と一日だけ遊ぶ予定をたてた。

授業が終わるとすぐ、美沙があたしを呼んだ。呼ばれた瞬間、嫌な予感がした。何を話なのか予想が出来る。たぶん、秀司のことだろう。

美沙の後に続いて廊下まで来ると、開けっ放しの窓の外を見て、しばらくため息を吐きつづけた。それから身を翻してあたしを見た。その目には、怒りがあった。

「秀司があんたの事ずっと覚えてたって・・・聞いたんだっけ？」  
「うん」

そうか。とだけ言うと美沙はあたしの目の前に立った。それから、

手を振り上げて一気にあたしの頬めがけてそれをぶつけた。乾いた音が響き、あたしは驚きのあまり足を踏んばったまま美沙を見た。ゆっくり頬に手をあてて、叩かれた所を触る。

「・・・なんで？」

かろうじて言うとき美沙の目にはうつすらと涙の膜が張られた。

「あたしはずっとあいつの近くにいたのに、見てもらえなかった。なのに、あんたはずっと好かれて・・・。くやしかったのよ、なんであたしは見てもらえないのか。あたしの方があんたよりずっと秀司のこと幸せにできるのに」

呆然と美沙を見る事しか出来なかった。涙は流さなかったけど、鼻が赤くなっていくし、目の周りも赤い。

でも美沙の言葉に頷けない。あたしだって、美沙が悔しかった事はあったんだ。秀司が好きな気持ちは誰にも負けないと思ってる。ただ、あたしだけが秀司に気持ちを抱くのを独占する事は出来ないし、結局誰を選ぶかは秀司が決める事で、秀司はあたしを選んでくれた。想うのは勝手なんだ。あたしが決める事じゃない。

あたしは泣くのを堪える美沙に近寄って、手を振り上げてすぐに頬にそれを当てた。また、乾いた音がした。

「いったー！」

美沙が大声を出すのも構わず、あたしは鼻で笑った。美沙がおかしいんじゃないかって、あたしのしたことに笑えた。こんなこと、できるんだって。

「話、それだけならあたし帰るわね。秀司が待ってるだろうし、ゆっくりしてられないの」

あたしはわざと秀司の名前を出した。予想通り美沙は少し焦っていた。でもすぐにあたしを睨み付けて、何かを言おうとした。

「あたしは、勝手にするから！ 諦めたりなんかしない」

それを聞くと、すぐに美沙を見て勝ち気に笑ってやった。怒った美沙の顔がやたらに面白くて声を出して笑ってしまった。

あたしって結構、いじわるな奴だったんだ。

テスト返しはとん拍子に終わって、夏休みがやってきた。

毎日のように秀司とは会っていて、秀司の病院へ行く日以外はあたし達はいつでも一緒にいた。会えない日は長電話をしたし、メールも頻繁に行っている。病院にあたしを連れていつてはくれなかった。

検査が進むに連れて、時間がかかる事も多くなり、きつい事をされるようになったと秀司は言った。それを見られたくないのと、あたしにあまり病気の事を考えてほしくないからだと言っていた。

納得できなかったけど、あたしは従うしかない。

「民宿でバイトしてる間は病院いなくて大丈夫なの？」

公園のブランコに乗りながら、秀司を見上げた。もう何時間もいるのに、あたし達は帰ろうと切り出せずにいた。というのも、いつもの話なんだけど。

「うん、一応おばさんの方にオレの事は話してもらってるから大丈夫だよ」

そうはいつでも、いつ何が起きるかわかんないし。あたしが不安になっているのを気づいたのか、あたしの肩に手をやって、何度か叩いた。

「心配する事ないって。それよりもっと楽しいこと考えたら？ オレの事はしばらく、考えないようにしよう」

いや、無理だから。どうやっても、あたしから病気の事を離すなんて無理。

「そうだ、オレ渡そうとした物があつたんだよ」

そういつてズボンのなかに慌てて手をつまむと、中から小さな紙袋を出した。小さなリボンがついていて、すぐにそれが何を意味するモノかわかった。

「去年、渡しそびれてたから・・・」

照れて言われると、こっちまで照れる。秀司の手に乗った紙袋をつかむと、袋を開けて中を見た。指を突っ込んで入っている物を取

り出した。

小さなラインストーンが散りばめられたチョウチヨのネックレスだった。

「かわいい」

あたしが満面の笑みを浮かべて秀司を見ると、なんだか嬉しそうに笑う秀司がいた。いそいで首につけて、秀司に見せびらかすようにいに笑顔が広がった。

秀司はあたしのつけたチョウチヨに触れながら、笑った。

「遅くなっただけ、誕生日おめでとう」

それだけいうとあたし達は目を瞑って、キスをした。

あたしと秀司は一緒に来年を迎えられるんだろうか。そんなことを考えながら、あたしは秀司の手に手を重ねた。また、あたしの誕生日を祝えるといいなあ。いつまでも、こうしていられればいいなあ。

## 第二十二話 初日

暑すぎる、夏はすぐにきた。

「ひろーい！　でかーい！　本当にここが民宿？」

あたしは興奮し過ぎて、秀司にしがみついていた。車から出てきたおばさんがあたしの側まで来ると、荷物を渡し、一緒に民宿を見上げた。

「ここよ、ここ」

正面にはあたしと秀司がバイトするおばさまの友人の民宿がある。予想以上にでかい宿で、あたし達の他にも何人かバイトの人が来ているようだった。木造で作られ、海に近い場所にあり、玄関口は広々としていてすぐ近くの部屋にはバルコニーがついている。二階建て奥行きが広く土地全体から見えて大きく見えた。

ドキドキしながら、玄関口に立っているとおばさんが早足に中に入り、あたしと秀司が後を追った。

「待ってたわよ。どうぞ、あがつて」

中に入ると和の雰囲気が一気に広がり、畳の匂いがした。あたしのおじいちゃんの家に似ている匂いだ。

おばさんと、おばさんの友人は客間の方に向かい、あたしと秀司は長女の香織さんに部屋の方まで案内された。あたしは女子部屋で、秀司は女子部屋から離れた二階にある男部屋。当然といえばそうだけど、少し離れ過ぎた場所にあるのが寂しい。

香織さんが中に入り、あたしが後に続いた。すでに2つの荷物があって、一人だけ中にいた。どうやら寝て過ごすだけの場所という感じで特に何も置かれていない。

「サヨちゃん、この子新しいバイトの子で秋山美香ちゃん。サヨちゃんと同じ高校生なのよ。いろいろ教えてあげてね」

香織さんはサヨという女の子に言うとすぐに部屋を出て行った。あたしもサヨも顔を見合わせると、気まずそうに笑って、サヨがこ

うちに荷物置きなよ、という指示に従って荷物を置いた。

「美香ちゃんだよね？ あたし１８なんだけど、タメ？」

年上だ。あたしは慌てて首を振って否定した。

サヨは美人系だ。雰囲気からいってもギャルって感じがするけど、学校にいるギャルとは違って、大人っぽくて、化粧も控えめで、肌が白いのが顔を引き立てる。近付くとよけいに美人顔が目立って見える。目をそらしたくなるぐらい目に力がある。

「あたしは１７です。あと、美香って呼び捨てでいいですよ」

「まって、ここ学校じゃないんだからさ、あたしに敬語使わなくていいよ。それと、あたしの事もサヨでいいからね」

やっぱり性格もさっぱりしてていい人だ。

「あの、荷物の人は？」

あたしはサヨの隣に置かれているキレイな荷物の山を指差した。

「あれは大学生の人で麻美ちゃんだよ。めっちゃ優しくて、話やすいけど、きつい事もよく言う人よ。美香はすぐ気にいられると思うけど」

そうかな、と照れてみるとサヨは笑っていた。

トントんと軽いノックが聞こえた。どうぞというサヨの声の後に秀司が顔を出した。どうやら客間の方に行かないとまらないみたいだ。確か、おばさんとその友人の人が話をしているはず。

あたしが立ち上がる前にサヨが耳打ちしてきた。

「あの子、あんたの彼氏？」

あたしが頷くとサヨは微妙な表情を作った。でもそれを聞かずにあたしは部屋を出た。

「何話したの？」

「え、いや、別になにも」

耳打ちの事は隠す事じゃないけど、話するのもなんかあったという感じであたしは何も言わなかった。それにサヨの顔も気になったし。秀司と並んで歩き客間につくと、おばさんとその友人はあた



し達を凝視した。

「座りなさい」

従って座ると、おばさんはお茶をだしてくれた。

「ここでの規則は、あいさつをきちんとする事、返事をする時は大きな声で、仕事はテキパキと素早く。他の細かいことは紙を渡すわね。それで仕事なんだけど、主に雑用だからね」

あたしと秀司は小さく返事をして、すぐに大きな声を出していい直した。

話はそれほど長くはなくて、民宿の話とお客に対する態度についての説明だけでおわった。民宿を経営するヒロさんはふわふわした感じの人で、声も高く、体つきもそれなりだ。

秀司の母親が帰るのであたし達は玄関に出ておばさんを見送った。しばらく秀司と二人だけで言葉を交わしていたのだけど、あたしには聞こえなかった。たぶん、病気の話だろう。

見送った後にあたしと秀司は手をつないで中に入った。今日は初日なので仕事の話聞くくらいで特にすることはない。香織さんを発見するとすぐに昼食部屋に連れていかれて、あたし達は話を聞く事になった。今はお客が少ないが、しだいに多くなるから仕事は早めに覚えてほしいとも言われた。

「とりあえず、しばらくはあたしと一緒にいてもらうから。秀司君は同じ部屋の青山さんに教えてもらってね」

気の抜けた返事をする、話は終わった。

いろいろ言われたけど、耳にすり抜けていってあまり記憶にない。秀司はどうなんだろう、と上目づかいに見てみたが、気持ちは通じなかった。

部屋に戻る頃には日が暮れて、部屋に戻るとサヨの他に髪の長いスレンダーな女の人があった。すぐに麻美ちゃんという人だと分かったんだけど、あたしの事睨んでる？ビクビクしながら荷物の側に座ると、麻美ちゃんはそっぽを向いた。

「この子だね？」

「新しいバイトの美香ちゃん。あたしの一個下なのよ」

ふーんというと、麻美ちゃんはあたしを見た。やっぱ睨んでる。

「かわいいじゃん。やっぱ高校生はいいねえ」

それだけいうと、部屋を出て行ってしまった。あたしなんかしたのかな？と思っていると、サヨがあたしに寄ってきて声を潜めて「あれ自顔なのよ。睨んでるわけじゃないのよ」と言った。本当にそうなのか微妙だ。

そこでまたノックの音がして、秀司ともう一人別の男の人が現れた。

どうやら食事の準備を手伝いに来いと呼びにきたみたいで、男の方の方はあたしに頭を下げてあいさつをした。森田さんっていう人で、麻美ちゃんと同じ大学生の人。秀司とはすぐに仲良くなり、あたしをほったらかして男同士で話してる。

あたしもサヨと話をしていただけ、サヨの目線が気になって話は耳を通り抜けていた。

サヨの目は時々秀司を見つめる。そこにどんな意味があるのか今はわからないけど、気になってしまう。

嫌な予感がした。

## 第二十二話 初日（後書き）

美香は病氣のことに触れていませんが、今は秀司との思い出を作りたいという気持ちで、そこはあまり書きませんでした。そこをわかってもらえると思います。

## 第二十三話 嫉妬

バイトを甘く見ていた。経験のないという所が悪いのかもしれないが、あたしはまったく力仕事に向いていなかったようだ。役立たずのレッテルを今にも貼られそうでビクビクしてしまう。

「しんどい、疲れた、ねむい」

こんなことしか言えない。

民宿に泊まるのはほとんどが団体で、ここもそれ用に大きくつくられている。例えば体育系の部活が合宿に使うのが周りに民家のないような、民宿になるわけで、当然ここはそういった民宿だ。けど、海に近いし、運動場もないので使うのは、大学生のサークルぐらいかな。あとは、家族連れがたまに来るぐらい。

あたしもここに来て一週間は経つので、仕事に慣れてきた。朝は早くて、朝食づくりを手伝う。それから部屋の掃除をして洗濯物を片付けて、昼ご飯作ってそれを片付けてすぐに晩ご飯が来て、風呂の支度もして、それからやっと寝られる。そののどけだけしんどいことか、しかも休みは昼ご飯の片づけの後ぐらい。

お客さんはどんどん入ってくるし、毎日よく分からなくなってきた。

でも、バイトの人とは仲良くなった。サヨと麻美ちゃんはもちろん。もう一人、女の人では愛美（みんなはえつちゃんと呼んでる。えくぼが可愛いからという理由で）というまたまた、大学生の人が入ってきた。その人はあたしタイプで、あんまり派手目じゃないけど化粧とか服装はそれなりに着こなしてる。そこがあたしとは違うけど、雰囲気は似てると思う。って勝手に言っただけかな。

あと、男の人では秀司と仲のいいもっさん（森田さん）とはよく喋るようになった。っていうか、もっさんはおもろすぎで、サヨと似てる感じ。体軀はがっしりしてるのに引き締まってる所が男らしいというか、聞いた話ではサーファーらしい。今度の休みには練習

に海に出るって言ってた。

それから、青山さんはめっちゃ大人っていうか25歳っていうからあたし的にはおじさんかな。サヨも笑って同じことを言ってたし。青山さんもサーファーらしく、もっさんとはいつつもその話をしてる。あたしと話す時は妹扱いで、あたしもついつい兄みたいに思っ  
てしまう。確かにいとこの兄ちゃんに歳が近いけど。

「美香、そのぞうきん絞って、こっちにちょうだい」

麻美ちゃんは結構、きびきびした人で言葉の語尾が少しだけのびる。でもその響きがなんか可愛くてあたしは真似したくなって、時々やってしまう。けど、自分で言うのと気持ち悪いのですねにやめた。麻美ちゃんにぞうきんを渡すとすぐに部屋の中に掃除機をかける。畳だけここでは部屋が多すぎるから掃除機を使ってる。ここは八畳だからまだいいけど、広い部屋では五人でやってる。男組がたしかそこにいると思うんだけど。

窓を拭きはじめた麻美ちゃんを見ながら、あたしは掃除機をかけた。掃除機は音が小さい最新型であたしの家にもひとつ欲しい。

「麻美ちゃん、サヨって彼氏いないのかな？」

動きを止めずに麻美ちゃんはあたしを見た。

「本人に聞きなよ。あたしが知るわけなんだから。でも、たぶんいないと思うけど。いたらこんなところ、バイト来ないでしょ？ 美香は違うみたいだけど」

それもそうかな。あたしは無言で納得した。けど、それならそれで問題がある。

サヨのあの目はあたしの知ってる目で、麻美ちゃんだって多分解ってるはず。だって、秀司に対する態度だけ明らかに違うんだもん。あれってブリッコっていうんだっけ。

「それって、嫉妬っていうんだっけ？ あんまり考え込まない方がいいわよ。マイナスに行くとか後戻りできなくなるときがあるからね」  
「大人あ」

麻美ちゃんは窓を閉めるとふふんと鼻で笑って、まあねと言った。

ちよつとかつこいい。

秀司と会えたのは風呂からあがつてきた時だった。サヨと一緒に、秀司は外の自販機まで飲み物を買いにいった。あたしより先にサヨが秀司の前に出た。青筋が一瞬あたしの額に浮かんだと思うけど、二人はそれに気付かない。

「秀ちゃん、ちよつと外でて夜風でもあたつてみない？」

秀司はこのみんなから秀ちゃんって呼ばれてるけど、サヨが言うとなんだか変に耳に残る。っていうか、それを誘うのはあたしなんだけど、どうしてサヨが誘うわけ。

「あ、もつかして前の話？」

何？前の話って、あたしサヨとそんな親密な話したことないし。

「そう、そう。聞いてもらえるかな？」

ってちよつと上目遣いだし。

「いいつすよ。じゃ、美香。また後で」

何よそれ、っていうかサヨと二人で何話すんだ。あたしは仲間はずれてそれってどうよ。秀司はなんであたしに何も教えてくれないわけ？むかつく。って本人には言えないんだけど。

あたしは返事するかわりに踵を返して二人から離れた。秀司はあたしを引き止めなかったし、サヨも何も言わなかった。胸がもやもやして気持ち悪い。怒ってるって事に気付いたのかな、それとも何にも思わなかったのかな。これって、やっぱり嫉妬か。

あたしって格好悪い。

風呂場の前のイスに座っているとあたしの傍に仲良さげに話していたもっさんと愛美と麻美ちゃんが来た。あたしが三人を見上げるだけでみんななんとなく察したらしい。麻美ちゃんはあたしの肩を抱きながら隣に座って、もっさんと愛美は前に立ったまま舌打ちした。「やられちゃったの？ 美香ちゃん」

もっさんは呆れ口調で言う。

「そうなんですよ、っていうかめっちゃむかつく。あたし眼中なしってどうなんですか？ そんなことないです？」

って同意を求めてみたけど、三者三様あいまいな返事しか返してもらえなかった。

「でも、サヨって悪い子じゃないからさ、そんなに気にすることないと思うけど。特別色っぽい話じゃないでしょうし」

「気になるし」

あたしがぶつぶつ言い出すと愛美はつきあってられないと、手を挙げた。

「嫉妬はいいけどさ、息抜きしてみなきゃ。そうそうもうすぐ休みもらえるじゃない。一緒に出かけようか？ みんなで海でも」

いいねえっともっさんが言つと麻美ちゃんも同意した。今は気分じゃないけど、やっぱ息抜きすべきかな。あたしは大きいため息を吐くと麻美ちゃんにしがみつinaながら「あたしも行きます」と言った。

大人三人組はよろしい、とあたしの頭をぐちゃぐちゃに撫でた。

女部屋のサヨ以外がテレビに集中してる時にサヨは戻ってきた。しかも普通にあたしに話しかけるし。いや、別にいいんだけどちょっとは気を使ってほしかった。

「ええ、何のテレビ？ あ、これって特別ドラマ？」

画面に近付きながら話しかけてくるけど、あたしはぎこちなく笑うしかできなくて視線を麻美ちゃんに向けてヘルプを出した。

「そうそう、前にやってたドラマの特別編みたいなの。こっちきて見る？」

はいーいと甲高い声をだしながらあたしの前に出ていく。

あたしはむかむかした気持ちを抑えるために部屋を出た。するとすぐ近くにある階段に秀司が座っていた。タオルを頭に巻いて、あたしの方をじつと見る。

むっとしながら「なによ」っと言うと、秀司は「べつに」と言っ

た。

「美香、怒ってるだろ」

あつたりまえたつての。

「そうかな？ 普通だけど」

「また、嘘つくの？」

その顔むかつく、あたしの事探ろうとしてる顔、見透かされそう  
でいやなんだよね。

「こつち見ないでよ。あたし怒ってないし・・・秀司の行動とか、  
なんでもかんでもあたしが決めることじゃないし・・・」

「なんのこと？」

とぼけてるのか、本気でわかってないのか。どっちでもいいや、  
あたしが怒ってることに気付いてるだけまだだよ。でも、あたしの  
気持ちも考えないようなやつ知らない。

「干渉しないってこと。あたしのこと、気にしないで好きにしたら  
いいじゃない」

わざと嫌な言い方をして、秀司の前を通り過ぎようとしたけど足  
が止まった。秀司は何も言わない。それがあたしを悲しくさせる。

睨むように秀司をみる。表情は硬いままあたしには何も読み取れ  
ない。しばらくにらめっこをしていたけど、あたしが根をあげた。  
視線をそらすとすぐに歩きはじめようとした。

「いっつもそういうけど、美香ってオレにどうしてほしいわけ？」  
勢いに任せて秀司を見た。怒ってる顔だ。

「なんでそうやって、突き放す言い方ばっかするんだよ。確かに美  
香に何でも決められたくないけど、美香がオレに対して不満がある  
なら言えよ。いちいち、オレから離れるような事ばかり言うんじ  
やなくて！」

あたしは握りこぶしを作って怒りを収めようとした。

「秀司があたしを不安にさせるからじゃない！ 分からないの？  
なんで分かんないの？ あたしの事全然考えてくれないからじゃな  
いの？・・・もういい。とりあえずもう寝る」



あたしがそう言うと、秀司は立ち上がって何も言わずに階段を上がっていった。

これって、ケンカかな。ああ、やだな。ずっとこんなことなかったのに、あたしたち病気のことがあってよけいに絆が深くなったと思っただけ、もろかったのかな。

好きだからケンカになる。そう言う人もいるけど、あたしにはよく分からない。嫌な面をみつけてもそれを受け止められる。そう思ってたけど、もしかすると本当に秀司の欠点はここにあったのかも知らない。

あたしに何も話さない。

これほどあたしを不安にさせるものはない。

## 第二十三話 嫉妬（後書き）

メールで感想をくださってありがとうございます！<br>本当に私の励みになります。これからもがんばります。ありがとうございます！

## 第二十四話 勝手

冷静になるとよく分かる。あたしつてめっちゃめっちゃわがままだ。

どうして人の事をもっと考えてあげられないんだろう。昨日の秀司との言い争いなんてまるつきり、秀司を無視してた、最悪だ。謝るべきだと思うけど、謝りにいけない。どうしてこんなに我をはってるんだろう。こんなに自分勝手すぎてたっけ、あたしもっと人に優しくできる子だつて思ってたけど、秀司に対しては違うのかな。ああ、もうやだ。

ケンカじゃないと思ってたんだけど、あたしと秀司の考えてることは違っていたのか、あの日以来秀司とは口をきいていない。会っても目を合わせたりもしない。あたしが見つめても、秀司はあたしを見ようとしない。話しかけようと、口を開いてもすぐに遮られる。避けられるって事、なんか辛い。

「まあ、まあ、今だけだつて。気落とすなよ」

子供扱いして、もっさんはまたあたしの頭を撫でた。最近の相談相手はもっさんか、愛美になっている。二人とも経験豊富なものだから話しやすい。でも、子供扱いはやめてほしいんだけど。

「はあ、そういいますけど・・・本当にこのまま喋らなくなったら、あたしどうなっちゃうんだろ」

思わず頬を手で包んだ。そのまま顔を埋めて、考えるのを止めようと頑張ってみたけど、溜め息を止めるしかできない。それにやっぱりあたしはわがままだ。

自分の事ばかりでどうしてもマイナス思考になる。

「美香ちゃん考え過ぎだつて。もっと軽くしないとだめだよ、あ、肩揉んだけよっか？」

「いいですよ。ああ、なんか気が抜ける」

本当はそうでもないけど、どうせ明日は休みだし。気を楽しむならあしたが適任だ。

それにしても、どうして彼はあたしとは喋らないくせにサヨとはいっぱい喋るんだろ。いつつも夜になると外に出ていくし。あたしってあいつの何よ。本当にどうなるんだか。

やっぱり謝らなくて良かったかもって、二人を見ると思ってしまった。だけどやっぱり、あたしは空回りな事を言った。すつきりするためにも、謝るべきだもんな。っとここで溜め息。

海って結構人のいないイメージがあっただけど、よく考えれば今は夏なわけで、人がいるわけで、泳いでばっかなわけで、海はそんなに広く遠くまで泳げるわけじゃなくて、あたしは・・・水着を忘れてしまっていて。

夏の思いで作りも水着を忘れていては、何にも楽しいことなんてない。あたしってアホだわ。

「美香あ、あたしら向こうまで泳ぎにいくから、荷物見ててくれる？」

ってみんな泳ぎにいくし。民宿から借りたパラソルの下であたしは伸びをしながらシートの上に寝転んだ。周りの景色といえば砂浜には人が埋め尽くし、砂地なんて少ししか見えない気がする。ここって有名なところじゃないけど、人の多い街に近いからよいけいそうなのかも。ビキニの美人やら、目を向けたくない人、あたしの目から見てめっちゃめっちゃ格好いい人とか通るけど、ナンパなんてありえないし。しかもカップル多いし。

遠くまで行ってしまった秀司を見つめる。麻美ちゃんも愛美ももっさんも、楽しそう。っていうか、あたしに気を使う余地はないのか。あたしに一人でいるって、ああそうですか。なんか気が滅入る。「こんなとこに一人でいるつもり、なかったんだけどなあ」

見上げた空は、あたしの心に比べるとかなりの差があった。でも、すがすがしい空はすごく好き。

光が眩しくて、手で目を隠す。そしたらすぐに、秀司の顔が浮かんだ。少し前のあたし達はこんなかんじだった。話すこともせずに、

ずっと他人みたいにしてた。

でも今回はあたしが話しかけようとしても遮られるばっか。しかもサヨの存在が気になってしまうし。

「やんなっちゃう」

声に出せば出すほど、あたしがみじめに思える。本当にみじめ。

その日、あたしは結局日に焼けるだけ焼けて、それだけで終わってしまった。

夜に花火をしようと気を使って、声をかけてもらったけどその気になれなくて、ふてくされたまま部屋に閉じこもった。もう、どうにでもなれって感じ。

あたしってなんでも空回りしてて、どうやってもひとりぼっちになつてしまうのかな。誰かに気を使ってもらっても、今の状況じゃ嫌味にしか聞こえなくなっている。本当は素直になりたいけど、そう上手くできてない。あたしの気持ちを察してくれる様な、都合のいい人現実にはいないから、悲しくなっても人に見られないように泣くしかできない。

今がそれなんだけど。

「美香」

そうそう、そうやって呼ばれるの待ってるわけよ。

「美香、起きてる？」

はっとして顔を上げた。畳の上に寝転んだままだった体を起き上がらせて、部屋の引き戸の所にいる人を見る。秀司だ。妙に声が優しく響いたから別人だと思ってた。

近付いてくると手を差し出してきた。あたしは無言で眺めると、すぐに目をそらした。

「なんで、今更話しかけれんの？」

あたしの目にはいつぱいの涙が浮かんでいて、既に流れてるものもあった。

「秀司、あたしのこと怒ってたんじゃないの・・・？ 愛想つかし

たんじゃ、なかったの？」

手の甲で涙を拭くと、秀司は畳の上に座って、あたしの手をつかんだ。これは、あたしをあやすときにする行動。あたしもそれに慣れて、落ち着いてしまふ。下を向いたあたしの顔を覗き込みながら、ぎゅっと手を握った。

「ごめん」

そう言くと、あたしの手を引っ張って胸の中に招き入れた。がっしりと体を包み込まれ、力強く抱かれる中で自然と涙が溢れた。

あたしの居場所に帰れた。うれしくて涙が出た。

背中に手を回してあたしからも力を込めた。温かい背中が心地よくて、体を寄せた。

## 第二十五話 話解

心臓の音が聞こえる。生きてるってことを、感じさせる。よく心臓の音を聞くと安心するっていうけど、確かにそうだと思った。心臓の音が自分のものと一緒に動く感じがどこか懐かしく思える。これが安心するって事か。眠たい。

「ちよつと、起きてる？」

秀司にもたれかかったまま、あたしは曖昧な返事をした。

「なんで、あたしのこと無視してたの？」

そう、ずっとあたしの事をまったく見ようとせずにいたこと。あたしが、どんな気持ちなのか分かってるはずなのに、サヨいること。どう思ってるの？

「無視、してるつもりはなかったけど」

「嘘、あたし何回も話しかけたのに全部スルーしたじゃん」

見事にすり抜ける感じ。それすら分かってないとは、言わせない。あたしの体を包む腕を一度緩くしてから、もう一度抱き直すとあたしの肩に顔を乗せてしばらく唸っていた。のど元から聞こえる低い音があたしの体を少し震わせた。

「・・・ごめん、考えてしまったから、つい、シカトしてしまった  
というか・・・」

考えるって、何を？

「前と一緒にだ。なんていうか・・・好きだから離したくなかった、みたいな。やつぱり、オレなんかというより他の奴という方がいいのかなって。バカだと思ってるんだろ。マジで悩んでただけど・・・しかも、もっさんといるとこ見たりすると、よけいにそう思うし・・・。あと、美香がオレに対して気を使ってるのが伝わってくるからさ」

声が小さくなるにつれて埋めてくる顔がぎゅっと強く、引き寄せられる。あたしは秀司の頭をなでながら秀司の耳に頬をすり寄せた。

秀司がしたこと、やっぱりバカだっと思うけど愛しく思えて、泣けてくる。

「あたし、ちゃんと話すから・・・秀司もちゃんと話してね。えっと、愚痴とかわがままとか、不満・・・とか」

秀司の笑う音が聞こえた。小さく、クスクスと笑う声。こそばい感じがするけど、あたし達は抱き合ったまま外で花火をするみんなの声を聞いた。すぐ近くでやってるみたい。めっちゃめっちゃ声がよく聞こえてくる。

でも、それよりも心臓の音の方が大きいかも。すごく大切な音だし、しばらくじつくり聞きたいと思う。

「美香、好きだよ」

顔に熱がのぼってくる。恋してる心臓の音は秀司に聞こえてるのかな。聞こえてたらちよっと恥ずかしい。

夏の終わりは少しずつ近付いていた。

毎日日差しの強い日が続いて、あたしたちは屋内にいらながらも暑さとの戦いに明け暮れていた。働くことの厳しさ、お母さんが仕事から帰ってきてすぐに「しんどい」と呟く気持ちが今はすごく、理解できる。それでも楽しいと思える分業なのかな。いや、お母さんもそれを感じるはず。

気持ちいいとすら思える夕立ちの雨。お客だった団体が帰り、明日の新しい団体を招き入れるための準備をしている時間にもあたしは秀司のことばかり考えていた。最近はよく二人で話をする時間が増えたけど、サヨとのことは話してくれない。あんまり気にしなくなっただけ。

「ね、ね、美香」

窓を拭いている時に愛美があたしの腕に肘をこずいてきた。眉根をよせて見上げると愛美はあたしの前で座り込んだ。口元を妙につりあげてめっちゃめっちゃ楽しそうだった。

「青山さんと麻美つきあってるのしってた？」



ええ、つとあたしは大声を上げてしまい、愛美に口元を思いつきりつねられた。驚くだろう、だって青山さんはクールな人で、あんまりあたし達との話に入ってこなくて冷めた人だと思うところもあった。麻美ちゃんと一緒にいる所・・・見たことあったかどうか、疑問だ。

麻美ちゃんも麻美ちゃんで、そんな話してくれたことないし、やつぱり驚きだ。

「うわぁ・・・すごいことになってるねえ。ね、まさか・・・えっちゃんは誰かとつきあったりしてないよね」

ここでいうなら、もっさんとか。まさか、まさか、そんなとんとん拍子にみんなつきあっちゃうわけないない。愛美の顔を見ると妙な表情が伺える。って、嫌な予感。

「実は、あたしちよつと離れた所にある民宿の人たち仲良くなっちゃって、告白されちゃった」

てへって照れられる年齢じゃないだろうに。ピンク色の頬を見るとあたしも浮かれ気分がうつってしまいそうになる。みんな夏なのに、心には春がきてるわけだ。

「へえ、よかったじゃん。つきあうことにしたの？」

「考え中。今日も一応会っ約束してるんだけどねえ。ね、あとで麻美からかいに行こうか、おもしろくない？ サヨも誘ってさ」

いいねえ。とあたし達のはしゃぐと、遠くから薫さんの少し怒った声が聞こえた。当然かな、かなりはしゃいでたし。二人で声を揃えながら返事を返すと、しばらく小さく笑いあった。

ガサゴソという妙な音がしたのは寝てから二時間がたとうとした頃だった。ゴミ箱をあさるような音。そんな音聞いたことはないけど、それに似てる気がする。目をうつすらと開けて音の方向に目を向けるとサヨが見えた。自分の荷物をあさってるみたい。真っ暗な中窓から入る月明かりを頼りに、一人で黙々と荷物を触ってる。

しばらくして真っ白の袋を手にして、薄いパーカーを羽織ると部

屋を出て行ってしまった。トイレでは、ないだろう。出て行つてからしばらく間をおいてからのそのそとあたしは体を起こした。

部屋を出て、トイレまで行く。でも誰の姿も見当たらない。しばらくうつろうつろとしてしていると、秀司が降りてきて、目を合わせるとすぐに玄関の方に目をやった。

「サヨだろ？ たぶん外。オレも行くから、これ着て」

渡されたぶかぶかの上着を羽織ると、あたしと秀司は外に出た。ひんやりとした空気が塩の香りを運んで、暗闇の中で秀司の温かい手だけを頼りに前に足を進めた。

どうして起きたのかとか、サヨの行方を知ってるか、そんなことはどうでも良かった。今のあたしは珍しくサヨの事を心配してる。

しばらく歩くと砂浜に出た。そこに一人ぼっとした白い影が見える。あれがサヨだとすぐにわかった。砂浜に座ってからあたしたちがサヨに近付く頃、急に立ち上がって海に向かつて走り出した。

突然すぎてあたしは見てたけど、秀司は何かを感じたのかすぐにサヨの所に駆け寄った。

海の中に入って行くサヨを押さえると、秀司の腕を払いのけながら狂ったように叫ぶサヨがいる。

訳が分からない。だけど、サヨは何かに訴えてた。それが痛いほどわかってくると、涙があふれた。彼女の叫んでいる言葉が理解できない異国の言葉なら苦しまないでいられたのかも。でもサヨはあたし達と同じ言葉を話して、理解できる言葉で叫ぶ。

「死なせて、もう、生きててもしょうがないの！」

叫ぶサヨを秀司が押さえつける。必死になつてる姿を見る度に二人の姿が重なった。

## 第二十六話 サヨ

砂浜に戻ってきた時には、サヨも秀司も膝下から全部がびしょ濡れだった。秀司に支えられるようにして、サヨが砂浜に腰を下ろすとあたしは秀司にかりている上着をサヨにかけた。顔も髪の毛もすぐ乱れてる。スッピンの顔を気にすることなく、サヨは涙を流し、顔を隠さない。放心状態、それはあたしだけど、サヨもそんな感じの状態になってる。

秀司とあたしがサヨを挟むように座る。肩に手をおいて、サヨの体を温めようとした。しばらくそうやって、海を眺めると、サヨも顔を上げて海を見つめた。遠くを見つめているようで、すぐ側にあるものを見つめてるみたい。

秀司もそんな事を考えてるんだろうか。サヨの様に遠くを見つめながら、すぐ側にある恐怖を見つめてる。あたしが近くにいても、その瞳は映したものをはずさない。

「ごめんね・・・迷惑かけて」

聞き逃してしまうところだった。小さな唸るような音にた声。決してあたしを見ていないけど、あたしは首を横に振った。

「秀ちゃんには、話してただけど・・・美香に見られちゃったし、話しとこうかな」

言った後にサヨは少しだけ笑った。とても悲しく、とても切なく、笑った。

「中学の時に・・・あたしの彼氏が、自殺しちゃったの」

沈黙。静かになっていく空気と、心。冷たく凍る表情。あたしはサヨの肩の上においてある秀司の手をぎゅっと握って、サヨの手を握った。驚くというより、恐怖を背筋からぞわぞわと感じた。真っ黒のものが背中から這い上がってくるような妙な気持ち。

サヨは力なくあたしの手を少し握った。

「あたしね、その頃・・・結核で病院通いだったの。学校も休んで

ばかりで、高校受験はあきらめてた。でも、ドナーが見つかって骨髄移植することになってね・・・学校に戻った時には、彼の姿はなかった。自殺したって事知らなかった。お母さんがあたしが生きる道を選んだ時に、彼の事を言うのは生きる氣力を失わせるって・・・思っ、て、みんなに黙っ、てもらう事にしたいの。でも、あたし、がその時どんな気持ちだったか、少しは分からない？ あたしは・・・地獄にいますみだったのよ」

涙は留まる事をしらない。流れてはすぐに新しいものが一緒に流れようとす。あたしの目にも同じものが溢れて、秀司が手を重ねてくるとすぐに力強く握った。離したくなかった。近くににいるのに、遠い氣がして悲しくなる。空氣にとけていく存在を見つめながら、もう一度サヨを見た。

「毎日、毎日、今もそう。何にも変わらない毎日。あたしだけが時間が止まってる氣がして、あたしだけが彼の事を知ってる氣がして・・・全部分けが分からなくなってきた。それでも、あたしは生きる事を選んだ。でも、生きる事を選べなかった彼を思っ、た、びに、あたしは・・・生きる意味を見失っ、た」

サヨは海をみつめた。

「海は彼と唯一行っ、たデートの場所なの。夜に二人で海を眺めてたんだよ。あの時、こんなことになるってわかんなかったんだよ。彼は、全然平氣そうで、不安なんてなかった。あたしたちは幸せだったんだよ」

力を感じられなかった手のひらから次第に力を感じられてきた。氣持、ちが溢れたのか、サヨは声を出して泣き出してしまった。それを支えるように肩を抱き、あたしは泣ききれ、るまでサヨをあやし続けた。

秀司と目を合わせた時、あたしを見て、いるように、あたしの顔を手前を見、ているような瞳が、心をかき乱す。不安もたまるし、あせりもある。

サヨのように、あたしは残されてしまっ、たのかな。そして、サヨの

ように秀司を思い出すたびに泣いてしまふのかな。死にたいと、思っ  
てしまふのかな。心が狂ってしまふ日もあるのだろうか。

そんなの嫌だ。いつまでも一緒にいたい。秀司があたしの隣に  
いることがあたりまえであってほしい。離れたくないし、離したくな  
い。握りしめた手をいつそう強くした時、まだ秀司のぬくもりを感  
じた。

秀司の話を聞くと、サヨの彼氏に秀司はそっくりで性格までも似  
ているらしかった。それでサヨが急に話をしはじめて、それを聞く  
うちに・・・自分と重なったそうだ。重なりはじめるとどうしても、  
秀司から相談する事もあったし、サヨのからの相談もあったらしい。  
そして、これまでに一度、海で死のうとしていた事もあったらしい。  
それから、ずっと夜は外を見てサヨの様子を見ていたらしく（も  
ちろん、心配して）、あの日もたまたま出てきた所を見て慌てて出  
てきた。そう言う事だという。

サヨは明るくふるまうけど、あたしには時々その背中が寂しく見  
える。

それと同時に、秀司の背中も寂しく見える。あたしはまた同情し  
てるのかもしれない、でももっと深い気持ちをもってる。もっと愛  
しくなってる。

## 第二十七話 始り

「あのときは、えっと・・・取り乱しちゃってごめんね。あと、秀ちゃんの事、美香から取っちゃってごめんね」

サヨとペアを組んで掃除をしている時に、急にそう言われた。慌てて何度も返事をする、サヨは笑ってあたしの側まで来た。

「あたしの事、心配とか、しないでね。そんなに弱いつてわけじゃないんだ。ただ、時々本当に落ち込んだだけ、いつもより悲しくなるだけなの。秀ちゃんも病気だつて聞いたけど、美香・・・あたしみたいにならないで」

言葉には力があつて、瞳はまっすぐとあたしを覗いていた。心の中を見透かす様な瞳は秀司を思い出す。力強くて、意志がはっきりと見えて、あたしの心を捕らえてしまう。

「秀ちゃんが死んでいくのを、見守るんじゃないで、ちゃんと戦つてあげて。あたしは彼の苦しみを理解する事も、救う事もできなかったけど、美香には秀ちゃんを救う事ができるはず。支えてあげてね、ちゃんと側にいて、ずっと離さないように」

サヨの涙に気付いた時にはあたしも泣いていた。同じ事を思っているから、口に出されるとよけいに重いみを感じる。言葉の厚みというか、本当にあたしにできる事をやらなければならないと、実感させられる事が言葉になり心にしみ込んでいく。悲しいくらい現実 is 厳しい。あたしにはとても堪えられないくらい、厳しい世界だ。

「サヨ、ありがとう。・・・頑張るね、だからサヨもがんばって」

涙で濡れた頬にえくぼができる位、サヨは笑い返してくれた。

笑ってる事は、大丈夫な証拠ではない。笑うからこそ、危険な匂いを感じさせ、よけいに不安になる。でもサヨはもう心の平安を取り戻しつつある。あたしの目にそう映るだけかもしれないが、確かに変わっている。

それを見ると、あたしも変わらなければならないと思った。

あたしと秀司のバイト最終日がやってきた。他のバイト達は九月に入ってからもしばらく残っているらしいが、あたしと秀司、それにサヨには学校があるためにバイトを終わる。海の近くに民宿を経営するヒロさんの友人のペンションがありそこでパーティーがあるそうだ。民宿や海に遊びにくる人は毎年そこに集まり、ホームパーティー形式なので気軽に楽しめるらしい。

あたしたちバイトもヒロさんに連れていかれ、そこで打ち上げを一緒にすることになった。他の民宿の人達も集まってくるし、結構人数が多い。愛美ちゃんもいい感じの彼と会える事を楽しみに、服もメイクもばっちりだった。

麻美ちゃんもバイト仲間に青山さんときあつてる事を分かってしまったと、堂々と二人は一緒にいることが多くなった。それがよいにあたし達の噂的にさせている。

とはいえ、あたしと秀司も手をつないでいるから、誰かの噂的にされているかもしれないな。

「美香さあ、もうちつと可愛い服着ろよ」

慌てて自分の服装を見た後、サヨや麻美ちゃん、愛美の服装を見た。なるほど、あたしはパーティーというのには不似合いな服装なわけだ。派手キャミにジーパン。髪なんて短いからいじるところないし。

それに比べてサヨ達はサマードレスなんかを着ちゃって、髪の毛綺麗にまとめられてる。あたしってなんなのさ。彼氏がいるのにこんなに普段着なのはやっぱり女の子としては・・・駄目かな。

「うっさいなあ・・・。気にしてんだから、ほつといてよ」

頬を膨らますと、秀司はばかにして笑った。むかつくけど、なんか可愛い。って、あたし本当のバカだよ。

ペンションには車が何台かと、自転車とバイクも何台があった。中から光が漏れて、数人の笑い声が外にまで響いていた。広い場所だという事は外観を見ればすぐにわかったし、高級感もなく、庶民

のあたしが入っても気兼ねなく楽しく過ごせるんだな、ってことを実感した。

それでも中に入ると豪勢な食べ物があつて、人も思ったよりずつと多かった。やっぱりあたしの姿はおかしく思えるぐらい、派手な格好の人とか、綺麗な服を来てる人が多い。ここに来てやっと、あたしは後悔しはじめていた。

「ね、やっぱりあたしの格好、変かな？」

重いため息を吐き出すと、秀司はあたしの頬に触れた。人がいる時にあたしに触れるのは初めてなきがする。

「別に、気にする事ないんじゃない。美香は、美香だし」

気にさせたのは、秀司なんだけど。というのは伏せておいた。

あたしは秀司から少し離れて料理を取りはじめた。秀司の方は動かずに壁にもたれたまま、じつとしていた。あたしがちらつと秀司を見るとこつと笑った。

料理を選ぶのに夢中になると、サヨが話しかけてきた。また、秀司の方を見ると知らない人と話しているのが見えて、こっちに目を向けたのを見ると、サヨと一緒に手を振った。

影はどこにもなかった。あたしから見ても、秀司は健康そうで、元氣そうで、無理してるなんて感じられない。いつだって笑っているのは本当に心から、自分を楽に出せているからなんだと思っていた。だけど、それは違った。秀司の体を蝕む病気は、深刻なものだった。

ガシャンという音が響き、音のした方に向けば秀司がいた。

手に持っていたお皿が重力に従って、床に落ちる。あたしの瞳に映る秀司に人が寄ってくる頃には、あたしが手放したお皿が音をたてて割れた。



## 第二十七話 始り（後書き）

またまた、評価してくださっておりがとうございます。ようやっぱ話の方が夏休みを終わるところにはいつてきました。＜br＞誤字も脱字もひどいものですが、いつも読んで下さっておりがとうございます。今後ともよろしくおねがいます。

## 第二十八話 無心

民宿を出ていく日、隣に秀司はいない。昨日のうちに秀司は帰ってしまった。

隣にいないことが寂しいよりも、恐い。昨日倒れた時にあたしが立つことしかできなかったのも、恐怖があつたからだつた。秀司の側に行かなきゃならない。だけど、足がすくんで動かない。

初めてだつた。秀司が倒れたのも、孤独に感じたのも、本物の恐怖を味わつたのも。これからあたしってどうなるんだろ。こんなに弱くなつてるのに、今にも泣きたいのに、泣ける場所がない。それがあたしを孤独にさせて、地獄に突き落としていく。秀司が眠る姿を思い出すたびに、あたしの背筋が凍ってしまふ。体中に悪寒が走り、嫌な考えが頭を巡る。闇の世界にあたしだけがいる。あたしだけがその世界の中心。

民宿の外には秀司の母親の車がある。そこに乗る前に、バイトのみんなとヒロさんと香織さんに挨拶をした。サヨとはしっかりと抱きしめあつて、病気の事を話した。励ますしかできないといった感じで、とても笑える状態じゃなかった。

車に乗ってみんなに手を振つた。

どこにも秀司のいない世界。寂しくもあり、真っ白にも見えて、本当は何も変わらない場所。おばさんは何も言わない。あたしも何も話そうとしない。考える事は、秀司の事だけで、出てくるのは涙だけ。空を見ても何も見えない。何も見えない。真っ暗闇で道すら見当たらない。駄目だ。あたし、駄目になつてく。

家に着いてしばらく、車の中でじつと動かなかった。おばさんに聞くことがあつて、行きたい場所もあつた。連れて行ってほしいけど、おばさんはあたしに笑顔を向けたまま「ちゃんと連絡するから」とだけ言つた。

納得しなかった。けど、おばさんの気持ちだつて分かる。車の外に出て、おばさんを見送ると空を見上げてみた。上の世界は綺麗で澄んでいて、明るい。ただ、そう見えただけかもしれないけど。

家に入ると、すぐに部屋に入った。親には疲れたとか適当なことを言つて夕食も抜いたけど、考えるのは秀司のことで、どうしても頭から離れていかなかった。会いたいと思うのが恋なら、こんなにも悲しくなるのは何なのか、今はまだあたしには分からない。

その夜、あたしはまた眠れなかった。

夏休みが終わつて、始業式が始まる数日間。あたしと秀司はつき合つてから初めて、連絡を取らない日々を過ごした。携帯に何度かメールしてみたけど、返事はかえつてこなくて、一日の終わりに必ず秀司の母親から電話が掛かつてくるだけだった。

秀司が今どうしてるかとか、明日はこうだとか、逐一詳しくあたしに知らせてくれるけど、おばさんの声なんかよりあたしは秀司の声を聞かせてほしかった。

入院をすることになったけど、始業式までには退院できるはずだからと、あたしを期待させてくれたけど秀司は来なかった。そしてまた、メールは返つてこなかった。

教室に誰もいなくなるまで、しばらく外を眺めた。今夜もまたおばさんから電話がかかってきて、心配ないわよ。とか、あたしに秀司のことを聞かせてくれるわけだ。そんなの全然うれしくない。秀司も秀司だ。あたしが携帯に何個メール送つてると思つてんだか、見てるなら返事送れつての。

窓のそばにイスを置くと、ため息をついた。  
「美香」

はつとして、後ろを見た。予測はずれ。あからさまにあたしはもう一度、深くため息を吐いた。あたしに近付いてくる、高司は苦笑いを浮かべながら、あたしの隣にイスを用意して座った。

そつえば高司も結構日焼けしてる。あたしよりマシだけど。

「帰らないの？」

「ん、ちよつと直美ちゃんに用があるから。美香は？ 見舞い、行かないの？」

「行けないだけ。秀司と連絡とれないし……あんまり病院には行きたくないの」

秀司の笑ってる顔が見たい。でも病院ってあたしには、あまり明るいイメージがない。秀司が癌だと知らされてからはよけいにそう思ってしまう。

「明日には、来ると思うけどね。……高司って好きな人いるの？」

高司はあたしに微笑みながら頷いた。

「その人と……ずっと一緒にいたいって思う？ 傍にいなかったら寂しいって思う？」

あたしは高司から目を反らして外をみつめた。涙があふれてきそうになつて、止められそうにもない。

しばらく、沈黙があつた。高司との沈黙は、嫌なものではない。時々黙り込んでしまうけど、すぐに話ができる準備の時間の様で特に気を使わなくてすむ。でも、今の沈黙は重たい。いつもどこか違つた。

「片思いに、そんな感情ないよ。一緒にいたいなんて、望み過ぎだと思うぐらいに……現実には厳しいよ。美香みたいに笑ってられない。隙をみつけたら奪いたいと思うから……」

油断はできない。高司は最後にそう言った。

じゃあ、あたしは油断してるの？ 望みはいくらでもあるけど、片思いしている人から見ると贅沢なのか、よく分かんないや。だってあたしは確かなものを手に入れてるもん。あたしは確かに秀司っていう人の隣にいるもん。

堪えてたのに、涙が出てきた。すぐに顔を覆つてなるべく高司に見られないようにした。

「あたし、どうしたらいいのかわかんない。秀司と一緒にいたいけど、秀司はあたしなんか必要じゃないのかも。むしろ、邪魔なのか

もしない。このまま、あたしと秀司って離れてしまうのかな・・・  
どうしよう、会いたいのに、会えないよ」

声が漏れると同じに気持ち溢れ出す。

いつの間にか高司に抱きしめられてると気付かず、あたしは泣いていた。何度も秀司を思い浮かべながら、高司の腕の中で。

「行けばいいだろ、無理してないで、会いにいけばいいじゃん。好きなら、思ったままに行動しろよ」

高司の声に頷きつつも、涙が声をとどめさせた。

結局、あたしって気合いが足りない。会いたいと思ってるのに、病院に行けなかった。

夜になり、いつもの様におばさんから電話がかかってきた。言い訳は、秀司の容態が悪くなってまた二三日退院を引き延ばすとか。あまり耳の奥には届いていない。

傍にいたべきなのだ。でも、あたしを必要としない彼のところに行つて、何をしたらいいのか全然わかんない。あたしはいつでも秀司を想つてるけど、秀司はあたしの事たまには考えてくれてるのかな。きつと考えてないんだろう。あたしなんて、秀司にとって大きな存在なんかじゃない。

それであたしはどうしたいんだっけ？ 会いたい？ なら会いにいけばいい。でも足がすくんで身動きが取れない。じゃあ、他にどうしたい？ あたしがなにかしなきゃ、何もおこらない。それはもうそろそろ、あたし自身感じはじめてもいい頃だ。

傷付いて泣いているだけの女になりたいのか、秀司を支えられる強い女になるのか、あたしはどっちだったっけ。確か、つき合う前は後者だ。でも今のままじゃ前者を選んでしまいそう。

洗面所の蛇口をひねり、水を出すと冷たい水を顔にかけた。それから鏡に映る自分をみて、頬をつねってみる。

痛い。痛みを感じるこの肌はあたしのものだ。  
痛みを感じるのは生きてるからだ。

痛みを感じるのは、死んでないからだ。

あたしの心も死んでない。奥にある熱い気持ちもちっとも冷めてない。なら、考えずに行動すればいいんだ。後のことは考えない。前を向けば後はやってこない。

今より早い時間はない。あたしにとって今は最前線。行くなら、行こう。あたしがしたいように、あたしの気持ちが向く方向へ。

## 第二十九話 別れ

走り出すと、冷たい風が顔を煽った。走るほど、焦らなくていいはずだ。けど、あたしは一直線にのびている道を早く通り過ぎたくて、早くいつも思い描いていた顔に出会いたくて、足が自然と速くなってしまった。

病院に着き、あたしは一呼吸おいてから中に入った。病室まで案内してもらっている間、いろんな顔を思い浮かべた。驚いた顔とか、喜んでうれしそうな顔、反対に妙な笑顔を浮かべ、あたしを歓迎しない顔。どれがいいとかじゃなく、あたしのことを拒む顔はされない。と思った。

病室の前に着くと、しばらく深呼吸をした。周りに人がいるけど、あたしのことを見ている人は少ない。

ゆっくりと開ける。隙間から風があたしの頬をなでる。はじめにあたしに気付いたのは、秀司の母親だった。少しだけ驚いたように目を見開いたけど、優しく微笑みかけてくれた。

「こつち、いらつしやい」

呼ばれて、おばさんの隣にあるイスに腰掛けた。腰掛けてやつと気付いたけど、秀司は眠っていた。点滴をして、顔色はよく見えるけど、やせてる。ここ数日間、秀司になにがあつたのかあたしは知らない。

「倒れてから・・・しばらくは元氣に見えたんだけど、病氣は進行していて、体はもたないのよ」

だからこの通り眠っているのよ。とおばさんは付け加えた。

「病氣・・・そんなに進行してるんですか？」

「・・・思っていたより、進行は遅いってお医者様は言っていたけどね。夏よりずっと体は病巢に犯されてきてるって」

真っ白の布団からはみ出した手に触れて、握りしめた。

「最近いろいろ考えるのよ。秀司の小さかった頃のコトとか、自分

の昔のことまでさかのぼってしまうのよ。秀司がいない間はずっと、写真なんかを眺めたりしてね。今もそう。昔から全然変わらないわ。変わったのは体ぐらいかしらね」

言った後の笑顔には影が見えた。笑っているけど、本当は泣きた  
い。

あたしは秀司の手を両手で包み込んだ。あたしもよく考えるんだ。思い出して泣く日もあるんだ。秀司と過ごした日々を、大切な思い出を。その度にあたしって役に立たないんだって思えるの。

今も眠っている秀司を見てつくづく思う。あたしって一体秀司の何なんだろうつて。

ついに泣き出してしまつと、おばさんは肩に手をのせてしばらく黙ってあたしを泣かせてくれた。おばさんがしばらく外に行くと、あたしに気を使って病室を出ていくと、秀司の顔に近くにイスを寄せて頬に手を当てた。起きないようにそつと触れるだけ。

温かい。それでもつて柔らかい。生きてる。

呼吸をして、あたしと同じ空気を吸つてる。

生きてる。生きてる。秀司はちゃんと、この世界に生きてる。

涙が勝手にあふれて、真っ白のシーツの上に顔を埋め涙を隠した。嗚咽を押さえようとしたけどどうしてもでてくる。生きてることが嬉しいって感じたのは初めてだ。人が生きてるなんてこと、当たり前でこんなに気にしたことない。秀司に触れているだけで、あたしはあたしでいられる。

急にビクツと体がはねて、あたしは手を引つ込めた。秀司が起きてしまったようだ。

ゆっくりと瞼を持ち上げてあたしの方に首を傾ける。じつと見つめて、優しく微笑んであたしの頬に触れた。

「また、泣いてんじゃん」

いつも聞きたかった声が涙をあふれさせる。涙を拭いながら、どうにか話そうと口を開いた。

「会いたかった。メールとか・・・つながらなかったから、あたし



どうしたらいいのかわからなくなっちゃって」

言い訳だったかもしれない。早くここに来ればよかったのに、それを言い訳してる。秀司の目は相変わらずあたしを優しく見つめる。「・・・考えてたんだ。美香と一緒にいない自分ってどうなるのか。平気でいられるのになって、考えてたけど、意外と平気かなって思うと・・・離れてみたくなかった」

こうなるとあたしは心のどこかで思っていた。いつもそうだった、秀司があたしを必要としないときは、あたしと離れたくなかったときだって。

「美香はオレのこと・・・同情してる部分あるんじゃないのか？とかって、前にも言ったよな。そうじゃないって分かってるけど、気持ちちは美香を押しつぶしてる気がする。美香の自由を奪ってる気がした。美香の幸せを願いたいと思ってるけど・・・オレは傷つけるばっかだろ？ だから、はなれよう」

嫌って言いたい。はなれようって、あたしは病気の秀司を見放すってことだよな。無理だよ。あたしは同情の気持ちちはあるけど、ちゃんと好きだから一緒にいるんだ。だから、無理。

なのに言葉が出てこないのはどうしてなの。

「オレは別れたくないから・・・少しだけはなれてみないかってことを言ってるんだけど」

でも、遠回しにでもそれは確実に「別れ」を意味してるんだよ。

「・・・わかった。あたし確かに同情とかしてるかもしれない。だけれどね、ちゃんと好きなんだよ。秀司の事好きだから、ここにいないだよ。それは分かかってね」

優しい微笑みが一瞬だけ悲しく曇った。本当の少しの間だけだったから、すぐにあたしに笑顔を見せた。それから秀司の手があたしの頬をつかんで引き寄せた。

最後のキスにはしたくない。

生きてることを強く感じる唇をあたしはしばらく目をつむって、感じていた。

帰ってからおばさんから電話がかかってきた。あたしはおばさんに秀司に伝えてほしいことを言った。たとえ別れていてもあたしと秀司は、友達でいたいって。病氣のこと、心配させてほしいし、たまには顔を見せてほしい。喋ったりもしたい。あたし達は、縁を切るために別れたんじゃないから、ちゃんと友達としては一緒にいさせてほしい。

それだけ言うと、必ず伝えるわとおばさんは言って電話を切った。ツーツーという音があたしの涙が流れる音のように聞こえる。しばらく受話器を握ったままあたしは泣いた。何度も泣いてるのに、心なんてすつきりしない。あたしが幸せになる方法、秀司なら分かっているはずなのに、あたしを突き放すなんて。

一緒にいるだけで幸せだよ。一緒にいられるだけで、笑えるんだ。泣けるんだ。

それが一番の幸せだったのに。

### 第三十話 ツル

本当の気持ちを覗けたら・・・いいのになあ。

人の気持ちを見透かせる力とか、あつたらまず初めにあたしは秀司の心を覗きたい。ちゃんとあたしを見てくれるのかなとか。つてあたし・・・フラれたんだよね。微妙なとこだけど。

あれからあたしは千羽鶴を折ることにした。よくするじゃん、入院中の親戚とかに「元気になるように」とかって折るじゃん。あれをあたしもしようかなって思ってるの。信じれば、きっと届く。あたしの気持ちも、病気を治したいっていう気持ちも。一つ一つに祈りを込めて。

何日かかるだろ。なんていつても、あたし鶴の折り方とか分からないし。折り紙みたいな細かい作業嫌いだし、苦手だし。不得手なことをするっていうのは、難しい。

「そんなこと言っていないで、さくさくつと作っちゃいなさいよ」

あたしに鶴の折り方を教えてくれないながら、ぶつぶつと文句を言った。あたしだって作れるもんならさくさくつと、早くに完成させてさくさくつと渡しにいきたいんだけどね。

「あたしも手伝うよ。あんまし仲良くないけど、元気になってほしいからね」

言っただのはあっちゃんだ。秀司が入院していることはクラスのほとんどが知っている。でも癌だってことは誰も知らない。あたししかきつと、知らないんだと思う。あたしが勝手にそう思ってるだけで、意外と美沙とかは知ってるかもしれないな。

千羽鶴は少しずついろんな人に手伝ってもらいながら、一羽一羽形が出来上がっていく。真っ白も、赤もオレンジも黄色も。いろんな色が百色ずつ集まっていく。

あたし、決めてるんだ。この千羽鶴全部折れたら、秀司にもう一度だけ気持ちを伝えるって。それで、できるだけ秀司の望みを叶え

ようつて。だから、早くにできなくていい。ゆっくりでいいから、秀司が長く生きられるように時間をかけたい。

病院から退院したのは、学校が始まってから二週間経った頃だった。

クラスに顔を見せた時、あたしと秀司には新たに壁ができた気がした。あたしは友達つてことにしたかった。というのも繋がりが欲しかったただけなんだけど、秀司のことを見放したくなかったただけなんだ。病気の彼をどうして突き放したりしてしまうのか。彼女だったら絶対しない。でもあたしは彼女じゃなかった。

だから友達。だから喋つてもいいはず。じつと秀司を見ていてもいいはずなんだと思った。

でも、目もあわせないであたしなんて無視してる。眼中なしであたしの存在を、教室から消そうとしているようにも見える。あの時よりもひどい。夏のバイトの時、話しかけても遮つてばっかだったあいつ。今は話しかけてもあたしを見ない。見ないで話を遮ろうとせずにあたしをシカトする。

慣れたつていうと嘘だけど。もう、秀司がそこにいるだけでいいつて思う。今は無理してでも秀司のそばにいてやる。嫌がつても、この千羽鶴が折れたら、何かがかわる気がする。あたしの中でも、秀司の中でも、ちよつとした何かがかわると思った。

「吉田と別れたつて本当か？」

直球つていうか、それ誰にも話してなかったんだけど、なんで知ってるの？

「だから、態度というか二人見てたらすぐ分かるし」

高司はあたし用にリプトンのピーチティーを机の上に置いて、ゆつくり机をはさんで前にあるイスに腰掛けた。それから色分けしておいた折り鶴を持ち上げて眺めまわした。

「へつたくそだな」

「おかげさまでね。分かってるでしょ、あたし保育園の頃から折り紙とか苦手だし」

「そうだったけ？ 美香って結構不器用なやつだったってことは知ってるけど」

不器用ね。ま、確かにそうかも。

「今日、バイトないの？ っていうか・・・最近暇そうよね」

「そうかな？ ま、バイトやめてから特になんにもしてないからな」  
ふーん。あたしなんて鶴折ることぐらいしかやることないんだけどね。

「で、なんで別れた？」

高司の手にはいつの間にか赤色の折り紙があった。折りはじめるらしく変な鼻歌を歌っている。

「綺麗に且つ、祈りを込めて・・・折ってよ」

「祈りねえ」

バカにしたように高司は笑った。とはいえあたしもちよつと祈りつて言葉、恥ずかしくなっちゃただけ。

「・・・別れたのは、お互いにちよつとしんどくなっただけ。あたしはまだあきらめてないし、まだチャンスはあるとおもってるからさ」

鶴を折る手を止めてふーんとだけ、高司は言った。

「もし、今、美香のこと好きだって言う奴が現れても・・・美香はそいつになびかないんだ」

そんなの起こりえない話なんだけど・・・っていうかなんでそんなこと聞くんだか。

「なびかないわよ。あたし秀司にしか興味ないし」

言っつてすぐ高司は笑い出した。自分でもちよつと笑いたくなるような台詞だったけどさ、人に笑われるなんかむかつく。

「ちよつと笑わないでよ。だいたい、なんでそんなこと聞くの？」

「そんなの、好きだからに決まってるじゃん」

あたしの手から鶴が落ちそうになった。言葉の意味を読み違えて

るかもしれないと、頭を振って少し笑ってやった。

「な、なにが？」

「とぼけられると、困るんだけど・・・」

そんなこと言っただけで、あたしに対して高司がそんな気持ち持ってるとは思えなかったから。顔が赤くなっていくなのが分かる、焦って鶴が机の上に落ちる。

「とうの昔にあきらめてたんだけど・・・決定的に振られたって感じだな」

高司があたしが途中まで折っていた鶴を拾って手に乗せた。その時にちらっと見た顔が胸を締め付けるくらい、寂しそうだ。

「ごめんね・・・ずっと一緒にいたのに気付かなくて」

気付くべきだった。あたしたちは幼い時から一緒にいて、いつも遊んでた。どんなときも相談に乗ってくれて、へたな女友達なんかよりつき合いやすく、最高の友達。だからあたしは高司の気持ち見てあげられなかった。

泣き出したりしなかったけど、泣きたくはなかった。いつも甘えていた人に、秀司の話ばかりして・・・傷つけてた。あたし駄目なんだ。本当に秀司がいなくちゃ駄目なんだ。

### 第三十三話 告白

千羽鶴が完成したのは、10月にはいった頃で季節的にも寒さが増してきて頃だった。

高司とは今も友達としてつきあっているけど、あたしがそうなかぎくしゃくしてしまう時がある。そういう時は遥が簡単に見抜いてしまい、あたしは少しだけ遥に怒られた。

それから、ちょっと前に美沙に呼び止められてあたしは一発平手打ちをくらった。相変わらず手の早い女の子だ。秀司の傍にあたしがいない事を怒ってるみたいだったけど、あたしにはいい迷惑。それに美沙にしてみればあたしがいない方がいいんだろうに。でも秀司を心配してくれている事がうれしかったから、あたしからは殴り返しはしなかった。

秀司は九月にはいつてから学校に来る回数が減っていった。

あたしはおばさんを通してなるべく秀司の見舞いに行っているけど、話はしない。あたしが声をかけても聞こえない振りをされたり、返事を返すぐらいで会話にならない事が多かった。今は治療が厳しくなり、入院生活が続いている。

秀司の姿を見ると日に日に変わっていつている。声もどこか元気がない。見ないに来る友人のほとんどにあたしみたいな態度をとつてると、励ましでおばさんが言ってくれたことがあった。もしそうなら、悲しい。秀司のやっていること寂しいことだつて、あたしは言つてやりたい。でも、いまのあたしじゃ無理だつて思った。

だけど、千羽鶴が完成した。これを届けた時、あたしはちゃんと伝えるつて決めた。もう一度あたしと秀司の気持ちが向き合えればいいと。

病院につくとすぐに病室の方に足をほこんだ。すこし大きめのバックを持っているのは初めてだから、顔なじみの看護婦さんに何を持っているのか聞かれ、千羽鶴と答えると嬉しそうに笑ってくれた。

おばさんは今日は来れないって言ってた。おじさんが遅くに顔を見せに来るって話だ。

病室の前で立ち止まり二三度深呼吸を繰り返した。それからおもいつきりため息を吐き出して、ドアをノックした。中からは「いい」という秀司の声が聞こえ、あたしはすぐに中に入った。

秀司の目があたしを見てすぐに、別の方を向く。それを気にしないように秀司の傍にあるイスに腰掛けて、鞆を布団のうえにのせた。そして秀司が鞆の方を見たのを確認すると鶴を取り出した。小さめのやつだけど、ちゃんとカラフルな千羽鶴になってる。

「じゃーん、秀司の病気が治るように・・・折ってみたんだけど、どう？　上手いっしょ？」

あたしが手に持った千羽鶴に手を伸ばして秀司はそれをつかんだ。そのまままじまじと眺めまわした後に、あたしの方を見た。

「すごいでしょ？　クラスの人にも手伝ってもらったから、いっぱい気持ちはいつてるからね」

とくに関心のない目が、呆然と鶴を見ていた。その瞳にはあたしはやっぱり映っていない。意志の薄い瞳。あたしが知っている目ではなかった。寂しい瞳。ともいえる。

「あたし、決めてただんだけど・・・これが完成したら、告白しようって」

反射的にあたしの目をみた秀司の表情は驚いていた。

「気持ち、伝えなきゃならないなあって。だって、めっちゃめっちゃ好きなんだもん」

今度は、顔をうつむかせてあたしには見えないところに顔を向けた。

「・・・なんか言つてよ」

無反応。鶴を握る手にゆっくりと力が込められていくのが見えるだけだ。

「何も言わないなら、あたし勝手に秀司の事好きになって、勝手に見舞いとか来ちゃうから」



それでも無反応。ついにあたしは、泣き出してしまった。静かにそつばを向く秀司にはあたしが泣いていることを分らないように静かに。

急にあたしの前に鶴が現れ、秀司があたしの気持ちに答えを出したんだと思った。断るってことなのかな、って思っ、鶴をゆっくり握りしめると胸に抱いた。

「どうしてもあたし、傍にいちや駄目なの？ どうしてか、わかんない。あたし一緒にいたいのに。寂しく、ないの？」

あたしを見ない。答えようもしない。

「答えてよ！」

握っていた鶴を秀司にぶつけた。ぐしゃつとした音がして、すぐに床に落ちる。呼吸が荒くなつて、息がよく聞こえてくる。あたしこんなに怒ってるのはじめてかもしれない。こんなにむかついてるのは久しぶりで、こんなにむしゃくしゃするのも……。

笑いたかった。怒るつもりなかったのに。

「困る」

秀司の声に反応して、顔を上げた。でもあたしを見てはいない。

「オレは、一人でいいよ。誰とも関わりたくないし……もう、傷つけるのも傷つけられるのもうんざり」

「あたしは傷ついたりしない、秀司といえたら、それでいい」

秀司はあたしをみて、力の抜けるような笑みを浮かべた。

「ばか。オレはそんなの嬉しくないよ」

わかつてるよ。秀司の気持ち。あたし痛いほどよくわかつてるからさ。

「傍にいたら迷惑？」

「迷惑」

「勝手に一緒にいても、いい？」

「だめ」

「でも、会いにくるから」

ついに秀司は黙った。あたしは言葉を続けた。好きだってことを

いくらでもわからせたい。秀司の身に染み込むくらい、いっぱいに言ってやりたい。

「好きだよ」

秀司はあたしの方を見て、困った顔をした。それから、あたしの肩をつかんで抱き寄せると、きつく抱きしめた。

「もう、わかった。観念する」

気持ち、伝わったんだよね。やっとあたしの事認めてくれたんだよね。だめとか、嫌とかもう言わないんだよね。あたし秀司の傍で笑ってもいいんだよね。

「よろしい」

あたしも背中に腕をまわして秀司の心臓に近い場所に顔を埋めた。音が響く。胸板は薄くなってるけど、体の細さなんて気にならない。あたしから見れば、秀司全然元気だよ。まだ、死んだりするなんて考えられないよ。

力を込めて抱き合うと、心地よくなって眠ってしまいそうになる。泣き出したくなく瞳をぎゅっと閉じて、秀司にしがみつく。

「本当は・・・会いたかったから。やっぱり離れてると・・・しんどいし、気が変になりそうだったよ」

あたしは小さくばかっとならした。本当に大ばか。あたしも秀司も。

これからはもっと傷付くことがあるかもしれない。でも、ずっと傍にいさせてほしい。生きてる事を一緒に嬉しく感じたい。あたしと秀司の恋は恋じゃなくなっても、まだそれには気付きたくなかった。

## 第三十二話 指輪

「好きっていうのにはイロイロあるよね」

慣れない手つきで一度やってみたかった、リンゴ剥きを病室でやっている、秀司が急につぶやいた。三つあるリンゴのうちの一つを手に取って、パジャマの袖でこすって磨いている。

「どうしたの？ 急に」

「いや、最近暇で・・・、これ読んでもんだけど」

と言って秀司が手に持ったのは、ニコラス・スパークス著の「奇跡を信じて」だ。これはあたしが、秀司の気持ちを勇気づけるために貸した本で、映画にもなりあたしはちゃっかりビデオを買った。いつかそれも、ちゃんと見せるつもりだ。本のことは置いて、どうして秀司がそこまで考えてしまったのかな。

「好きの次が恋で、それが片想いとかの好きになるわけだ」

リンゴはピカピカになりつつあった。あたしは皮を剥く手を止めて、イスに座り直し秀司の言葉に耳を傾けた。

「それで、恋の次は何？」

そこで秀司はあたしにピカピカのリンゴを見せて、にこつと笑った。

「今のオレ達。恋愛ってやつかな」

恋愛ね。でも恋と恋愛の違いは言葉が違うってだけじゃないの？ っていうか、そんな話聞いたことないし。でも、こんな風に話する秀司は不思議。なんか嬉しくなっちゃって、ついつい顔がほころんでしまう。

「何笑ってんだよ」

「別に。あたしさ、恋の次は愛だと思ってたんだけど、恋愛になるのはなんで？」

秀司はあたしが途中まで剥いたリンゴをつかんで、果物ナイフを手に持って皮を剥きはじめた。あたしよりかなり綺麗に剥けてるん

「ただど・・・結構ショック。」

「恋愛って二人で育てるっていうか、二人の気持ちが通じて初めて言えるもんだと思うんだよね。だから、今してんのは恋愛」

「へー、そうなんだ。じゃあさ、どこまでいったら愛になるの？」

少し考えながら、それでも目だけがリンゴの皮剥きに集中していた。やっと剥けた時には短い皮が連なっており、それをクルクル巻いてあたしに手渡した。

「バラっばいだろ」

ってガキかよ。クルクル巻いたリンゴの皮を手で握りしめて、ひざの上に乗せていた袋の中に入れた。

「話の続きは？」

「何だっけ？」

「どこまでいったら愛なのって話」

「・・・知りたい？」

リンゴをかじりながら、汁がしたたるのも気にせずにかじり続ける。いたずらな笑みはあたしには眩しい。

「うん。知りたい、知りたい」

愛なんてよくわかんないけど、愛にもいろいろあるもんだ。家族愛、友愛、恋人同士の愛。愛情とかはいろんな物に対して持つてしまったりするし。あたしたちにはまだ、愛って言葉は早いのかもしれない。でも今の気持ちを表すのにふさわしい言葉は、恋愛とか恋なんて言葉じゃない。好きって言う言葉も間違いじゃないけど、物足りない。

秀司はあたしの頭をつかむと引き寄せてキスをした。唇からリンゴの味がして、妙な感じ。唇がもぞもぞと動きながら、長いキスをした。そう感じたただけかもしれない。本当は数秒の出来事だったのかも。

唇が離れ、こつんと額をあわせると小さく笑いあった。

「もうすぐ誕生日だろ？　どっか行きたい所ある？」

「・・・沖縄いきたい」

なんでまた、という顔をして鼻先にキスを落とした。

「無理だったの。でも、近くまでならいけるかも」

「近くってどこ？」

「とりあえず、沖縄じゃないよ」

わかってるっての。

「ええ！　ここって、近すぎるじゃん！」

思わず大声を出してしまい、秀司がしかめっ面になった。小さく謝ってから、あらためて周りを見渡してみた。

あたしと秀司がいつも行く公園。久々の退院であたしはいろいろ準備してきたけど・・・ここって特になんにもいらなかったんじゃないの。とりあえず二人並んで、ベンチに座った。ベンチから見える景色は思ったより清々しくて、いやじゃない。だけど、あたしが鞆をパンパンに膨らませてきたのってこの為だったとは。

「沖縄に近いんじゃないかって、あたしの家から近いんじゃないの。まあ、いいけどさ」

急に秀司はあたしの手を握った。手の中には堅い物があって、あたしが目で訴えると一度手を離してくれた。それから秀司の手がゆつくりと広がって、あたしが見たかった物が見えた。

指輪だ。金色に光ってる、指輪。

あたしは必死で叫びそうになるのを堪えた。

「え、何これ、どうして？」

「いろいろ、考えてただけだ。暇だったから」

首を縦に何度も振った。恥じらってる秀司の顔が真っ赤になってるのが、可愛く見えた。

「結婚とか、してみる？　まだまだ、結婚できる歳じゃないんだけど」

お互い、１７歳だからそうだよね。っていうか、これ、プロポーズだよ。涙でそう。すごく嬉しい。

「また、泣いてるし」

「だって、嬉しい。・・・でも、あたしたち結婚できないじゃん？」  
秀司はあたしの手を取ると勝手に指輪をはめた。

「籍さえ入れなかったらいいんじゃない。形だけ、やらない？ 大きいもんじゃなくて、小さなもんでいいから」

だめだ、涙止まらない。

「ねえ、これって愛だから？」

あたしの質問の答えだよ。愛ってこと、だよ。

言葉にせずに、秀司は頷いた。

十七歳の誕生日、あたしは愛を知った。

十七歳の誕生日、あたしはプロポーズされた。

十七歳の誕生日、あたしは世界一の幸せ者になった。この上ないほどの愛をもらって、幸せを知った。

もう二度と離したくない。

### 第三十三話 結婚

秀司は時間が経つにつれて、恐ろしくなるほどに体の変化がおこっていた。それを気付いているのは、あたしだけじゃなく、秀司の友人もどこか引つかかる程度には気付いていると思う。おばさんと話すことが増え、少しずつ秀司の命の期限が、迫っていることを気付かされていく。

入院生活を強いられるようになり、本人の強い希望で一時退院をすることもあったが、あたしの誕生日の日が最後といっても過言でない。秀司本人も、それを覚悟してあたしに結婚しようと、持ちかけたはずなのだ。

食事もほとんど喉を通らない日が増え、点滴する秀司の腕を見るたびに、胸が締め付けられる。時々果物を持っていくけど、ほとんど食べてはくれない。言葉がはずんでいるときが多いけど、無理してるようにも聞こえる。

そして、秀司はあたしに冷たく当たるときがある。仕方のないことだと思うが、あたしも堪えきれず泣いてしまう。冷たくされるのは、秀司が苦しくて、どうしても言葉をぶつけたくなるからだ。あたしはそれを受け止めるけど、どうしても溜め込んでしまう。誰かに打ち明けることもできずに、あたしは泣くだけ。

死の恐怖が一体どんなものなのか、あたしは知らない。自殺でもしてみれば分かるのかと思って、屋上に行つて見たことがある。

誰もいない屋上の、フェンスのない丸裸の校舎のテッペン。あたしが淵に足をかけて下を見下ろすと、世界が広がる。だけどあたしは落ちるとしたら真下になり、そこにはただのコンクリートの地面しかなかった。そこに頭をぶつけるのか、側面をぶつけるのか、どれが一番苦しいだろうと考えながら、自分が落ちていくことを想像する。

考えてみても、よく分からない。

落ちてみることは到底無理だ。

怖い。まちがっても、この足を滑らしたくないって思った。

あたしはそこで一步踏みとどめれば、生きることを選べる。けど秀司はどれだけ死から遠ざかろうとしても、お互いが距離を縮める。そしてぶつかって、出会ってしまおうと秀司は恐怖から逃れられなくなってしまうだろう。

あたし捕まって欲しくない。光のあるところにいてほしい。

だけど、病院で会う度に、悲しくなってしまう。優しく笑ってくれるその顔を見れなくなる日は、近いんだと思わされるから。

あたしは片手を挙げて、秀司の手に乗せた。

真っ白のウェディングドレスは着れないけど、真っ白のサマードレスをかわりに着た。ベールはおばさんが作ってくれたレースのちよつと形の崩れたやつ。秀司は真っ白のスーツを着て、いつもとは違っで見える。

小さな小さな教会。いろんな人が来れるほど広くないけど、あたしの友達も秀司の友達も、来れるくらいのスペースはある。お金はおばさんとあたしの両親がだしてくれた。といつても大したお金じゃないけど。

真っ赤な絨毯の上をあたしが秀司を支えながら歩く。ゆっくりじやないと秀司が倒れてしまいそうで落ち着かなかった。

神父の前で止まるとあたしたちは少しだけ距離をおいて、まっすぐ前を見据えた。それから神父の言葉に頷きながら、ちらちらとお互いを見た。

誓いのキス。憧れる言葉。

あたしの前にかかっているベールをもちあげて、一瞬周りを見渡す。静かだけど視線だけがあたしたちを見てる。こんなに人がいるところでキスするのは初めて。緊張する。あたしの肩に手乗せてゆっくりと顔を近付けてくる。あたしもそのスピードに合わせて瞼をおろす。



触れるだけの短いキス。初めてしたキスのような甘酸っぱさ。夢みたいなお世界にいる。あたしも秀司も現実の世界の人じゃないみたい。

全部が嘘で、あたしと秀司は事故に遭う前の普通のカップル。何事もない毎日が愛しくて、一緒にいるだけで幸せになれる。あたしと秀司の未来は明るくて遠く、果てしない道のりが用意されていた。そのなかでいろんな話をして、あたしの将来の話、秀司の将来の話。未来はぜんぜん広がった。

今はどうなんだろう。あたしは自信なくしそうだ。こんなに幸せなのに、悲しい。

祝福されてるのに、隣にいるはずの秀司が見えなくなりそう。

形だけの結婚式が終わると、秀司と一緒に病院に戻った。

秀司はベットのの上に横になると、安心したように微笑みを浮かべた。

「幸せだな。こんなこと、夢みたいだ。好きな人と一緒にいられるってことだけでも、すごいことなのに、結婚までできるって……オレってすごい幸せなやつ。指輪、つけてる？」

秀司の手を握って、指輪の位置を確かめさせた。あたしたちの気持ちの在り処はここにあるんだよって、教えてあげるみたいに。

「あたしも幸せ。嬉しすぎて、また、泣きそう。だけど、泣かないね。今日は本当に幸せだし、秀司には笑ってる顔を見せてあげたいから。……どっちもかわいい顔とはいえないけど」

苦笑いすると、秀司も笑った。ずっと手がのびてあたしの頬に触れた。

「ごめん、本当なら……これからちゃんと幸せにしてやるはずなのに」

秀司は笑ってるけど、あたしは笑えなかった。弱気な発言したのは初めてだ。いつもはこんなこと言わない。ずっと言わないでいてくれると思ってた。あたしのことを考えて、苦しまないように。

「もう、駄目なのかもな。みんな知ってると思う。オレの体とか、心とか弱つてくのが分かるだろ？ 少しずつ、おかしくなってるのが分かる。オレってどんこんんな風にして、自分を見失ってくんじゃないかなって。死ぬって、心臓が止まるから死ぬんじゃないって・オレの心が亡くなったら、もう終わりだよな」

頬に振れる手をあたしは包み込みながら、頬をすり寄せた。

「ごめん。ごめんな、ちゃんと元気になるって言ってたのに、こんな体になつて。こんなに弱いやつだし、美香を幸せにするだけの力はないんだ。オレの力で幸せにするのが、当たり前なのに・・・」

秀司の目から大きな粒がこぼれた。涙。キラキラしてて、光ってる涙は綺麗。あたしの目から流れるやつも、秀司みたいに見えるっていいけど。

「あたし、幸せ、だよ。今、この瞬間、一緒にいられるのがすごく嬉しくて、幸せなんだ」

秀司は知らないんだよ。あたしが秀司の傍にいられるだけで幸せなこと。負い目になつてるなんて感じたことない。秀司はあたしの首に手を回して抱きしめた。声にならない涙が何粒も頬をつたって、何粒も胸を濡らした。

「だから」声が叫んでる。あたしの声なのに違う人の声みたい。「死なないでえ！」

返事はなかった。あたしの泣いてる声が大きいのか、秀司の声が大きいのか、あたしたちはえんえんと泣いてばかりで、せつかく結婚式をしたのに、思い出は涙に染まってしまった。言葉は必要なかった。だけど、あたしはまだ声を聞きたかった。

### 第三十四話 死別

秀司は、酸素マスクをつけるようになった。

スー、ハー、という音がたまに耳障りになるときがある。でも一生懸命言葉を伝えようとしてくれる秀司が、あたしの心の支えになっていた。もし言葉を伝えようとしてくれてなかったら、あたしは日に日に弱ってしまうだろうから。

秀司の心を襲う恐怖は、大きかった。

あたしには決して言わないけど、おばさんが一度だけ聞いたと言っていた、どうしようもなくあたしを苦しめた言葉があった。おばさんはその言葉を聞いてすぐ、堪えきれずに病室を出てしまったと言った。

『はやく、死にたい』

あたしもその言葉を聞いてすぐに泣いてしまった。

「ねえ、秀司。あたしの幼なじみの高司知ってるでしょ？ 高司がね最近、遙かっている同じクラスの友達につき合うことになったの。前はね、高司に好きな人がいて、遙は振られちゃったんだけど、二度目のアタックで見事大成功。これからうまくいくといいんだけどね」

へへへつと小さく笑うと、秀司があたしの手に手を重ねてきた。

これは耳を寄せてくれつつという合図。

「なにになに？ どうしたの？」

秀司はかすれる声を懸命にだして、あたしに言葉を伝えた。口の動きだけでしか言葉は読み取れない。だけど、それがあたしにはいやじゃない。

「む、り、し、て、わ、ら、わ、な、く、て、い、い」  
無理して笑わなくていい。

「お、れ、な、ん、て、ほ、と、け」

オレなんて放つとけ。

それだけだった。

最近ずっとそう。会話はまったく弾まない。秀司の心がそうさせてるんだってことは分かってる。でもあたしには結構きつかったりもした。だけど泣いてばかりの彼女なんてうつつとうしいだけだ。絶対に負けない。秀司があたしの言葉に反応してくれなくても、あたしは何度でも言い聞かせてやるって決めてる。

秀司の手を両手で挟み込んで、握った。それから口元に持っていて、キスをおとす。

「愛してるよ、秀司。・・・愛してる」

顔を向ける秀司は照れくさそうに笑うだけ。あたしに向かって、愛してるって言うてはくれない。分かてる。それを言うてしまうと、何かが崩れる気がするんでしょ。あたしもそれが怖くて、愛には気付きたくなかった。

気付いたら最後。あたしの気持ちは秀司にしかない。

それから時間が流れ、冬に突入した頃のある日、あたしが病室に入ると秀司がスー、ハー、も言わずに眠っている姿を見た。酸素マスクの機械音だけが聞こえて、他に音は存在しなかった。怖くなくなった。青ざめていくのが自分でも分かった。

荷物を落として、秀司に近寄り、脈拍を調べた。手が震えてうまく腕もつかめなかったし、脈がどこか良く分からなくもなっていた。どうすればいいか、自分でも分からなくて秀司の頬をつかんで、少しだけ揺すった。

それからすぐにおばさんが戻ってきた。花瓶の水の入れ替えをしていたらしく、あたしの様子のおかしさに気付く秀司のところに駆け寄った。

ナースコールを鳴らして、医者がすぐに駆けつけたけど、秀司の心臓は音をたてることはなかった。

一瞬の出来事。

おばさんが少しだけ離れてる時間に、秀司は息を引き取っていた。何度も、何度も秀司を呼んで、何度も、何度も体にしがみついた。だけど、涙が出なかった。驚きのせいだったかもしれない。恐怖があたしの中で勝ってしまったのかもしれない。こんなに悲しいのに、涙だけが出てこない。

蒼白な秀司の顔は、あたしが知らない顔。  
冷たい体は、あたしの知らない秀司の体。

あたしを見ない目は、秀司のものじゃない気がする。手を握っても握り返さない。言葉をぶつけても何も言わない。あたしが笑っても、笑い返さない。あたしが泣いても、涙を拭ってくれない。

口を動かして、あたしの名前を呼ばない。あたしのことを好きだとは言わない。

あたしを抱きしめない。

音が失われていく。あたし暗闇にいるのか、真っ白の世界にいるのかわからない。ただ、秀司のいない世界はどちらにも似ている。あたしにとって、何も無いと同じなんだ。音がなくて色がなくて、温度がなくて何も無い。

ここは一体、どこなんだろう。

## 最終話 手紙

真つ黒の行列を見送りながら、じつと空を見上げた。おばさんに頼みこんであたしは秀司の火葬を見届けた。

まだ、信じられない。

青白い肌がだんだんと、赤みを帯びて、目はゆっくりと見開かれていく。そしてあたしを見つめて名前を呼んでくれる。

夢だ。夢の中でしか、そんなことは起こらない。あたしがどれだけ秀司の名前を呼んでも、秀司には届くことがないんだ。あたしもちゃんと現実を見つめよう。

一步一步足を動かす。あたしちゃんと生きてる。ちゃんと息して体を動かしてる。頭も正常だ。秀司がいなくなったら、世界は終わりだと思つてたけど、そうでもなかったみたい。ちゃんと呼吸して、意識があつて考えてる。

ただ、学校に行つても秀司を見つけれない。どこに行つても秀司を見つけれない。秀司の影すら存在しない。あたしの世界には秀司はいろんなところにいるけど、現実世界にはどこにも姿を現さない。世界は滅ぶんじゃなかったんだね。教室の中もそう。秀司がいても、いなくても、何もかわらない。ただ一つだけ席が空いてる。何もかわらなかった。あたしの心も、そう大きく揺れることはない。悲しくて、寂しくて、死にたいと思わないのはどうしてだろう。泣きたいのに、涙がでないのはどうしてだろう。

理由なんて分かつてる。

お葬式からしばらく経つてから、秀司の家に行った。秀司の灰になつた骨を少しだけいたたく約束をしている。あたしの家にも仏壇はあるし、気持ちの整理がつくまではあたしの傍に置きたいと思つたからだ。

おばさんは少しだけ痩せて見えた。目元も赤くはなかったけど、疲れきつて見える。

「あがつて行かない？ 渡したいものがたくさんあるのよ」

もちろん、あたしは頷いて家に上がらせてもらった。仏壇の前で手を合わせて、秀司の顔を思い浮かべながら目を閉じる。笑った顔も、起こってる顔も、泣いてる顔も全部、走馬灯のように流れていく。秀司は最後に何を思っただろう。あたしのことを少しは考えてくれていたかな。

「美香ちゃん、こっち座って」

お茶をだして、座布団も置いてくれた。

おばさんは何冊かのアルバムと、銀色の四角い箱を持っていた。

「これはアルバム。高校に入ってからのがやつんだけど、美香ちゃんにあげるわ。ちゃんと私たちの分はあるから……。それで、これなんだけど」

銀色の箱を机の上に置いて、その蓋をゆっくり持ち上げた。

中には何冊かの大学ノートと、一通の手紙。カセットテープも一本だけある。

「これ、秀司の持ち物ですか？」

おばさんは手紙を手にとると、あたしに読むように促した。

「入院中に、ずっと書いていたのよ。日記と、手紙。それからカセットテープに自分の声を録音してね。あの子が死んでしまっ、五日ぐらい前に、渡されたのよ。私達のと、美香ちゃんの分」

あたしは手紙の封を力任せに開いた。それから何枚かの紙を抜き出して、開けて読んでみた。目だけで読むから、声は出さない。

「美香へ」

これを読んでる頃には、オレは美香の隣にはいないんだろうな。でも、もしかすると隣に並んで一緒に読んで、バカみたいに笑い転げてるのかもしれない。なんていうのは、ただの夢だ。

オレは多分、死んでるんだろう。毎日、目を覚ます時、病室じゃない場所だったらどうしようって、考えるんだ。真っ黒の闇の中に一人だけいるのかもしれないし、おじいちゃんによく聞かされた、

三途の川の前に立っているかもしれない。真実はどうなんだろう。死んだら、どこに行ってしまうんだろうな。

こんな話、暗いな。やめた、やめた。

今だからできる話だけど、オレは美香のこと高校に入った時に、一目惚れしてたんだ。知らなかっただろ？ 当然だな、言ったことなかったもんな。美香に告白されたときは、驚いたけど、めっちゃめちゃうれしかった。このまま、自分がどうにかなるんじゃないかって思えるぐらい、嬉しかった。

毎日、楽しかったよ。いろんな発見があったし、美香といれば自分が別の自分になってる気がした。おかしい話だ。

事故の日、車にはねられた瞬間、一番に美香を思い浮かべたのは、やっぱり好きだからなんだろうな。今も、目を閉じれば思い浮かべられるよ。笑ってる顔が。

あの日から、狂ってきたんだ。時間も世界も、オレも。だけど美香は、美香を見るオレだけは狂わなかった。正常な脳で、正常なままで、しっかりと意志を持ってたんだ。でも手放さないとならなかった。一緒にいても辛いだけだと思ったから。手放すことは辛かったけど、美香はずっとオレを好きでいてくれるって、どっかで思ってた。だけど、そうはいかない。

美香はどうにかして、オレを忘れようとしてたし、オレはオレで美香のことを考えないようにしてた。逆効果だったな。結局好きになっちゃったわけだし。

あれから今も美香には迷惑かけてばかりで、嫌な思いをさせてる。

傍にいてくれることが当たり前になってるけど、それがオレは美香を苦しめるみたいで嫌だった。話もできないオレに懸命に話しかける美香を見るのは、辛くってしょうがなかった。でも、好きだった。

好きすぎて、気持ちがとまらない。

愛がどんなものか知らないけど、恋も恋愛も、言葉では言い尽く



せない気持ちがある。

愛してる。って言う気持ちが、オレの中にはある。

一生ずっと傍にいて、死ぬときも一緒がいい。

いずれは、誰もが死を経験するけど、オレは今死にたくない。今じゃなくて、美香と一緒にいろんなものを見て、いろんなものを経験してから良かった。ちゃんと、守って、愛して、理想の家族なんて言われるような家庭を築いたりして・・・

ごめん。

ごめん。

こんなことなら、つき合わなければ良かった。好きにならなければ良かった。なんて思えない。

勝手だけど、美香と過ごせて幸せだった。それだけで、オレの人生って意味があるんだと思った。短いなんて思わない。オレは美香を残していくけど、悔いなんて一つもない。美香といわれて、死ぬまで一緒にいられるなら、オレは幸せだ。好きな人に見守られながら、死ねたら本望だ。

だから、悲しまないで。泣かないで、決してオレのことばかり考えずに過ごしてくれ。

オレからの願いがあるとすれば、美香が絶対にオレのことで悲しまないこと。必ず幸せになること。それから、オレの誕生日の日だけ、オレのことを思い出してほしい。好きな人がいても、つき合っても、結婚しても。一日だけでいいから、オレの顔を思い出してみてほしい。ただ、それだけだよ。

オレはいつまでも、美香の傍にいるよ。胸にかかるペンダントや指輪になって、美香を見守る。だから、泣くなよ。

愛してるよ、美香。いつまでも、永遠に。』

手紙の中に顔を埋めた。

秀司が亡くなってから、初めての涙だった。それから、あたらしいんなこと勘違いしてたみたい。秀司は死んでないんだ。死んだの

は体だけ。あたしの心にはちゃんと秀司が住んでる。幽霊でも、実体のない精神でもなんでもいい。秀司はあたしに住み着いてる。離れてほしくても、離れていかない、大事な気持ち。

そうだった。愛ってこういうものなんだ。あたし、なんで気付かなかったんだろう。

ありがとう、秀司。あたしに幸せと、愛をくれて。

ありがとう、あなたのことは絶対に忘れない。どんなことがあっても、秀司のことはいい思い出として残るよ。

「カセットテープには手紙と同じことを入れてるって、私達に宛てた手紙にあったのよ。それからね、毎年美香ちゃんの誕生日に素敵なものを送るわ。それと、秀司の誕生日に家にきてね。たくさん、渡したいものがあるから」

おばさんの目からも涙が出ていた。

「はい、楽しみにしてます」

それだけ言うと、あたしはまた泣きはじめた。滝のように涙が出てくる。久しぶりだからかな、こんなに泣いて心を軽くするもんだったんだ。少しずつ楽になれる。あたし、弱くなってない。強くなってるんだ。

全部、秀司がくれたものだよ。

あたしの誕生日。十八になって、受験も大詰め。あたしは楽しみにしていた。おばさんの言葉があたしの期待を膨らましてる。何が起こるのか楽しみ。

玄関のチャイムが鳴って、あたしが急いで玄関に駆け付けると宅配便がきた。間違ったのかと思ったら、差出し人は秀司だ。

四角い箱の中身を開けると、真っ白のケーキ。ショートケーキのワンホールだ。その上にはカードがついていて、中をあけると秀司の字で『ハッピーバースデー』と書かれていた。

あたしは嬉しくて、笑った。秀司の顔を思い浮かべる。あたしの目の前に座って、ケーキを切り分けあたし用に、チョコレートもの

せてくれる。それから音痴な歌をうたって、プレゼントをあたしに差し出すんだ。それは手紙だってりしてね。

本当は、いない。だけどあたしには見える。あたしが狂ってるんじゃない。本当に目を閉じるだけで思い浮かべられるんだ。

「秀司、ありがとう」

カードにキスをするあたしは手紙の入った缶のなかにいた。毎年あたしの家には一通の手紙が届く。

それは幸せの手紙。あたしと秀司が愛し合った、幸せの日々が詰まってる。終わることのない手紙。あたしと秀司の永遠の愛の証。あたしがもし結婚しても、秀司のことだけは忘れない。誰かを愛しても、秀司の愛もかわらない。

秀司の灰をあたしは海にながした。

あたしは狂わない。だけど秀司を思い続ける。だからいつまでも笑っているね。そして、あたしを腕の中に包み込んで、キスもする。それから手を繋いで見つめあう。そしてどっちからでもなく、同じ言葉を口にする。

「愛してる」

どこかで風が吹いて、あたしのほほをすり抜ける。

世界はあたしがいなくても回り続ける。好きな人がいなくなっても回り続ける。世界はあたし一人の力では滅びないし、秀司が死んだからって滅びない。

でも、どこまでも気持ちはまっすぐに伸びていく。

あの空のむこうにあるものを誰も知らない。

でも何かが見えるときがある。あたしの場合、それは秀司の顔だ。笑ってる秀司の顔。

あたし、幸せだよ。ねえ、秀司。

## 最終話 手紙（後書き）

長々と続けてきましたが、最後まで書いて良かったです。 < b r >  
人の死というテーマで書いてきましたが、あまりにも巨大なものを  
書いている気がして、自分の未熟さを思い知らされました。 < b r  
>ですが、たくさんの方に読んでいただき本当に嬉しく思っています。  
< b r > ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0952a/>

---

シャボン玉の恋

2010年10月8日14時07分発行